

# 地名研究会報

第 107 号

平成 21 年 8 月 2 日

鹿児島地名研究会

I. 第 107 回例会 平成 21 年 6 月 7 日 (日) 於鹿児島市福祉コミュニティーセンター  
(出会者) 青柳俊二・今村誠一・入来院重朝・入来院貞子・上野堯史・内山憲一・  
黒田隆信・寺園貞夫・永井富夫・永坂芳彦・西 郁郎・浜田良知・  
肱岡修一郎・平田信芳・柳原孝一・山下東洋・山下 博 (計 17 名)

II. 大日本地名辞書読会 P. 592~P. 593 出水郡・加紫久利神社・武本・知識  
《話題となった地名および事項》 肝付氏・佐多浦・思川・雀が宮・実方・堀之内・  
知識 (知色)・西郷氏の出自・島津応吉邸門前・西南之役の後遺症、

## 肝付氏

平田 判りにくかったことがあれば、質問して下さい。

浜田 593 ページ。伴兼貞の末子行俊の後裔が和泉氏とありますが、末子は兼高で梅北氏じやないかな。

平田 肝付氏の系図は持参していないので肝付氏については会報に整理して載せます。出水を支配したことと和泉氏を名乗りますが南北朝時代、宮方 (南朝方) に付いて島津氏と争い、衰退します。江戸時代に入り島津家 22代継豊の時代、断絶していた和泉氏を復活させて、今和泉島津氏が生まれます。

入来院貞 今の話をもっと詳しく。

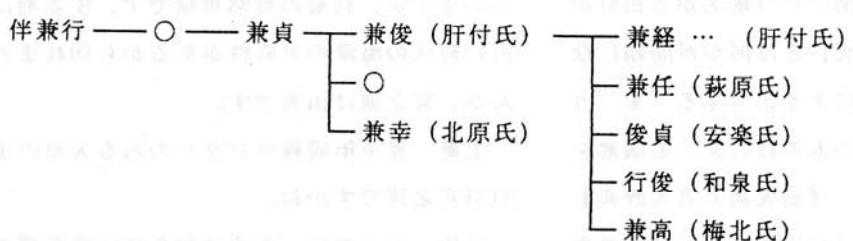
平田 関係のノートを持って来ていないので記憶にあることを概略述べます。

大宰府の役人であった伴兼行が、薩摩国総追捕使となって鹿児島郡神食村 (上伊敷村) に下向するのが 10 世紀半ばのこと (安和 2 年 : 969 年)。彼が来た処が伴據館 (ともじょうやかた・ばんじょうかん) と呼ばれ、伊邇敷神社の裏山になります。

據というのは薩摩據 (守・介・據・目の四等官の三番目)。常識的な表現にすると守は知事、介 (副知事)、據は総務部長でしょうか。そして孫の兼貞が高山に移り、その子兼俊が肝付氏を名乗るのです。その子孫が肝付・北原・安楽・和泉・梅北などになります。

その他、救仁郷・検見崎・岸良・野崎・波見・小野田・津曲・三俣・鹿屋・薬丸などが、肝付一族になります。

肝付系和泉氏が衰退すると、4 代島津忠宗



の次男に始まる島津系和泉氏が登場します。はじめは武家方に属しますが、後に足利忠冬方や宮方になって島津本宗家から攻撃されます。応永24年(1417)、嫡流が断絶しますが、島津継豊の時代の延享元年(1744)、弟忠郷に和泉の家名を継がせ、今和泉郷を与えます。これが今和泉島津家(篤姫の実家)のはじまりになります。

### 佐多浦(さとのうら)

平田 一昨日、吉田町に行って郷土史研究会の人たちに話を来て来たのですが、その時の注文が佐多浦・吉田などはどういう地名かだったのです。

鹿児島県には大隅に佐多、薩摩に阿多があります。アとサは対比的な表現で、例えば、上がる下がる、伊予国には英多(あがた)郷と賞多(さがた)郷があり、阿多と佐多は対照的な表現だと考えていたのですが、佐多浦について注文が付いたので『日本地名索引』アポック社から抽出してみました。サタという地名が全国に20カ所ほどあります。角川日本地名大辞典で調べてみると、「狭田(さた)」と解説するものが多く、小さな田圃に由来する地名でした。最近、「棚田」が注目されていますが、細長い棚田を古語で狭田と言っていたのです。全国的に見ると、山地に開かれた小さい狭い田圃を指すことが判りました。

次に佐多浦・宮之浦という地名が吉田町の山の中にあるので「浦」とは何かが問題になります。浦は万葉集によく出て来る「末(うら)」すなわち梢とか木の枝の先・先端部を

いう表現になります。『鹿児島方言大辞典』を見ると、「ウラ」「ウラサッ」という言葉が出て来ます。さらに「もてきにまさるうら

はなか」ということわざも出て来ました。もてきというのは、木の根っこ。それにまさる先端部はないということ。これは比喩で、もてきは最初の奥さんを指します。男はすぐ目移りして新しい妻を探しますが、最初の奥さんにまさる妻はない、ということわざです。

集落の端っこの方が、ウラ。お宮があれば宮之浦、狭田と呼ばれる田圃があれば狭田浦(佐多浦)と呼ばれると思います。蒲生町と入来町の境に、西浦という地名が山の中にあります。やはり西の端っこという意味でしょう。阿多と佐多を比較したのは、うがち過ぎた考えだったと思い直しました。

寺園 「浦」という地名は「末」に由来するものもあるでしょうが、文字通り地形的なものに由来するものもあると思います。例をあげると、吉田の佐多浦、志布志の四浦・田之浦、郡山の北の方に大裏と小浦という古い集落があります。私はどう思っていたかというと、昔、海進があって海岸に由来する地名かなと思ったりします。

平田 佐多浦の場合、貝殻の堆積層があつて、カキ坂(貝坂)という地名が付いています。そこから松尾城(吉田城)の中の道を通って薩軍が鹿児島の城山を目指しています。西郷さんたちの城山帰還路調査に出掛けた時に「カキ坂」という地名に出会い、貝殻が厚く堆積しているのを見ました。貝塚と思われていますが、貝層の自然堆積です。佐多浦は古い時代の海岸の可能性があるかも知れませんが、宮之浦は山奥です。

上野 青少年研修センターのある大原の手前が宮之浦ですかね。

平田 そうです。大原は和名抄に桑原郡の最初の郷名として登場します。吉田郷は初め

は大隅国所属でした。戦国時代、島津氏に征服され、それ以後、薩摩国鹿児島郡所属になっているのです。(編集時後記:地形図を見ると、宮之浦は鹿児島に流れる稻荷川水系の水源地域で、大原は思川水系と稻荷川水系の分水嶺地域になっている。大原は台地上にあって、赤崩と三重嶺の山麓というか裾野に当たる。宮之浦は大原の南に位置する)。

### 思川・雀が宮・実方

平田 思川(おもいかわ)は吉田から重富に流れています。その川の名は明治10年の官軍の記録に出てきます。ところが江戸時代の地名を探すと思川の名が出て来ません。境川という名なんです。古くはあの辺が薩摩国・大隅国の境だったのでしょう。

さて、歌枕として「思川」というのがあるのです。最近出た『和歌の歌枕地名大辞典』というのを見ると、太宰府天満宮の境内を流れている川が思川というらしく「思い染川」と呼ばれているとのこと。今一つ有名な思川が宇都宮の近くを流れているのです。それも歌枕になっていると思います。

30年ばかり前になりますが、下野国分寺と薬師寺を見るつもりで出掛けました。下野薬師寺跡に行くと弓削道鏡の墓があるので。それが馬鹿でっかいのです。弓削道鏡といえば歴史では悪玉扱いなんですが、下野薬師寺跡にある道鏡の墓を見ると、地元では相当尊敬されたなどの感じを受けました。

今一つ、宇都宮の一つ手前の駅。宇都宮といふとテレビで紹介されるのはギョウザの町なんですが、一つ手前に「雀の宮」があったのです。鹿児島に「雀が宮」があるのですぐさま降りて雀の宮を訪ねました。どういう説明が書いてあったかというと、三十六歌仙の

一人として知られる藤原実方が陸奥守に左遷される出来事があるので。宮中で藤原行成と歌枕論争をやったのです。その時に実方が生意気なことを言って、時の権力者藤原道長の機嫌を損じ「歌枕見て参れ」とことで陸奥守に左遷されるのです。実方は陸奥国に流されて失意のうちに死にます。奥方はそういうことを知らずに、夫の健康が心配で奥州まで行こうと旅立ちます。しかし宇都宮の手前で病気になり倒れます。その時どういうことが起きたかというと、雀がいっぱい奥方の周囲に群がって騒いだと言います。村人が後にどういうことを感じたかというと、奥方が亡くなる時に実方の靈魂が雀となって奥方を守った、と。そこに実方と奥方を祀ったのが「雀の宮」の由来と説明してありました。

鹿児島には実方という地名と実方神社があり、近くに雀が宮という地名もあります。これは和歌に造詣の深い殿様が名付けた地名だなどの見当が付きました。鹿児島には実方・雀が宮・吉野・三船・滝之上などの地名が磯御殿の周囲にかたまっていますが、殿様が名付けた地名と考えてよいでしょう。

回り道をしましたが「思川」も幕末に重富の殿様が名付けた地名との見当が付きます。そうすると重富の領主で古典に詳しかったのは誰かとなると、島津久光以外に考えられないのです。恐らく久光が名付けた地名と思います。

こんなことが宿題になっている時、何気なく息子の本棚を見ていたら「思い川」という文庫本があるので。これは読まなきやと考えて読みました。後藤明生という作家の小説でした。「思い川」を読みましたが、思川という川が全然出て来ないです。テーマは川

の名前でなく、彼は朝鮮に育って中学1年の時に終戦になったという朝鮮の思い出を書いた小説でした。

がっかりしたのですが、ただ一つ感じた事があります。彼の祖父が宮大工で朝鮮のあちこちに神社を建てた。そしてお寺も造ったとの話でした。そこでびんと来たのは、植民地を経営するのに日本人は行った先々に神社を建て、お寺を造ったな、ということでした。満州でも同様に、真っ先に神社を造ったのです。私は満州育ちですが、戦後中国人の暴動が起きた時に、日本人に対する反発の第一の槍玉は、神社の焼き討ちで始まったのです。日本は台湾や朝鮮で近代化のためにいろいろ建設的なことをやったのだと言いますが、思想的に神社を造って被征服民に相対したのです。その先例となるのが、今年さかんに新聞に書かれている奄美・琉球征服四百年のシンポジウムです。奄美でも神社を建てているのです。

これらを見ると、日本の植民地政策は宗教的なものから入って行こうとしたことが判ります。これはヨーロッパ諸国のキリスト教布教に教えられたのかも知れません。他の民族を支配する時には、信仰面から入って行くのだなと感じた次第です。

#### 堀之内

浜田 以前から気になっている地名ですが田上に堀之内という地名があります。堀之内は東京の杉並区や麻布にもあります。田上の堀之内について、よく聞かれます。田上小学校の校長からも聞かれたので、矢上氏が関係するのじゃないでしょうかね、と答えたのです。旧記録にはあるのです。鎌倉時代の史料、文保元年(1317)の薩摩御家人交名注文と

いうのがあります。この鹿児島の欄に「矢上又五郎左衛門舎弟彦五郎、伊敷領主、田上領主、上山領主、荒田庄弁済使兼取納使」。これは兼務していたのだろうか、と聞かれたのですが、即答出来なかったのです。

平田 田上領主の記録があれば、堀之内という地名があつてもよいわけです。

浜田 それ以前の平安末期からあったと見てもいいわけだけど、その前の段階の地名がさっぱり判らない。矢上氏については自信がなかったのだけど、矢上氏が堀之内にいたのは確かだろう、それでよいと回答しようと思ったのですが、先生の見解をお聞きしたい。

平田 鹿児島の豪族について大筋から考えると、①平忠度が薩摩守だから、平安末は平家である。その次は源平争乱の後、源氏に代わります。源氏以前の平氏に近かったのは史料的裏付けはないのだけど、長谷場氏だろうと思います、玉龍高校の所に長谷場館があつたと言われます。長谷場氏が稻荷川河口に鎮守神として春日神社を勧請しています。

②平家が倒れた後、源氏に結び付いたのが惟宗氏で、惟宗康友という人物がいます。史料では藤内康友の名で出て来ることもあります。藤内とは藤原氏の家来：内舎人（うどねり）です。彼は頼朝の御家人となって奥州の藤原泰衡征討に参加します。その功績で鹿児島郡司に任命され、鹿児島氏を名乗ります。鹿児島氏は4代続いて矢上氏に追われます。

鎌倉幕府は源氏の将軍が3代続いて、執権北条氏がその後の権力を握ります。この移行期にあった事件が承久の変(1221年)です。

③その頃、鹿児島氏を追って鹿児島郡を支配したのが、矢上氏でした。矢上氏は北条氏と結びついていたと見てよい。矢上氏の一族

が田上を領有して堀之内に居を構えたと解釈出来るわけです。

④その後、矢上氏を倒して鹿児島を支配するのが島津氏で、島津氏の後楯となった中央勢力が足利尊氏という構図になります。足利氏の時代に何があったか。南北朝の対立があったのです。南北朝対立の中で頭角を現して来るというか最終的に勝利を収めたのが島津氏です。それ以前の南朝に味方した肝付・矢上・谷山・指宿などの豪族は、皆、負けています。ということは、南朝は古い勢力と結び付いていた。北朝は新しい武家勢力と結び付いていた。新しい勢力側に付いた島津氏が薩隅日を支配することになるという展開です。その一環と考えたら、田上に堀之内という地名が残っていても不思議ではないでしょう。

浜田 それ以前の記録が何かあればいいのですがね。

平田 それは残っていないだけのこと。

浜田 それから以前は判らないということでしょう。

平田 それ以前の史料はないのですが、その辺の推移は理解出来ます。矢上氏の没落は東福寺城が落とされる暦応4年(1431)。

浜田 矢上氏の本拠は商業高校のうしろにある催馬楽城。新田神社文書の中にある御家人交名に谷山の次に鹿児島とあります。矢上又五郎舎弟彦五郎、伊敷領主、田上領主、上山領主、と。

寺園 草牟田は昔は伊敷に含まれていた？

平田 そうです。田上は後に武に含まれています。何故私がこんなことを調べたか。鹿児島県に鹿児島という名字がないことで、鹿児島氏の行方を探したのです。久留米の高良大社（筑後国一宮）に行ったら、宮司さんが

中腹に鹿児島氏の邸跡がありますよと話し、こちらから逃げて行ったことが判りました。

浜田 堀之内は館跡だと考えたのです。そこに平安中期以降の豪族の館跡があった。それは矢上氏ではないかと思ったのです。

寺園 堀之内というのは豪族の屋敷跡で、堀を巡らす環濠集落になります。ところが、鹿児島県、とくに大隅半島ではシラス台地の上に堀とか堀之内という地名があります。

笠野原台地とか串良あたりの古い屋敷跡は麓の上級武士たちが開墾した畠があつて、堀の付く集落は古い屋敷の一角に畠を持っていきます。しかも人家の周囲を土塁みたいな土手で囲んでいます。それを「堀」というのだと説明する人もいます。

平田 シラス研究会を組織した桐野利彦先生が、シラス台地の集落は台地の縁辺部につくられるものが多いと言われたことがあります。水を得る便利、登る便利を考えたのでしょうか。そういう集落に「堀」と呼ばれる集落があるとの説明を聞いたことがあります。

ここで休憩し、後は後半で。

#### 知識（知色）

平田 日本各地に矢嶽とか矢筈嶽と呼ばれる山が多いのですが、矢嶽は尖っているので男性、矢筈嶽はへこんでいるので女性を連想した命名です。知識という地名ですが、薩摩国分寺跡から「知色」と刻んだ瓦片が出土したのを見たことがあります。出水の知識と薩摩国分寺の間に何らかの関係があったと見られます。

優れた僧侶を善知識と言いますが、それが地名になるとは考えられません。「チ」とは何か。「チ」は道のことで、チマタは道の分岐点を意味すると考えます。チシキも道に

関わる地名かも知れません。

入来院貞 安楽とか愛甲とか知識とか、他所から来た私から見ると、変った名字の方が多いのですが。

平田 安楽は太宰府天満宮の別当寺が安楽寺です。その莊園：安楽寺領が各地にありました。例えば、天降川流域の安楽温泉、志布志の安楽など。愛甲は相模国愛甲郡に由来します。鎌倉時代、島津氏の家来としてこちらに移って来た名字です。

#### 西郷氏の出自

上野 西郷さんが肥後の菊池氏の流れというのは、どうなんですか？

平田 菊池の分家西郷氏に由来するとの説は、鹿児島県育英財団が小学生向けに出した本にも「西郷さんから十代前の先祖西郷九兵衛が肥後国から移って来た」と書いてあります。西郷さんから十代前の元禄時代は5代将軍綱吉の時、西郷さんが活躍する幕末は14代家茂・15代慶喜の時代になり、約150年の差があります。普通の家系だと 150年は7~8世代、十代なら200~250年。十代前の先祖が元禄時代に肥後国から移って来たというのをつくり話としか思えない。また、その頃に肥後国の武士が鹿児島に移って来て、島津氏に仕えるということがあり得るのか。もちろん島津の殿様が新規に召し抱えたことはあります。それはちゃんと公表しています。こういう者を召し抱えた、皆、そのように心得よ、と。そうでないと皆の俸禄・石高に響くわけですからね。特別な技能の持ち主とか優秀な人材を召し抱えることはあった筈です。しかし、西郷家の先祖にそのような話はないのです。

国分の若宮神社（若宮八幡宮）に残る元禄

12年（1699）の棟札に「郡方西郷八兵衛」の名が出て来ます。元禄時代に国分の神社の棟札に郡方として名を残しているということはあの辺に西郷家の先祖がいたことを物語ります。西郷八兵衛と西郷九兵衛。西郷さんが最初に就いた役職は郡方助（こおりかたすけ）。西郷家は「郡方」と関係があったのです。

太田亮『姓氏家系大辞典』に載っている記事は、肥後国菊池氏の分家西郷氏の子孫という説と、大隅国の大領（多分桑原郡の大領）として酒井勝（さかいすぐる）という人物が宇佐から下向し、その子孫が酒井・溝部・西郷を名乗った。西郷隆盛はその系統との説を載せる。西郷さんがよく日当山（ひなたやま）あたりに出掛けたのは、その因縁もあったのでしょう。

溝辺は昔は桑西濠（くわのさいごう）の境域だった。この西郷をとって名字とした。溝辺空港の前に西郷公園があつて銅像が建っていますが、歴史のいたずらで偶然の一一致になります。

上野 東郷は隼人町に残っている。東郷に対する西郷があった？

平田 桑東郷（くわのとうごう）と桑西郷があったのです。

浜田 桑原郡が広すぎて桑東郷と桑西郷に分かれた。

平田 それは判らない。

浜田 最初は桑原でしょう。

平田 桑原郷そのものの記録は残っていません。以前、桑東郷・桑西郷も「くわひがしごう」「くわにしごう」と読んでいたのですが、中世文書に「さいのかれいがわ」と平仮名で書いた文書があることに気付いて「桑西郷の嘉例川」と判って來たのです。

浜田 福山の佳例川もある。

平田 福山は曾於郡だった。桑原郡大領の家系ですから、酒井氏・溝部氏・西郷氏は大隅国の名族だったのです。わざわざ肥後国菊池氏の分家の西郷氏という必要はなかったのです。ところが、菊池氏の分家西郷説に固執する人たちが、次のようなことを調べてくれたのです。

西郷さんの祖母は大河平（おこびら）家から椎原家に嫁いだ。大河平は飯野の地名で、大河平氏は菊池氏の一族になります。西郷さんは祖母から菊池氏の血が流れていることを聞かされて育った、と。

しかし、先祖や家系をいう時は、男系で見るのが常識です。女系で菊池氏の血が流れていることで話をふくらませて行ったのは西郷さん自身だと思うのです。倒幕運動が盛んな幕末に南朝の忠臣菊池氏の一族だと言った方が、倒幕派・尊攘派の中では幅がきくと思つて西郷さんがそういうことを言った。

上野 菊池を名乗ったのは西郷さん自身？

平田 菊池源吾は吾に源す。

上野 西郷という名字は始良郡に多い。

平田 日当山あたりから出て来ていると思うのです。

浜田 西郷家の話もだけど、島津氏は惟宗氏から名前を変えたということははつきりしているのだけど、島津正統系図によると源頼朝庶長子と定説化している。

平田 歴史家でそれを信じる人はいないでしょう。

上野 西郷さんは加治屋町出身ですが、加治木と加治屋町は共通性があり、加治木の人たちが加治屋町に移ったと言います。江戸時代の初め、あちこちから鹿児島に集めたわけ

ですから、相当数の者が加治木から加治屋町に移った。そのメンバーの中に西郷さんの先祖がいたのじゃないですか。

平田 そこまでは考えたことはありません

上野 そうだとすれば、始羅郡（始羅郡）から移って来ていますから、西郷さんは肥後でなく始良の西郷家になります。

平田 旧記雑録後編（以下、史料に基づき編集時に内容を修正）の中に現和6年（1620）西郷八郎左衛門、十石（後編四、P. 754 寛藩衆中高極帳）。寛永13年（1636）の鹿児島衆中屋敷御検査帳の中に、西郷八郎左衛門上屋敷五せ十二分（後編五、P. 611）、西郷吉左衛門下屋敷四せ廿五分（後編五、P. 627）などが出て来ます。

芳即正「西郷家の墓」敬天愛人第2号にある西郷家系図に寛政11年12月1日死亡の吉左衛門の名があります。また加治屋町の西郷誕生地の面積は4畝25歩になるのではないか。これらを考えると、西郷家は元禄以前から鹿児島城下に居住していたと考えてよい。

上野 加治屋町に移って来た人々の中に、西郷さんの先祖がいたということでしょう。

平田 江戸時代の初めでは、加治屋町とか新屋敷は鹿児島城下では最も新しい居住地域だったでしょうから。なお、上方限は城下町鹿児島の発祥地です。

上野 えらい人たちは、こっちに住んでいた。高麗町から向うは最下級武士の住んだ所

平田 今度書こうと思っているのですが、西南戦争で生き残った幹部クラスに懲役刑が課せられます。その懲役人の出身地を調べてみると、ほとんど西田・武・荒田。甲突川から向うの住人。西南戦争というのは鹿児島城下の最下級武士たちが中心になって起こした

のだということが明らかになってきました。その次に多いのが清水町・稻荷町。これは奥州家島津氏の家来の子孫。いわゆる弟の家の家来たちで、兄の家総州家を滅ぼしたのですが、戦国時代には家臣がいうことを聞かず、どうにもならなくなつて、分家の伊作島津家から養子を迎えて、伊作島津氏に島津本家が移ります。だから、いわゆる上町に住んだ武士たちもうだつが上がらなかつた連中になります。鶴丸城を囲んだ地域に上級武士たちが住んでいたのです。

甲突川右岸の最下級武士たちと比較すると清水町・稻荷町出身で薩軍に参加したメンバーは小さい時に教育を受けた期間が長く、懲役人になって詳しい内容の上申書を書いています。川向うの連中は短い上申書が多い。

#### 島津応吉邸門前

上野 島津応吉邸の門前で西郷さんが腹を切ったのだけれど、島津応吉は薩軍に加わったのですね。そのことを確認したかったものですから。

平田 肥後國甲佐で負傷、5月27日佐土原で死亡。島津応吉、諱（実名）は久能（ひさよし）。判り易くいうと岩崎谷の殿様です。その門前で西郷さんは死んだのです。岩崎島津家の家族は、我が家の前にそんな石碑は建てさせないと言ったので、南洲翁終焉之地」という石碑は岩崎谷の一端つこの方に建てられた。岩崎谷最後の砦のすぐ背後なんです。そのことをはつきりと説明すべきなんですが、過去のいい加減な処置のままなんです。あの石碑の所で死んだのではない。あそこから110年ほど遡らねばというのだけれど、それをはつきりさせない。マンションになってしまった。マンションが建つ時私は

反対して、鹿児島市長宛に二度手紙を書きました。鹿児島市がそれを認めなかつたことをいすれ発表しますが、あの時が一つのチャンスだった。

上野 自治会館があつた時にはっきりさせて、早い時期に記念碑を建てて置けば、マンションが建つことはなかつただろうけど。

平田 あそこは自治会館でなく、共済組合会館があつた。西郷自刃の本当の場所を取り返すのは百年か二百年待たなければならないでしょう。人々は南洲翁終焉之地碑の所で西郷さんが腹を切つたと思っている。観光客は皆だまされているわけです。

#### 西南之役の後遺症

浜田 大山元帥の弟に西郷さんの一人娘が嫁いだのだけれど、その弟は西南戦争後は仕事に就かなかつたのですね。

平田 相当ぐれたのですね。

浜田 ぐれたのですかね。

平田 大山巖が相当尻ぬぐいをしたのでしょう。だから菊子は逃げて、兄菊次郎の下に身を寄せたのです。

浜田 そこらの話は何か書物にありませんか。

平田 そこまでは、あまり可哀そだから書く人はいないのじやないかな。

浜田 郷土誌や従道伝を調べたのですが、詳しくは書いてないので、従道伝なんかも通り一遍で、経済的に援助したという程度のことしか書いていない。私が説明する時、西南之役のトラウマで一生を放棄したと話しております。

平田 それでよいでしょうけど、不幸な生涯を送つた人をあまりほじくりたくないという面もあります。兎に角、鹿児島の人たちが

知らないことも沢山あるのです。私が甲南高校で教えた時に「お前たちは韓国に行って、鹿児島出身と大きな顔をするな」といましました。閔妃殺害事件という、王宮で王妃が殺害される事件がありますが、ならず者たちが王宮に乗り込んで王妃を殺したのですからね。その頃、朝鮮で一番恐れられたのが鹿児島派なんです。鹿児島派と呼ばれる連中が浴衣を着て加治木下駄を履き、肩をいからせ、白鞘を提げて歩いたのです。朝鮮の歴史の中で征韓論以上に恐れられていたのが鹿児島派と呼ばれる連中なんです。その連中は何者かと考えてみると、西南戦争で敗れ、日の目を見なかつた者たちが朝鮮に行って、そういう格好をしたのだろうと思います。それ以外に考えられません。

先程、島津の琉球支配・台湾・朝鮮・満洲の植民地支配を考えると、薩摩が皆、手本になっているみたいです。明治の高官は鹿児島出身が多かつたので、そのような成り行きになつたのだろうと思います。鹿児島はそんな事からの名誉挽回にどうしなければならないかを考える必要があります。

上野 戦争に敗れたら、生きて行く道が判らなくなる、それは当然でしょう。私は戦争の実態を知りたいから歴史を振り返っているのですが、西南戦争では敗北が続くと、出水の人々がまとまって降伏します。その他の所でも同様だったと思うのですが。

平田 その問題でね、出水と蒲生は降伏したことで、お前たちはけしからんという形で爪弾きされたのですけど、官軍側の記録を見れば帖佐隊・谷山隊・喜入隊・知覧隊・頬娃隊・郡山隊・市来隊・串木野隊その他軒並みに数百名単位で降伏しています。そのことが

郷土誌に出て来ないです。

上野 蒲生は早く降伏した人たちもいるし最後まで戦つた人たちもいる。降伏した後、政府軍に加わって戦つた人たちもいる。個人レベルで調べると、いろいろ難しい問題が出て来ます。

平田 先月、上町の人たちと吉田・蒲生の巡見に行きました。蒲生は歴史の古い町で、立派な観光案内のパンフレットが出来ています。西郷さんが泊つた渕上質屋の跡も残つてゐるのですが、観光案内図には触れていないのです。蒲生の人たちには未だにわだかまりが残つていると思われます。それで西郷宿泊地は載せないのだろうと思います。

上野 西郷崇拜の人も多いけど、そうでない人もいるということです。

平田 薩軍の城山帰還路を調べる過程で、いろんな事に気付きました。例えば、宮崎県知事に松形祐堯という人がいましたが、飯野郷戸長だった曾祖父が官軍に協力的とのことで連行され、吉松で斬られている。山田下名の福重という人物が家を巡回詰所に提供したとの理由で蒲生の河原に連れ出して斬っています。蒲生の染川某は官軍に降伏したとの理由で鹿児島に連行、銃殺しています。そういう話があるのだけど、それを喧伝するわけにもいかないし。

上野 130年以上経つているのだけど。

平田 容易にそんな話は消えない。

上野 私が言いたいのは戦争の被害は百年や二百年では消えないことを知るべきだ、ということ。

平田 百年や二百年で忘れ去られるものでない。そういう意味で植民地政策としての神社の話を提起したのです。

上野 始良市が生まれる事にもからむけど蒲生・帖佐は早く降伏したが、加治木は最後まで戦った。その辺の事がわだかまりにあると思うのだけど（笑い）。

平田 始良町の人たちは重富島津氏の家来ですから、久光に従った人たちが多い。そのために薩軍からにらまれて捕えられ、出水の上場で斬られている。そんな人たちの墓が紹隆寺墓地にあります。西南戦争は今から調べなければならない事柄が沢山あります。

内山 敬天愛人の旗を掲げて薩軍の城山帰還路を歩いたのですが、敬天愛人の意味を知らず、何をしてるのという人が多く、歴史を知らない人が多い。

平田 西南戦争というのは、久光・忠義に

付いた上級武士は桜島に立て籠もった。鹿児島城下の下級武士たちは西郷隆盛に付いた。麓郷士の大半は大久保利通に付いた。この三つに分かれたのが鹿児島にとって不幸だった。それがずっと尾を引いている。官軍側に付いた人たちは日清・日露の戦争で司令官になって大活躍します。加治屋町は西郷さんが生まれた所だけど、むしろ大久保さんに付いた人たちが多い。その人たちは鹿児島に帰っていないのです。こちらに残ったのは薩軍に加わった人たちの子孫だから、未だに鹿児島は西郷一辺倒だと解釈出来ます。

次回は8月2日です。会場は1年間、此処で我慢します。

### 信仰地名メモ（3）

#### 住吉神社（すみよしじんしゃ・～じんじや）

主神 底筒男命・中筒男命・表筒男命（住吉三神）。配祀 応神天皇・神功皇后。

住吉大社（摂津国一宮）、住吉神社（長門国一宮）、住吉神社（筑前国一宮）、

住吉神社（壱岐国一宮）、住吉神社（対馬国一宮の時期があった？）。

筒男命の名義：①ゆうづ（金星）のツツで星の意（吉田東伍）、②底・中・表に助詞「の」にあたるツ+津の男の命（山田孝雄）、③対馬の豆駿（つつ）の男の命（田中卓）、④「ツツ」は船の推棹で潮流や航行を司る呪杖（西宮一民）、⑤船の帆柱に基部に船盡を納める筒（岡田米夫）、⑥津々浦々の津々で、港湾の守神（真弓常忠）——『国史大辞典』

#### 鹿児島県（薩摩・大隅）の住吉神社

- |                                |                |              |
|--------------------------------|----------------|--------------|
| 1. 住吉神社 鹿児島、南林寺門前              | 9. 住吉 伊佐市湧辺    | 18. 住吉 垂水市高城 |
| 2. 住吉神社 出水市高尾野                 | 10. 住吉 南さつま市益山 | 19. 西之表市住吉   |
| 3. 住吉稻荷神社 霧島市隼人町住吉             | 11. 住吉 日置市伊作田  | 20. 鹿屋市古前城町  |
| 4. 住吉神社 曽於市末吉町二之方              | 12. 住吉 日置市日置   | 住吉           |
| 5. 住吉神社 始良町帖佐住吉                | 13. 住吉 日置市和田   | 21. 知名町住吉    |
| 6. 住吉神社 屋久島町志戸子                | 14. 住吉 出水市住吉町  | 22. いちき串木野市  |
| 7. 住吉神社 薩摩川内市上甑小島<br>(以下は地名のみ) | 15. 住吉 南九州市別府  | 23. 枕崎市住吉町   |
| 8. 住吉 鹿児島市薬師町                  | 16. 住吉 鹿児島市住吉町 | 24. 鹿屋市東原町住吉 |
|                                | 17. 住吉 鹿屋市南    | 25. 喜界町住吉    |

# 地名研究会報

第108号

平成21年10月4日

鹿児島地名研究会

I. 第108回例会 平成21年8月4日(日) 於鹿児島市福祉コミュニティーセンター  
(出会者) 青柳俊二、今村誠一、入来院重朝、入来院貞子、上野堯史、内山憲一、

川野雄一、築地成郎、寺園貞夫、浜田貞知、肥後吉郎、平田信芳、  
二見剛史、柳原孝一、山下東洋、米原正晃(計16名)

II. 大日本地名辞書読会 P.594~P.595 大家郷(出水郡家)、老松荘、木牟礼城

【話題となった地名および事項】 老松天神、上出水・中出水・下出水の区分、菱刈街道  
薩摩国・大隅国の駅路、駅間距離、大隅国から大宰府へに駅路、古い道  
地名と名字、島津義弘の朝鮮出兵、横座峠、参観交替路、千人塚、  
御神幸、寺や墓地との関わり、寺墓・門墓・屋敷墓、桂庵禅師が来た道  
薩軍戦死者の遺体引き取り、薩軍戦死者の総括、データーベース化、  
住吉神社、西郷吉左衛門

## 老松天神

平田 木牟礼城は島津忠久が薩隅日三国の守護地頭に任じられてから最初に拠点を築いた所です。荘(老松荘)の対岸でもあり、その一帯はいろんな歴史が秘められています。どんな事でも結構です。質問があれば。

? 老松天神というのは今でもありますか  
平田 天神社はあります。

寺園 荘ですね。

平田 そうです。荘にあります。

寺園 荘ですね。宮司は宮内さんですね。  
高校の先生でした。

平田 宮内? マラソンの速い?

寺園 はい。

平田 私も市来農芸で一緒でした。彼が神主さんになっているのですか。

寺園 神主の家に養子に行ったのです。

平田 そうですか。それも知らずに遊びに行っていました。まだ元気でしょう。

寺園 多分。

平田 彼は中央大学の頃、箱根駅伝に走ったと言いました。

## 上出水・中出水・下出水の区分

わいわいがやがやと意見を出し合ったが、武本は上出水村、米ノ津は中出水村、というのが正しかっただけで、他は皆勝手な解釈を述べていた。各人の名誉を傷つけないために『角川日本地名大辞典』『鹿児島県の地名』に基づいて整理しておく。

上出水・中出水・下出水は明治22年~大正2年の出水郡の自治体名になる。

上出水村(武本・上知識・上鯨渕・上大川内・下大川内) ⇒ 出水町(大正6年) ⇒ 出水市(昭和29年)

中出水村(下知識・下鯨渕・六月田・荘) ⇒ 米之津町(大正12年) ⇒ 出水市(昭和29)

下出水村(脇本・江内) ⇒ 三笠村(大正13年) ⇒ 昭和30年、阿久根市に合併。

## 菱刈街道

平田 出水麓に「菱刈街道」という標識が

立っています。すぐ気づきます。勿論歴史的呼び名を示すものです。どういうことかと云うと、出水から菱刈に向かう道のことです。出水から大川内に出る道と、もう一つは紫尾越えがあります。菱刈平野に出たら霧島の北麓を通って都城すなわち島津荘に連なるのです。早い時期からこのルートは開かれていたのです。というのは島津荘が大宰府や京都に連絡をとる道だったのです。この出水郡の端っこに老松荘があつて、その対岸に木牟礼城があつたのです。

島津荘（都城）から菱刈街道を通って木牟礼城を拠点として大宰府や京都と連絡をとつた。島津氏が最初に木牟礼に拠点を築いた意味はその点にあつた。そのルートの意味を気付かせるために菱刈街道という標注は立つてある。江平望『島津忠久とその周辺』は島津荘との連絡路ということを強調しています。

寺園 木牟礼城が此處に築かれた理由は、島津荘との連絡とその外港としての役割があつた？

平田 そうです。

#### 薩摩国・大隅国の駅路

浜田 英祢駅との関係は？

平田 英祢駅を通る駅路は海岸と並行していた。

浜田 英祢駅と蒲生駅を結ぶ線はどうなりますか？

平田 ちょっと遠回りになる。

浜田 荘・木牟礼城などを基本とするのであれば英祢駅は無視できない。

平田 英祢駅は阿久根市山下が有力比定地です。山下は中世の莫祢城（阿久根城）の麓すなわち山下の集落を指す地名で、莫祢城は当然古代の英祢駅に連なると考えられます。

延喜式に出て来る薩摩国の中家に「市来」駅というのがあります。出水市武本の小字市来に当たる説が一般的です。その次が英祢駅です。出水の「市来」から山道を越えたら、英祢（阿久根）を通る必要はないのです。すぐ高城（カ・カキ）：薩摩国府に出てしまします。英祢を通ると遠回りになるのです。

私は出水の「市来」駅説には疑問を持っているのです。何故かというと、日置郡の市来は古來水陸の交通の要衝です。こちら（日置郡市来）の方に駅があつて当然なんです。もう一つ、薩摩国の中路の中に大事な出水郡家が脱落していると思うのです。大家郷というのでは出水郡家があつた所だと思うのです。大家郷はどこにあつたかというと、出水高校・出水工業高校・西出水小学校・出水中央高校などあの辺にわんさと学校がかたまっていますが、西出水一帯に出水郡家があつたに違いないと思うのです。

私は定年後、出水中央高校に非常勤講師として勤めましたが、暇さえあればあの辺を歩き回っていました。この一帯に土器や須恵器の破片が多く散布しています。場所としても、あそこが一番よい。それからいろんな神社がわんさとあります。稻荷とか春日とか八幡。あの一帯の地図に神社の分布を抑えて、土器の破片の散布を考えたら出水郡家があつたことが浮かびあがって来る。此處に駅家もあつたに違いない。

その端っこに「市来」という小字があるのですが、諸国の中家の中で小字の名前を駅に結び付ける例があるのか？もっと大きな地名が残らなきやならないと思うのです。

出水市教委と県教委がこの「市来」の発掘調査をしましたが、水田でしかも川の氾濫原

にあるのです。そこら一帯に土器の破片が散らばっていたのは事実です。

そこから真っ直ぐ山の方、紫尾の方に向かうと、東郷や高城につながる道になります。此處から真っ直ぐ山の方に向かうと横座峠に出てすぐ薩摩国府につながっているのです。

出水郡家（此處に市来駅があつたと仮定）から横座峠を経て一日行程で薩摩国府と連絡出来るのです。英祢（阿久根）を回ると、遠回りになります。英祢を回る道は、もう一つ網津駅を通過しなければならない。

出水郡家—英祢駅—網津駅—薩摩国府と海岸回りのルートになる。

出水郡家—横座越え—薩摩国府 の道が早裁けになる。しかもこのルートは明治の頃は駅馬車が通っていたのです。

薩摩国・大隅国の駅路の中ではっきりしないのは薩摩国の中路でこのルートだと思う。英祢駅を通ったのは海岸沿いのルートになります。そこで先程出て来た蒲生と、えーと、どこかな？

浜田 横野（市比野）。そこら辺りがですね、永遠の謎。

平田 永遠の謎ではない。解けています。（笑い）。此處が島津荘です。都城（板書）：島津駅がありました。それから大隅国府：国分ですね。蒲生、横野、田後そして薩摩国府。何年前かな。まだ10年にならないのですが、財部と国分の境界付近に高篠遺跡というのが出てきました。東回り自動車道の発掘調査によってです。出土遺物に官衙的なものが多いので埋文センターから呼ばれて、これをどう思われますかと聞かれました。鹿児島県埋文センターは、この遺跡を掘って、大水駅ではないかと考えたのです。

大水駅は菱刈郡大水郷とセットで考えるべき、だから、大水駅の結論を出すのは早いと次のように説明しました。私は20万分1図にマジックマークを並べて行ったのです。どういうことが判ったかというと、大隅国・薩摩国の駅家がほとんど一直線に並ぶことが判りました。

薩摩国府—田後駅—横野駅—蒲生駅—大隅国府—（高篠遺跡）—島津駅  
ほぼ一直線に並びます。そうした場合、蒲生と英祢を、どう結ぶのですか？

蒲生—市来—田後—網津—英祢？  
蒲生はやはり薩摩国府と大隅国府の連絡路という捉え方をした方がよい。

英祢駅は、やはり阿久根市山下辺りだろうと思います。

浜田 説が多くて、ある人の話を聞けば、こうだ。別人の話ではこっちだ、と。結局は判らんということでしょう。

平田 いや、そのうちに解けてきます。

#### 駅間距離

寺園 駅と駅との間の距離は、どれくらいですか。

平田 16キロメートル。

寺園 16キロメートル。

平田 厳密には16.02キロメートル。三十里。

飛鳥時代のものさし＝高麗尺  
高麗尺1尺＝35.6cm＝天平尺×6/5  
1步＝35.6cm×5＝178cm  
1里＝178cm×300（歩）＝534m  
30里＝534m×30＝16.02km：駅間距離

#### 大隅国から大宰府への駅路

平田 大隅国から大宰府への駅路について判明していること述べます。大隅国府から溝辺台地に登ります。此處に稻積城が求められ

ます。これは大隅国府の前身：先駆的なものと考えます。それを真っ直ぐ肥後国に向かう所に大水駅があった。此處には大水郷というのがあった。川内川の左岸にあった菱刈郡大水郷です。大水郷には曾木の滝（鹿児島県最大の滝）があった。曾木の滝を見ていると、偉大なる水：大水の地名が生まれるのが自然だと感じます。さらに北上して肥後国の佐敷駅につながる仁王駅の存在が考えられます。これらの駅の間隔が、それぞれ16キロメートル。

後世、この道を通って、豊臣秀吉が20万の大軍を率いて帰って行った。曾木（現在の西太良）で川内川を渡った。此處は徒歩で渡れたのです。川内川と羽月川の合流点の少し下流で、以前宮之城線の鉄橋があった所です。

大隅国府（国分）—稻積城（溝辺）—大水郷（西太良）—仁王—佐敷

これらは大体一直線に連なっています。このルートの史料的手掛かりは、天承2年：1132年の石清水文書に「往古大路字宮坂麓の石躰に八幡の御名顯現」とあることで、大隅国府（国分府中）から宮坂を経由する駅路があったことを示していると考えます。

薩摩国と肥後国を結ぶ駅路の場合は地形上一直線になっていない。網津——英祢は遠回りになります。薩摩国と肥後国を結ぶ駅路で一直線の所は、薩摩国府——（横座峠）——出水郡家への道だけです。

寺園 大隅国府から大宰府へ向かう道の中に仁王と佐敷がある。その他には？

平田 仁王と佐敷の間で省略されたものはありません。佐敷から八代へと、大宰府への道はつながります。

寺園 菱刈に、仁王さんという方がおられます。別に関係はないと思うけど。大水と佐

敷の中間ぐらいの所に仁王というのがある？

平田 そうです。大水と佐敷の間。小川内から亀嶺峠を越えて肥後国に入ります。越えてすぐ、久木野付近に仁王家があったと考えられます。

古い道

米原 先日、栗野の木場に行った時、天神橋という綺麗な石橋があって、肥後の石工が架けたとのことが書いてあったのです。そこ

の説明に「菱刈街道」というのが書いてあり

ました。勝栗神社の所に出る道でした。

平田 それは古い道ですね。

米原 古い道と判ります。そして菱刈の方に向かいます。

平田 それは古道ですね。薩軍の城山帰還路の中でも、古道の目安として石橋が残っている道は古いとのことを書いて置きました。いろんなことがつながって来ますね。菱刈街道というのは歴史的に大事なルートですね。

それは別として、薩摩国の駅路と大隅国の駅路とはどこかでつながっているだろうと思います。古代の道路、中世の道路、近世の道路が、それぞれ別で衰退したというのはあり得ない。道路というのは、政治的な拠点とか経済的な拠点をつなぐわけですから、社会の状態が激変しない限り、そんなに変わらないと思う。現代の鉄道・自動車の発達に伴って、そちらの便利で道路が発達しているわけですから、昔の道が忘れられたのです。

地名と苗字（名字）

二見 加治木には曾木という名字があります。肥後国の地名に仁王があるとのことでしたが、先日、仁王という人に遭いました。地名と人名の関係について教えて頂けないか。

平田 苗字（名字）の95%は地名に由来し

ます。

二見 苗字のない人たちは住んでいる所の地名を使ったと云いますから、元々地名は無視出来なかった。

平田 江戸時代には、農民・百姓に苗字はなかったと考えられていますが、苗字を隠して名乗っていなかっただけのことです。苗字は持っていました。

二見 寺請制度の下で苗字は名乗らなかつた？

平田 それはないでしょうね。

島津義弘と朝鮮出兵

入来院貞 島津義弘が朝鮮に赴く時、佐敷を通って行ったのではないでしょうか。

平田 栗野から菱刈・大口に出て来て、川内に下っていますから、佐敷に出たとは考えられません。

入来院貞 佐敷に出てますよね。

平田 大口で新納忠元が見送っています。その後、川内の御船手は？

上野 久見崎。

平田 久見崎から船出してるはずです。

入来院貞 それは2回目ではないですか。

上野 昔は、川内に船が集められていますので。

平田 久見崎は薩摩の軍港でしたからね。島津勢が九州を征服する時に佐敷を通ったことはありますけど、基本的には川内川を下って久見崎に集まって船出します。

上野 その時には、佐敷は島津の支配下に入ってるのですかね。

平田 佐敷は肥後国。

入来院貞 佐敷から出たというのを読んだことがあります。

平田 島津の勢力範囲は薩摩国でしたから

安全な所は久見崎だと思います。

入来院貞 島津義弘は名護屋に行くのに、当時船を持たなかったと云われていますから船を雇う金もなかった、と。

平田 それは島津氏が戦争続きで金がなかったから、雇う金もなかったということになるだけの話です。（編集時後記：文禄の役・慶長の役、共に島津義弘は久見崎から船出している。慶長の役に際し、帖佐→久見崎→佐敷→平戸→壱岐→対馬→釜山 の経路をとった）。

上野 今出た話。人を雇う金もなかったという話。慶長4年ですから、関ヶ原の前年になります。島津に金がないということで家康が融資して、その借金をチャラにした。その一年後には関ヶ原で対立するわけです。その辺のところが。

平田 そこは、いわゆる駆け引き。

上野 奥さんや子供たちが大坂に人質になっていることなのか。よく判らないのですが、家康が借金を肩代わりしたのは非常に奥が深い戦略。さすがは狸親父だというのが感想です（笑い）。当時、戦争にはよく金銭を使ったということです。

横座峠

寺園 野田から上名を通って横座に向かいいますが、横座峠を流れる川の源流を見ると、昔は野田の方に流れていたのではないか、という気がする。

平田 航空写真で見たら？

寺園 航空写真で見ると、そういう気がする。野田の扇状地がそれで出来たのではないかと思う。今は川は阿久根の方に流れているので気が付きませんが。これは古代を含めての道になるだろうけど、登りがきつい。もう

一つは横座峠の所は今はトンネルだけど、峠はもの凄い坂道で、阿久根の方は急な坂道。阿久根の男女がよく一緒に登ったそうですが物見坂と云われた。

平田 女性たちが男性の品定めをする坂道

寺園 いや、男性が女たちの後から歩いて行く物見（笑い）と聞いたことがあるんですけどね。その日のうちに、どの辺まで行けたものか？今からなら記録をとっておけばと思うのだけど。

平田 古代の官道：駅路は、割にね、山の尾根を通っている。川を渡らない道を通りますから。

寺園 尾根と云えば、野田の上名から谷に入りますよね。横座峠は上方に出れば割合見晴らしも利くし、見通しも立って来る。

平田 私が出水に行っていた時、100年前の西出水小学校の修学旅行の思い出記事を見せられたのです。西出水小学校の子供たちが午前3時に出発して、武本から山道に入って野田郷の山手を通って横座峠を越えます。そして、どこに降りて来るかというと、東郷に降りて来る。東郷に降りて来て、そこから船に乗って下った。川内に下って来て、生まれて初めて蒸気機関車を見て小学生たちは万歳をします。初めて蒸気機関車を見て感激するのです。まだ鹿児島本線の出水～川内間が通っていない頃の修学旅行の話なんです。

寺園 そうすると、横座峠を越える道は官道だったと見てよいでしょうね。小学生が歩いて行ける時代の道だった。

平田 そういう話をつなぎ合わせると、昔の人が越えた道というのが理解出来ます。

阿久根の山下は英祢駅の比定地ですが、山下から少しバックして弓木野（ミキ）を通る道

があるのです。それは石の里程標に刻んであります。弓木野〇〇里と書いてあります。そういう里程標も古代の道を考えるのに重要なと思います。

川野 横座峠は現在トンネルを通って越えるので全然感じが判らないのですけど、トンネルの手前から左に入って行く道が古い道になる。

寺園 私はトンネルの手前から右の方に入つて行く。その道が舗装されていて行き易い  
參觀交替路

上野 私が歩いた參觀交替の道、九州路の方は出水から熊本県以北も大体は歩けるのですが阿久根辺りは道がほとんど知られていない。私が歩いた道は間違いだった。現在やる気満々の市長さんがおられますので（笑い）

というのは、野田に入ると、昔の道が出て来るのである。出水なんかよく判ります。川内もいろいろ判るようにしてあります。阿久根は判らんのです。私は今の国道3号線沿いに歩かざるを得なかったのです。どこか3号線から山手の方に道があるのじゃないかと思ってるのですけど。多分、鉄道線路より山手の方だと思うのです。地図を見ても確認出来ないもんだから仕方なく代わりに3号線を歩くのです。

寺園 西目から鉄道線路を越えて、山下に行く道があります。

上野 阿久根市民病院の所から阿久根高校：今は校名が変りましたが、阿久根高校の脇を通って野田の方に行く。多分それが正しいのじゃないかと思います。阿久根の辺りが一番はつきりしないので、あれをはつきりさせないと歴史を歩く道にはならないと思ってい

寺園 阿久根の市街地からどっちの道を行ったのだろうかと迷われたと思うのですけど一段上有る台地上の道だったと思います。それは折口に出て莊につながります。

平田 鶴川内から桑原城跡を通る道も一つの道でしょうね。

上野 そっちを行く道は大体想像が付いて歩いたのです。川内から阿久根に入って行く間がほとんど判らなくなっている。

平田 そうなって来ると、旅人が歩いた記録が重要になって来るけど、高山彦九郎や高木善助など他所から入つて来た人が割と詳しい記録を残している。もう一つは明治10年に薩軍の北上した道がある。出水筋を通ったグループ、大口筋を通ったグループ、加久藤越えを通ったグループに分かれて肥後に攻め込むのだけど戦争に行く時は張り切っているためか、あまり日記が残っていない。

上野 日記でも戦闘記録はあるけれども、どこで戦ったということが中心で道の記録はあまりない。

川野 陽成：麦之浦から高城温泉を通つて西方へ出る道がある。

平田 あれは古い。

上野 あれが昔、高城から川内へ来る薩摩国への道で、西方までは間違いなく連なる。あの道路に沿つて昔の道がある。

平田 現在、川内とか阿久根の人たちが古道を歩こうと子供たちを集めて歩いているのが、新聞で見かけるけど。

上野 川内はよくしてます。阿久根はしません。判っていないからじゃないか。

#### 千人塚

入来院貞 川内から阿久根に入ると千人塚というのがあります。それは東郷方のもの。

薩州島津家の千人塚があるということをご存知ですか。

平田 何ですか？薩州島津の？

入来院貞 薩州島津の方の千人塚。要するに、東郷と薩州島津の大川合戦というのがあって、それに負けたから降参したというわけですから千人塚というのがあったのです。横座の千人塚というのがあるというふうに書いてあるのだけど、それがどうなのか。阿久根の方にあるのか、行ってみたいと思うのだけれど。

浜田 大川の千人塚？

入来院貞 それは東郷方の千人塚。多くの墓があるということです。その頃の交通路で戦ったのでしょうか。

平田 戦場というのは古くからの官道か間道のどちらかを利用するでしょうから。道路と密接に結び付いている。

話を元に戻します。古代交通研究会長の木下良氏と薩摩国・大隅国の中路を求めて数回歩きました。日本中を歩き回っている彼がどんな点に着目するか、参考になりました。阿久根から西方辺りを歩いた時は、ほとんど山の上でした。西方辺りも薩摩大川辺りでもほとんど下に降りて来なかった。

上野 西南戦争で山の取り合いをしてますよね。私はいつも思うのだけど、薩軍の方は補給が続かないのだから放置しといてもそのうちつぶれる。山の取り合いということは、やはり道とのつながりだろうな、と。そこから道をつないだという状況があったのかなと思うのです。ですから官軍側を調べて行けば道が判るはずだけども、官軍・薩軍共に地名を思い付きのまま付けているので、どこを云っているのか判らない場合もある。地名は地

図に書き残しておかなければ判らない。勿論地図を作つてから、それに基づいて歩けばよいのだけど、実際はそれどころではなかつたようだ。

私は自分なりの地図を作つて歩きます。前以て走り回つて調べて、それでその日に歩きます。

浜田 古道には古道という感じがある。

寺園 歩く前に私は経験によって考える。古代の道もあるだろうし、江戸時代の道もあるだろうし、それから自動車が普及して自動車が通るだけの道になつて、ほとんど歩けなくなつた道もある … (テープ切れ)

#### 御神幸

米原 各地の神社で、今でも浜下りをします。聞いてみると、御神幸は必ず昔の道を基本に道を辿つて行く。新しい道はほとんど通らない。

平田 それはそうでしょう。

米原 神社の御神幸がどの道を歩いて行くのか注目する必要がある。

寺園 そうですね。御神幸が立寄る所は必ず意味がある。

米原 そうですね。これ以上の所はないと思うような所ばかりです。

浜田 私の所は北辰神社を氏神とする清水ですが、神主を先頭に巡幸します。行程は決まっていて決してはみださない。そこから先は、別の神社がやる。

米原 大王面や神輿の行列は、こんな道を通るのかと思うような道を回る。

平田 それは神社の勢力範囲を練り歩く行事だから、そちらの方の要素が大きいと思う

寺園 今出た話を基に、昔の道を地図に落としてみたい。

#### 寺や墓地との関わり

二見 桂庵玄樹がどの道を通つて鹿児島に来たのかと興味がある。

平田 ああいう偉い人がてくてく歩いて来るというよりは船を利用したと思うのです。そうなつて来ると、古来有名な湊というのはしばられて来る。

二見 そこに結構有名な寺があつたから。

平田 そこを頼つて来るはずですね。

二見 結構お寺があつた?

平田 桂庵は臨済宗の坊さんでしょう。寺と云つてもいろんな宗派があるから、他派の寺には泊まらない筈だから。

上野 寺のことで始良郡の文化財審議委員の集まりで話をせねばならないので教えて頂きたい。加治木の墓地の特色は、昔の寺ごとに墓地があることです。それで大体場所も判断し、また廃仏毀釈で影響を受けたことも想像できる。墓地に昔の寺の名が残っている。他の所でもそんな例があるのか。寺の名前が残つた墓地というのに入来はどうなんですか。

入来院貞 入来ですか。

入来院重 入来はほとんど昔の寺の名前が付いています。

上野 ほとんど、そうですか。昔はそこに寺があつたということですね。他にそういう例は?

浜田 寺木戸とかの小字がある。とくに小字を付ける。私の郷里は清水ですが、小字が沢山あります。山なんかにも寺に関係する地名が付いている。

上野 墓地名として付いているのですか。

浜田 いや、小字が優先している。例えば台明寺跡は堂の尾という小字。道路の名も

そうだけど、墓地名として台明寺墓地というのではない。現在墓のある所は台明寺跡ではあるけれど、小字としては鐘付(カネツキ)。

上野 私が気にしているのは、お寺が毀された後も寺の名をそのまま採つて墓地の名にしたのは、お寺に対する何らかの親しみがあつて墓地の名にしたのかなということも考えたものだから。加治木の場合も入来の場合もそうでした。加治木の場合、共通するのは皆が住んでいる平坦な所にお寺が沢山ある。入来の場合も多分そうだろうと思います。山の上にある寺の名の場合は、恐らく墓地としてではなく、寺があつたのだろうと思います。

平田 国分の場合、金剛寺墓地、龍昌寺墓地それから遠寿寺墓地など、結構多い。鹿児島市の場合も寺の名前が残っているのは興國寺墓地がある。消えてしまったのは大興寺墓地それから南林寺墓地。

上野 大興寺墓地はどこにありましたか?

平田 清水中学校々庭。浄光明寺墓地も若干残っている。万寿寺墓地も少し残っているのかな。一番大きかったのは南林寺墓地。それをつぶして唐湊墓地、草牟田墓地、坂元墓地を造つた。鹿児島の場合、廃仏毀釈が徹底していたので寺がなくなり、追い打ちを掛けた結果まで鹿児島市が都市計画の都合上つぶしてしまつたから、寺の名前の付いた墓地は消えてしまつた。他の所は大体残つてゐる。とくに加治木は寺の名がよく残つてゐる。

上野 加治木の場合、幸か不幸か、納骨墓化が今始まつた段階です。深いつながりを持つた人たちの墓そのものが、そのまま残つてゐる。だけど、いずれ納骨堂化も終りを迎えるので後しばらくしたら墓地の様相が変つて来る。

平田 古い墓はなるべく残さねばならない  
寺園 共同墓地化は下場の方だけでなく、高台の上のでも進みつつある。

上野 高台の方には寺の名が付いた墓地というのは一つか二つ。ちょっと見当らない。お寺と共にくなつて行き、今はもう墓地の名前も変つて來ている。

寺園 私の記憶ではお寺の名前もそうだけど、シラス台地の集落がいつ頃出来たか、その場所にいつ頃出来たかを見る場合に、古い墓の年号が開発時を推定する手掛かりになる

上野 上の方にある墓は、ほとんどが明治以降。

浜田 私の郷里では古い年号が見られる墓は活かして残すようにしている。

寺園 台地の上にある墓は、ほとんどが明治以降の墓で、それ以前のものは少ない。

浜田 私は40以上の墓を抱えていました。花筒作りが大変で、早く処分せねばいかんとのことでした。田舎では昭和43年頃から納骨堂造りが盛んになりました。

上野 山の方ほど納骨墓化が進んでいます。私はよく歩き回るのですが、墓に入って行くのは何をしてるのかと見られてやりにくいのだけど、今後は墓のことも突っ込んで調べてみましょう。

浜田 今でも墓参りをすると、古い墓が残つたりします。沢山はありませんけど、江戸中期の墓が残つています。それは楞嚴寺(リョウゴンジ)墓と云います。昔は小学校があったのですが、今は市営住宅になっています。これは郷土誌にも書いてあります。昔は大きな寺だった。楞嚴寺墓には古い墓があつて、それぞれの家で管理していたのですが、今は皆寄せて納骨墓に變っています。

## 寺墓・門墓・屋敷墓

上野 田舎の場合、墓もですけど、小学校とか公民館などはその宅地は元々個人のものではなかった。

平田 鹿児島県の場合、寺の名前の付いた「寺墓」と、門(カト)ごとにある「門墓」がある。門単位で墓地を設けていた。江戸時代門割制度があったから門神(カトガミ)もあったのです。門の神社というものは明治時代に整理淘汰されて村社という形で一つにまとめられて行くのです。それに対して門墓は相当残ったのではないか。もう一つ、川内辺りで顕著なのは「屋敷墓」。個人々々の屋敷に墓がある。その三つの区別を抑えなきやいけないのじやないかな。

加治木や国分もそうだけど田舎に行ったら麓集落の側に墓地がある。国分の場合は遠寿寺墓地とか龍昌寺墓地がある。加治木の場合は安国寺墓地。安国寺のうしろにあるけど、もう藪になっている。結局、子孫が郷里になくなかったから、荒れ果ててしまっている。とくに鹿児島県は受験教育を一生懸命進めてどんどん出て行けということを薦めたものだから子孫が墓の面倒を見なくなってしまって荒れた所が多い。そんな所に西南戦争の戦死者の墓があるのであります。

浜田 墓の管理は普通4代。5代維持出来れば上等という。ほとんどが4代。4代で墓はなくなる。5代というのは知りません。4代までは墓そのものはあります。

米原 5代と云えば江戸時代でしょう。

平田 江戸時代の墓というのは古い。

浜田 5代前は完全に江戸時代。

二見 野田や高尾野辺りは墓地がよく整理されている所です。納骨堂になっている良い

所です。墓は20ぐらいあったものを整理して竿石だけは過去を知るものとして残されています。野田・高尾野辺りには昔の墓がありましたが、だいぶ風化しています。二百年保ったのは良い方です。

## 桂庵禪師が来た道

二見 桂庵禪師の足跡を考えると肥後からあちこちの寺を回って来たのじゃないか。市来にも来ているように思うのです。

平田 まず、市来の寺に来たことが知られています。

二見 市来に来るまでに、どういう道を通って来たのかな、と思ったりするのです。

平田 船でしょうね。

二見 船? 船はどこで乗ったか?

平田 どこで乗ったかは判らないけど。

浜田 自前の船?

二見 陸路は?

平田 陸路は通っていないと思う。

二見 山賊などがいたかどうかは判りませんけども、桂庵の名声を聞いて、家老たちが禪師を招こうと島津の殿様に進言して実現した。桂庵禪師が500年ぐらい前に来た時に薩摩の状況はどうだったのか。

浜田 熊本から来たのでしょう。

平田 菊池に来ていたことは確かですから菊池川河口に近い高瀬辺りから船に乗れば、市来に直通で来ます。

二見 どういうルートで来たか、はっきり判っていないのですね。

浜田 桂庵禪師が高城秋月と逢っていたかどうかは判らない。高城秋月は薩摩でしか知られていなかつたけど、高城秋月とは明から帰国する以前に恐らく交渉があったと思う。高城秋月が明に行っているという伝承について

ても現在検証中です。知っていたということは考えられる。そうすると桂庵が薩摩に来た動機が理解出来る。

二見 それをはっきり言える可能性はありますか?

浜田 島津忠昌の時代ですから、高城秋月は当時の文化人ですから。連歌の席で…。

平田 何らかのつながりがあったのでしょうか。

浜田 連歌で同席することはあるでしょう  
**薩軍戦死者の遺体引き取り**

平田 薩軍戦死者の遺体引き取りにどうしたかというと、山川辺りで漁船を雇って高瀬辺りに行くのです。下船して寺を探すと名前を書いてある墓標があるから、そこで掘り出して連れ戻っているのです。陸路で死骸を棺桶に入れて運んで来るのは大変です。薩摩の遺族は漁船を雇って連れ戻しに行っている。だから案外早く処理しているのです。

処理しなかったのは、鹿児島城下の連中です。他の所は大体誰がどこで死んだというのを皆知っているのだけど、鹿児島城下士は西南戦争の中核でありながら、てんてばらばになっていた。その後始末が悪かった。

## 薩軍戦死者の総括

上野 西南戦争の50年後に、鹿児島新聞が統計を出しているのです。実にはっきりしないのです。数字が合っていないのです。参加した人数については、もう判らないというものが50年後の段階です。50年後のその時は、河野主一郎ですか、彼なんかが中心になってやっているのです。張本人たちがいるのだけど、それでも判らないというのが結論で、死んだ人の数については多分間違いないだろうと自信を持って云っているようですが、これ

も南洲神社の氏名板と見比べると、また違うのです。加治木の人と書いてあるのだけど、郷土誌には出て来ないです。だから、県下一斉にもう一遍調べ直しておかないと、140年祭は、これは大変だと(笑い)思います。

平田 そのきっかけは作ろうと思います。難しいのは、通称と諱(実名)があることです。それが判るのは子孫だけなんです。例えば、名前が辺見十郎太と辺見昌邦とあれば別人と思うけれども、これも通称と諱の違いだけで同一人物なんです。それを区別しない限り人数は確実に抑えられない。これは子孫: 遺族の協力がなければ不可能です。

上野 郷土誌にあったのです。病気になつた人の名前がありまして、この人らしいと思うのだけど確証がない。鹿児島新聞にはっきり書いてある。諱の方が書いてある。それで同一人物だと初めて判りました。だから鹿児島新聞をもう一度全部その関係を見直そうかと思つたりするのですが、相当な時間が必要なだなと思います。

平田 鹿児島の歴史家が取りかからなきや駄目です。

## データベース化

上野 私は思うのですが、南日本新聞が鹿児島のことをデータベース化する。それをしないと、我々が一人々々で調べて行くのは大変な仕事になる。図書館のマイクロフィルムもインターネットに入れさせる。

平田 あのね、県や市が予算を組まなきやと云つて、それを実現させてもね。予算を組まれたら結局は紐付きになって形通りの報告書を作らねばならんことになる。そんな市町村郷土史研究会が多いのです。そんな紐付き

はご免だ。行政に頼ろうとは思わない。

浜田 日清戦争や日露戦争は各地に石碑があります。ところが西南戦争のものはない。

平田 西南戦争の碑は鹿児島市以外は、意外にね、きちっとまとめています。

上野 入来もありますね。

浜田 地方の文書なんかを見ると、あれは行政とか、そういうもので建てたわけじゃないですね。今の人たちは行政がやれとか行政に金を出せとか云う。当時は有力者が資金を出した。明治にはそんな社会的制度があったのかなと思う。

米原 西南戦争戦没者慰靈碑とか記念碑は古いのはいつ頃から建ち始めるのですか？

平田 早いのは三年忌に建っている。二年後です。

米原 あゝ、その頃ですか。

浜田 監獄に入っていた人たちは、三年でしょう。出て来た後。

米原 吉松で以前見たのは明治14年だった

平田 言っちゃ悪いけど郷土史を書く人が西南戦争の戦死碑や記念碑を見ていない。それで西南戦争を書いている。ちょっと無茶だなと思う。

浜田 西南戦争後の明治12年頃、鹿児島市内には各地に舎（学舎）が出来ます。舎を作る資金も皆有志が集まって出している。現在そんな人たちがいないことも問題だ。

上野 その舎ですけど、鹿児島新聞の統計は各舎ごとに出している。

平田 十八結ぶ健児の舎が出している？

上野 ところが、それが不明とある所があるものだから正確に出ていないのです。50年後に不明だったわけですから、それを今調べるのは至難の技だと思うのです。

浜田 加治木にも歴史家が残っていたのでは？

上野 鹿児島市以外は全部市町村でまとめている。

浜田 舍的なものは地方にも残っていました。加治木高女なんかも、全部有力者の寄付ですから。

山下 今出た西南戦争の戦死者のことを、新聞社に引き受けさせて、まとめさせてみたら、どう？

平田 南日本新聞社の購読料は3千円ですからね（笑い）。ボランティアで僕なんかにやれと言えば、喜んでやるのですよ。これはやっぱり後でどのように利用するということではないといけない。今一貫してやれるのは、西南戦争関係だけです。

鹿児島新聞を飛び飛びに見て行くわけですから。後を継ぐ新聞社として、責任を以てデータベースを作るべきではないかと思います。他の新聞社のデーターも同様です。

彼らが取り組みたくないのは第二次世界大戦の整理です。記者らは勇ましい言葉を並べていますけど、第二次大戦よりも明治をまずしろと言いたい。それを南日本新聞社の面子に関わるということを私は言わない。

平田 私が西南戦争戦死者のカードを作っているのは、130年経ったものを何とか目途をつけなければと思って、やっているだけのことです。負け戦だったから放置されていたのです。それと同じ事が第二次世界大戦でも言えます。負け戦だから、かかよごちやなか（関わりたくない）のです。

上野 第二次大戦のは整理されているのは？

平田 石碑に名前は書いてない。（軍人恩

給や遺族年金についての整理はなされているだろうが）。

米原 沖縄戦の戦死者・犠牲者の名前は調べられて石に刻まれているでしょう。琉球新報はそれを取り上げました。南日本新聞に申し込んだのですが、それはしないことわったのです。

二見 南日本は2回ぐらい載せた。

上野 新聞社は、NIE (Newspaper In Education) の時代で、新聞を使った授業をと呼ばれています。今の新聞だけでなく、どの新聞の記事も参考になるわけだから、データベース化するべきなんですがね。そういうことを言って下さい。

二見 新聞社の金の使い方がちょっとまずいですよ。文化的事業に具体的に金を出してくればね、ボランティアはいくらでもいるわけです。

米原 今の南日本新聞社は記者が枯渇して文化的事業を側面的にリード出来なくなっています。

上野 そこにある施設もね、今まで協力してくれなかったのかなと思っている。

平田 どこ？

上野 西郷さんが眠っている所にある施設  
平田 あゝ、西郷南洲顕彰館。

上野 西郷さんの顕彰よりも西南戦争の検証をもうちょっとしてくれんかな、と。

平田 熊本日日新聞と南日本新聞を比べると、熊日はいろんな文化事業とか歴史に取り組むけれども、南日本はそれが稀薄。だから在野の研究者たちが活動して引っ張り出さなきや仕様がない。

上野 青潮社ですか、『戦袍日記』とか『薩南血涙史』とか、いろんなのを精力的に

出している。あすこの印刷が新しいので、スキャナーで写してパソコンにどんどん打ち込めるのです。問題は私がそれを皆さんに配ったら、著作権法違反になりますから、そこを何とか諒解を得る方法はないのかな、といつも考えます。

浜田 私なんかは他人のものを利用出来ないことに同情しますけど、著作権法でいくと商売せにやよい。そういうことで、自分で利用するのは関係ない、と。

上野 今は学校でもインターネットのものは授業でも使えない。取ったら使えない。使うと、著作権法違反になる。非常に難しくなった。

浜田 私は平然と使っている。隠れて使っている。

米原 青潮社のこと。鹿児島で当然出すべきものが、全部熊本でやっているとのことです。『三国名勝図會』の複刻も熊本でするわけです。

上野 『三国名勝図會』は、国会図書館で明治の刊本でデータベース化されている。私はそれをコピーして利用しています。

米原 あゝ。

上野 今はいろんな本がデータベースで利用出来ます。『征西戦記稿』も全部取れます。今はインターネットで多くの事柄がデータベース化されています。同じ作業を県庁や新聞社がしないのかな、と思います。

住吉神社

平田 時間が来ましたから、後4分ぐらいで終りにしたいと思います。今日配ったのは107号です。特色的なものを説明しておきます。

一番後に住吉神社の名前を掲げてあります

が、7番目までは社があるものです。鹿児島市の南林寺門前にあった住吉神社は、現在、船魂神社に名前が変っています。

鹿児島県で最も注目すべき神社は、4.末吉の住吉神社です。これは大正・昭和の頃、大隅半島では唯一の県社でした。何故山の中にある住吉神社が県社なのか。結局、櫛ヶ原(アリカハラ)が末吉にあったという説が『三国名勝図』以来唱えられて來たので、県社になつたのだろうと思います。住吉神社というのは本来は航海神ですね。海の神様です。

それからこの地名表の21番目、知名町の住吉から以下、いちき串木野市の住吉、枕崎市の住吉など。これらは「住み良い所」ということで戦後に名付けた名前なんです。

? そうですか。

平田 はい、枕崎も串木野も。

浜田 隼人の住吉は?

平田 住吉稻荷があります。摂津国住吉稻荷で島津家初代忠久が生まれます。

#### 西郷吉左衛門

平田 7ページをちょっと開いて下さい。  
6ページ～7ページに「西郷家の出自」が書いてあります。そこを見ると、元和6年(1620)に西郷八郎左衛門、寛永13年(1636)に西郷八郎左衛門と西郷吉左衛門という名前が出て来ます。その西郷吉左衛門の下屋敷が四畝廿五歩。これが現在の西郷南洲誕生地に面積的に大体合致するのではと思います。

しかも芳即正先生が書かれた西郷家系図に寛政11年(1799)死亡の西郷吉左衛門の名前があります。この吉左衛門は南洲翁の伯父さんぐらいの位置になります。昔は名前の踏襲が一族によく見られますので、系図の上からも与えられた土地の広さからも、江戸時代初めに西郷家が鹿児島城下に存在したと考えられます。「十代前の元禄年間に肥後から移って来た」との説はこれらのデーターで完全に否定出来ます。

今日はこれで終ります。

# 地名研究会報

第 109 号

平成 21 年 1 月 6 日

鹿児島地名研究会

I. 第 109 回例会 平成 21 年 10 月 4 日 (日) 於鹿児島市福祉コミュニティセンター  
(出席者) 青柳俊二・今村誠一・入来院重朝・入来院貞子・上野堯史・内山憲一・  
川野雄一・寺園貞夫・永井富夫・浜田良知・平田信芳・二見剛史・  
柳原孝一・米原正晃 (計 14 名)

II. 大日本地名辞書読会 P.597~P.598 勢度郷・黒之瀬戸・脇本・波留・阿久根

〔話題となった地名および事項〕 滌 (すき) という地名・城下町鹿児島の由来・

鎌倉御家人の九州下向・生別府城・島津忠辰・脇本・搗之浦と搗之浦・  
小潟と佐潟・薩摩大川・阿久根と出水・海人と山人・伊集院と臨済宗・  
臨済僧の役割・倉津・阿久根: 鶴と海岸の景観・湊と浦町・黒之瀬戸

滌 (すき) という地名

平田 何かありませんか?

寺園 脇本に笠山というのがあります。笠山の北の海岸に、これ (大日本地名辞書) に書いてある「八合」、現在「八郷」と言います。大きな集落で昔、紙を漉いていました。明治の頃、地質調査所と陸軍参謀本部が地形図を作成する時に集落名を聞くわけですね。文字は当て字でしょう。同じものを作りたくなかったらしいのです。それで地質図は此處に書いてある「大救・小救」と付けたが、参謀本部が作った地形図は「大滌・小滌」を用いた。結局は地形図の方が勝って、「大滌・小滌」の地名になっている。

平田 滌 (すき・すくい) という漁法は、海岸に石垣を築いて置く。満潮の時魚が入って来て、潮が引くと、そこで魚をすくい取ることが出来るのです。

寺園 成る程そういう意味があるのでしうね。そこまでは気付きませんでしたが。

平田 私は荒崎田圃から海岸沿いに阿久根まで歩いたことがあります。

入来院貞 スクイ・スキというのはどんな漢字ですか?

平田 サンズイに鹿児島の鹿を書きます。滌 (すき) と読みます。紙滌ですね。紙もすぐって作りますから。

寺園 余計なことかも知れませんが、地図も出来たらあった方がよい。用意が出来そうな気がします。私の方でね。2万5千分1図だと4枚になりますが、5万分1図だと1枚で済みます。

平田 地図を用意するのであれば、私の方で準備します。

寺園 文章だけ見ても判るのですけど。

平田 とにかく、出水から列車に乗ると、鹿児島での感覚と違うのです。鹿児島は大体南の方に海があるのですが、出水では海は北の方にあり列車は走り出すと西の方に向かう。どっちに行くのだろうかと錯覚を起こすのです。阿久根に入ってようやく南の方に向かって下って来るのです。

黒之瀬戸では小舟を雇って「カヅキ」という素潜りの名人が魚を捕って来て刺身を食わ

す漁があるのです。それは美味かったです。

入来院貞 阿久根にはそんな店がありますよね。

平田 いや、舟の上で食わせるのです。

#### 城下町鹿児島の由来

寺園 今気付いたのだけど、後に渋谷氏が薩摩国の川内川流域にやって来ます。薩摩国の木牟礼城から山門院にかけて島津氏が拠点を築きます。そして、大隅国と薩摩国の中間：現在の鹿児島市に拠点を置いたのはどうしてか？大隅・薩摩の両方に、にらみを利かすためだったのか？

平安時代までは大隅国府と薩摩国府を結ぶ駅路が表街道でしょう。現在の鹿児島市は、それからはずれている。

平田 島津家を判り易く兄の家と弟の家に分けて考えましょう。兄の家が薩摩国守護で木牟礼城・碇山城を拠点とした。弟の家が大隅国守護になったわけですから大隅国を支配したいのですが、国分に入れなかった。仕様ことなしに今日の箇所に書いてあった氏久が引き出物として貰った鹿児島で東福寺城の麓に大隅国守護所を設けてのです。そして守護町が発達して行くのです。

ようやく国分を手に入れるのは、清水城を陥れる島津貴久の時代です。そういうことで奥州家島津氏が大隅国府を押さえられずに、大隅支配の行政機関を鹿児島に設けた。それから城下町鹿児島が発達したのです。

#### 鎌倉御家人の九州下向

浜田 昔、鹿児島を支配していたのは上山氏だったと云われます。その上山氏が豊後から移って来たと云われます。どういう関係になるのでしょうか？

平田 それは判らないな。現在「上山」と

いう姓は桜島に多く見られます。上山氏は鹿児島争奪戦で負けて桜島に引っ込んだと思います。

浜田 その祖先が豊後から来たというは豊後國と近衛家の関係でんでしょうか？近衛家の荘園であった島津荘と大隅国関係かなと思うのだけど、上山氏が豊後から来たということだけで、具体的に判らない。

平田 はつきりしないというより、古代の九州は大宰府が西海道を支配していた。そのため各州（各國々）の歴史は漏れている事が多いのです。道州制は奈良・平安時代に経験しているのです。

浜田 三国名勝図会なんかでは豊後国からやって来たと書いてあるけど、その経緯が判らない。桜島などにその子孫がいるので滅んだことは判りますけど。

平田 鎌倉武士の西国移住は元寇を防ぐ手立てだった。九州および山口あたりまでの領地を与えられた者は平家滅亡後、その領地を分けてもらったのです。そして、皆、蒙古の侵入を防ぐために現地に行けとの命令で下向して来るのです。薩摩国・大隅国には島津・渋谷・宇都宮など、いわゆる関東地方の豪族がほとんど下向して来ます。豊前・豊後・筑前なども同様です。そして入って来たら在庁官人と勢力争いをしなければならず、鎌倉時代末期まで戦乱を繰り返して來たのです。

その頃に鹿児島でも矢上氏と惟宗氏との争いがあった。惟宗氏は鹿児島氏を名乗るので、負けて久留米の高良大社を頼って逃げて行きます。

浜田 上山氏の没落はいつ頃になりますか

平田 南北朝時代の争いになりますから、落ち着くところは南北朝の頃です。

浜田 上山氏の没落は歴史に見えない。

平田 桜島に逃れたから歴史に出て来るのは仕様がないのです。しかし上山一族の結束は、今でも固いでしょう。

浜田 上山城の麓に、江戸時代、島津氏の本拠鶴丸城を築いています。上山城は歴史的に重要な場所だったことを示しています。

#### 生別府（おいのびゅう）城

入来院貞 生別府城というのはどこにあったのですか？

平田 隼人町と加治木町小浜の境界にあります。

浜田 東回り高速道のトンネルがある、あの山です。

平田 あの上の山。小浜からトンネルを出ると、島が三つ目に入るでしょう。

浜田 大きな島ですね。

平田 地図を持って来ていませんけどね、生別府城というのは鹿児島湾の中では奥の方です。ちょっと飛び出した所です。そこに城を構えたということは、湾奥ににらみを利かしたことになります。

浜田 小浜と真孝の間です。

平田 そうです。トンネルを出た所が鳩脇になります。鳩脇から俊寛たちが硫黄島に流されて行くのです。歴史的に有名な所です。

二見 「オイ」の別府城。「オイ」はどんな文字？

平田 生（なま）を「おい」と読む。鹿児島弁で「歯が生えた」というでしょう。

二見 その「おい」ですか。

（平田 「生別府」を板書）。

入来院貞 別府（びゅう）なんてのも聞くことはなかった。別府（べっぷ）という地名は沢山ありますけど。

川野 川内では別府原（びゅのはい）といふのは、よく耳にします。

#### 島津忠辰

入来院貞 秀吉の命令に背いて、薩摩家島津氏の断絶となったのは、忠辰と書きます。その名前の読みは？

平田 忠辰（ただとき）です。

入来院貞 義虎の息子ですね。

平田 そうです。

入来院貞 義久の孫である。

平田 義久の長女於平（おひら）の息子です。

#### 脇本

二見 この地図によると、脇本という中心地があります。それから勢度というのは？

平田 勢度は和名抄の郷名として出て来るのです。

寺園 その頃の範囲は、今がちょっと判りませんよね。

平田 大日本地名辞書の説明によると、江内から脇本を含んでいます。

#### 二見 脇の方？

平田 脇の中心ということでしょう。

浜田 重富にも脇元がある。

平田 重富にもあるし敷根の脇元もある。本村から脇村が派生して出来る地名。郡元・郡本は郡の中心ということだから、脇本は脇村の中心になる。人々、脇という村が出来た時の核：初めのエリアというだけのこと。郡本・脇本の「本（元）」はそのように考えたらしいと思う。

二見 「脇」というのは、やっぱり意味があったのでしょうか。溝辺にも「脇」という集落がありました。

平田 本村（ほんむら・もとむら）から分

村したのが脇村でしょうね。さらに脇村から分村することがあれば、脇村の中心だったということでお脇本（脇元）と呼んだ。

二見 脇本の海岸は海水浴をするには良い海岸なんだけど、大島の方に渡って海水浴をするようになった。脇本が中心にならずに、どうして阿久根の方が中心になったのか、と思うのです。

平田 鉄道利用との関係でしょうね。

### 搗之浦と橋之浦

米原 脇本は今下出水村に属す、一名搗之浦（つきのうら）というとあります。

平田 搗之浦は餅搗（もちつき）の「搗」だよね。

米原 橋之浦（かしのうら）としてあるのもあるけど、搗之浦と橋之浦は別ですか？

平田 同じもの。

米原 手ヘンと木ヘンの違いになっている

平田 「かしのうら」が正しい。

寺園 私は搗之浦（つきのうら）と思っていたけど。調べてみます。（編集時後記：南日本新聞社の『鹿児島万能地図』には橋之浦（かしのうら）とルビがある。

### 小瀬と佐瀬

寺園 2枚目の上段、左の方に、小瀬崎と書いてあるところ。現在の佐瀬だろうと思うのだけど。

平田 初めての孫娘を祖父や祖母が背中合わせにおぶって人々に紹介する、雛女（ひなじょ）祭りという行事があります。

寺園 そうです。ちょっと余計な話になりますけど私は阿久根高校に勤めていました。家庭訪問をすると名字とぴったりの生徒がいました。佐瀬穂子という生徒でした。

平田 佐瀬（さがた）のついでに、先日、

吉田町にある佐多浦（さたのうら）という地名を考えてみました。日本全国の佐多・佐田という地名を調べると、棚田のように小さな田圃が集まった所に「さた」という地名が付いていることに気付きました。

寺園 それは意味がありますね。四国の蹉跎岬やはり同じことでしょう。小さな田圃が集まっている所をいう地名。

平田 この「小瀬」も「さがた」と読むべきでしょう。

### 薩摩大川

入来院貞 出水の島津と東郷の渋谷が薩摩大川で戦い、出水勢に多くの戦死者が出た。大川に千人塚があったのですね。

平田 前回話題になった千人塚ですね。先日、吉田町でも千人塚に出会いました。千人塚の意味は沢山の人が死んだので、その供養を示す塚でしょう。

未だ解明されていないけど、鹿児島県はその昔、倭寇の根拠地だった。その歴史というのはなかなか把握出来ないです。

今日読んだ「薩摩大川」の説明に尻無川とあり、孔道（穴）があいていると書いてありますけど、穴なんかあいていないですね。砂浜の下を潜って伏流となって海に流れ込むのです。船が着くような湊はないのだけど、薩摩大川の集落は皆立派な家なんです。どこで儲けたのか。相当古くからの蓄積があって豊かなんだなと感じます。びっくりする程の大きな家が並んでいるのです。普通ならば、薩摩大川なんて集落は寒村の筈です。陸上交通の要所か、或いはその昔倭寇の根拠地だったのではと思います。確証はないのですが。

### 阿久根と出水

二見 阿久根市といういるのは、どのよう

にして出来たのかに興味を持つのですが。

平田 阿久根市は出水市が広がって行くのに対して、取り残された感じを持ったのでしょうか。

寺園 出水市の中心部に出水の町がありますね。南の方に行くと、干拓地があります。そして江内と脇本は下出水村だった。下出水は脇本村と云って、出水とは離れている。

平田 大正末期に下出水村は三笠村と呼ばれるようになる。

寺園 三笠村の北の方が昭和24年、江内村に分村する。南の脇本が昭和30年に阿久根市に合併する。脇本というのは面白いと思うのです。行政的には出水とは合併したくない。結局、阿久根に合併する。阿久根は元々別です。阿久根が出水と合併することはないだろう。気質的に出水とは合わない。阿久根は漁業の中心地でしょう。魚が多く獲れた時には船で派手に祝いをする。だから阿久根の電気店には高級品が多く並ぶ。出水の方は堅実派で確実な生活をする。阿久根の方は生活に波がある。住民感情としてそういうものがあるのかも知れません。そういう所は合併しない

浜田 そういう所は多い。古くからの歴史に拠っている面もある。例えば、根占と大根占。昔は神宮領と武家領。阿久根が出水を飛び越えて中心になったという時代はない。漁業では出水の上を行ったでしょうが、他は全部出水が上位だった。

平田 鹿児島県の歴史で、政治的中心地はどこに置かれたかを考えるとよい。政治的中心地だった所に工場は進出して来ている。

浜田 そういうことでは田代と根占は合併していない。伝統的に仲が悪いので、田代は大根占と合併した。

寺園 どこでどう結び付くのか判らないのだけど、明治時代に村長が5年とか10年長く続く所とそうでない所が目に付く。南日本新聞社が明治百年事業に編集した鹿児島大百科事典を見ると、逆に村長・町長の任期の短い所が目に付いた。どうしてかなと話題になったことがある。

平田 村長・町長の交代が頻繁なのは政争が激しかったのと結び付くのでしょう。

浜田 国分平野でも国分と隼人は仲が悪かった。長い間、合併しなかった。平成になって広域合併で合併が実現した。昭和26年国分市が成立した時も隼人町との合併は煮詰まらなかった。これは江戸時代以来、隼人は国分郷の従属的存在だった。

平田 うん、西国分村だった。

浜田 そうです。国分郷の中の一つの村だった。日当山なんかも国分に容易に近付かなかつた。それが今もあるのですよ。

平田 国分と隼人の境界線は入りこんでますからね。あれは十年之役が済んでから訴訟で国分が負けているのです。だからジグザグな境界になった。裁判沙汰の怨みがまだ続いているとの話を聞いたことがある。

二見 地名について地図を置いて勉強しながら眺めると面白そうですね。昭和に何回か合併重ねて来た。どの段階でどうなったかというのを歴史的に辿ってみると、その歴史がはっきりして来る。これにはまだ瀬戸大橋が載っていないのです。

？ 載っていない地図を持って来た。

二見 何故、阿久根と出水が仲が悪くなっているのか、その原因を究明出来るのでは。

米原 串良と東串良。それに大崎あたりも複雑です。

平田 志布志とは一緒にならないだろう。  
米原 沖永良部でも、知名と和泊は一緒になろうとしない。どういう事情かなと思ったりするけど、それが判らない。

? 古代から、こだわり過ぎているのではないか?

浜田 民俗学的なものでしょうね。古代・中世からの意識が続いている。阿久根と出水は昔からいろいろ云われていた。出水の衆はやかましと、きちんとしていると。阿久根はてげてげよという教育を受けたのです。私は国分ですが、出水は一つ上方に存在すると見られていた。

二見 戦後、文化協会が出来た順番から云うと、阿久根が一番で、出水が二番目なんです。阿久根は文化を大切にしようという雰囲気は昔からあるのです。阿久根と出水は競争し合っているのです。

平田 昔は阿久根に鶴が飛んで来ていたのでしょう。

寺園 そうですよ。国道3号でも鉄道もいいのですが、阿久根に入る手前の所、現在阿久根市役所のある一帯ですが、そこは潟だった。そこに住宅が建ち始めて鶴が渡つて来る潟がなくなった。出水の平野で餌付けをして鶴を集めた結果、鶴の飛来地が出来あがった。

浜田 昔、中学校が阿久根になかった。

平田 阿久根高女だった。

浜田 昔は文化の中心地に必ず中学校があった。鹿屋とか加治木とか川内とか出水とかやかましか所は中学校があった。

寺園 そんな表現をした方がいいですね。政治力のある所、指導者がいる所、知識集団の数の多い所が、地方ではやっぱり旧制中学

が置かれた所に分がある。

平田 始良郡全般に云えることだけど加治木中学に優秀な人材が集まっていた。古くから加治木中学の連中がいうのだけど、横川の者が一番ピンタが良か、と。何故か? 横川の者が加治木中学では一番成績がよかったと。金山を持っているから(笑い)。

二見 2万人ぐらい住んでいた時代がある  
寺園 それもあるかも知れませんけどね。旧制中学と新制高校の差で汽車通学という条件下で、時間的制約を受けながら列車の中でも勉強したことが一つの要素になるのではないか。

二見 私は肥薩線文化をもっと検証する必要があると思う。横川をいう時には。

平田 頑張って下さい。

浜田 やっぱり金山だろう。

#### 山人と海人

入来院重 私はこの会に何回か参加させて頂いています。皆さんの非常に蘊蓄のある話を聞いて、大変勉強になります。地名というのは土地に結び付いた文字表現で毎回判り易く解説して下さるので非常に嬉しいことだとかねがね思っております。

先程、地名研究ならば史実に合わせて地勢も併せて勉強したらどうかという話も出ました。それに私は賛成なんです。というのは、日本列島は結局、山人(やまとひと)と海人(うみひと)の社会の歴史なんです。とくに九州をはじめ日本列島は全部そうです。どこへ行っても必ずそういう問題が起こっています。海人というのは流浪の歴史を持っています。山人にも流浪性があるのです。その流浪性あるが故に日本の文化は統一されて行ったという点は知られている通りです。ただ流浪

の仕方が違う。海人: 海岸で育った人というのは開明的で進取の気性に富んでいる。一攫千金の夢を持った人々の集落でもある。だから阿久根の人たちが高価な物を買うのは当たり前ですよ。

山人はそうじやない。山人は大半が百姓です。山人も獵師と百姓は仲が良いわけじやありません。狩をする人: 魚も山の動物も狩の対象(狩獵漁労)ですから、狩人に浮浪性があるのは当たり前です。彼らは全盡の選択の云つてみれば大変な能力・特性を持っているから常に直行性の彼らの力を農業に使わない限りは治められないわけです。治めるには百姓として住んでくれる人がいない。定住する者と定住しない者との歴史の関わりが地名にも残っていると思うのです。

鹿児島県はそういう点非常に複雑で、大層奥の深い所だと私はかねがね思っているのです。薩摩半島・大隅半島全部そうです。全部港がある。港は大変な数です。港は情報伝達基地です。いろんな情報が蓄積されている所ですから、島津氏が何故強くなったか。情報を一手に握ったのです。島津氏の強さの根源は情報の蓄積を非常に巧妙に且つ対外的に使ったところに島津氏の習性があったのです。それらの蓄積された所は港ですよ。とくに薩摩半島。錦江湾に沿った港は大変な情報蓄積地だった。彼らの仕事は魚を捕ることだけでなく、魚を捕るのは余技。何をやっていたかというと、情報の伝達です。すなわち貿易: 物の売買。東南アジアへの日本の品物の売買。これが九州の富を蓄積したと思うのです。

#### 伊集院と臨済宗

入来院重 何故キリスト教が九州に来たのか。ザビエルは何故まず鹿児島に来たのか。

これは大変な歴史的事実ですが、九州の豊かな物産に関わっていたと思います。東シナ海周辺の国々の中で、日本は4本の指に入っていた。その関所が鹿児島なんです。鹿児島にザビエルを案内したのはヤジロウ。そのヤジロウが歴史から抹殺されているのは何故か。それには深い意味があると私は思っている。今徐々に解明しつつある人がいます。ヤジロウは伊集院の人ですが、伊集院は一つの根拠地だったのです。

島津氏にとって、大隅は別として、情報伝達の基地: 今でいうハイテク技術が全部伊集院に集積した。それを持って来たのがザビエルを初めとするジェスイット教団: 薩摩にやって来たアーメンの連中で虎視眈々と植民地化をねらっていた。これは別の話ですけれども、いずれにしても地名を深く掘り下げて行く必要がある。

鹿児島はいろんな人種の集合地。鹿児島はとくに多い。メラネシア系・インドネシア系・イラン系、いっぱい来ています。ですからその連中が持ち込んだものが地名に残っていると私は思っています。その点、これから勉強して頂ければ参加する意味があるなと思います。

平田 今、伊集院の話が出ましたが、伊集院に広済寺という臨済宗の寺がありました。伊集院高校の隣の敷地にあったのですが、それは薩摩・大隅の臨済宗の本山でした。室町時代・南北朝時代には臨済宗の僧侶が遣明船に乗って行ったのです。そういう意味で、伊集院・京泊・加世田の益山・坊津・山川などの大事な所に港があって、そこに臨済宗の大いな寺もあった。その本山が伊集院にあったから伊集院は強大だった。その伊集院を支配

伊作島津氏なんです。

浜田 それが真方ん衆です。

平田 真方ん衆。それはね。

二見 桂庵禪師は最初市来に来たのですか

平田 そうです。

二見 市来と伊集院の距離は？

平田 大した距離でない。

二見 伊集院に本山があった？

浜田 市来には長く居なかった。

平田 市来に長く居たわけではない。

二見 薩摩半島にあった寺を調べてみれば桂庵が何故來たかということが判るのでは。

入来院重 伊集院の寺は臨済宗で後に曹洞宗になったのでは。

浜田 黄檗宗・臨済宗・曹洞宗、みな禅宗ですから。当時の上流階級は皆禅宗だった。武士階級の9割ぐらいは禅宗だった。その中で臨済宗は上流の人たち。

二見 今回出た「まなび」に、上原さんという元県会議員の方がザビエルのことを書いているのですが、ザビエルが来る以前に桂庵禪師は来ているわけですから、100年ぐらい経っているわけでしょう。その間の鹿児島がどれくらい繁栄し治っていたかを見なければと思う。ザビエルは鹿児島を目的に來たのでしょうかね。

平田 日本を目指して來るのです。ヤジロウが鹿児島出身ということで來たのです。ヤジロウは案内者だった。

二見 私は薩摩というのはどうして出来たか。現在薩摩町とか南さつま市などがありますが、薩摩はどういう概念なのか。どのように考えればよいのか。

上野 ヤジロウは根占の出身でしょう。

平田 根占説もあります。それに対して、

真方ん衆・岩屋天狗という話を主張しているのは、あれは誰か？

入来院貞 畠田志一が書いた本。

平田 畠田志一ですか。七高から東大経済学部を出た人です。彼が南朝を中心とした歴史を展開させているのですが、出て来る人物というのが、例えば岩屋天狗。天狗煙草を売り出した人物をモデルにしているし、明治維新を南朝革命という視点でしぼり過ぎている気がするのです。検証し直す必要があると思います。

#### 臨済僧の役割

平田 今話題になった寺院について、鹿児島は廃仏毀釈で徹底的に破壊していますが、鹿児島の寺院の名前は『三国名勝図会』が大体網羅しています。三国名勝図会に出て来る寺院によって宗派別に整理して行けば、ある程度展望が開けて来ると思います。寺院は全部破壊されているので、三国名勝図会だけが頼りです。

二見 私は島津氏を中心に鹿児島の文化を考えすぎているように思う。島津氏を育てたのは禅宗だったわけで、それで仏教との関係はしっかり調べないとね。その辺の庶民を含めて、どういう所でどのような勉強をしていったかというのを調べないと、鹿児島の文化は判らないような気がするのです。

浜田 禅宗が9割でしょうね。その中で、どの宗派に属しておったかぐらいのこと。宗派と云っても似たようなものでしょう。

入来院貞 侍の禅。

入来院重 侍の禅は臨済禪だったでしょうが、島津氏は曹洞宗に変って行ったと思います。

平田 ただ外国貿易（日明貿易）を考えた

場合、倭寇というのは私貿易です。取引がうまく行かなかった時に海賊に化けるのが倭寇だった。公貿易として五山の僧侶が正使として中国に出掛け、皇帝に謁見を許される。そういう往復を繰り返すうちに船乗りたちは中国の言葉を憶えてしまうわけです。そうなると、僧侶などは不必要になるのです。

浜田 当時、五山僧のことばというのは、全部中国語だった。五山文学が盛んな時代、お寺の公用語は中国語だった。

入来院貞 あちらの人たちが日本に渡って来てお寺を建てた面もあります。鎌倉五山はそうだと思います。

浜田 当時の国際語は中国語。

入来院重 中国語も北京官話の系統。

浜田 だから詩作などはすぐに対応出来た  
平田 成る程。今日読んだ最初の貞久の手紙も漢文だった。

#### 倉津

川野 597ページの波留の所に「倉津」が出ています。外国との取引があったので、倉が多く建っていた。それで倉津の名が付いたと聞いたことがあるのですが。

平田 それはあるだろうね。

川野 何故「土俗倉津港」というのですか

平田 土地の人がそう云ったということ。

川野 禅宗との関係はない？

平田 今でも倉津と云っている。

寺園 阿久根を流れてる川。高松川と云います。川の右手：東の方から西へ行く所に川と並行して本町（ほんまち）と呼ばれる所がある。そこに阿久根の豪商：分陽（かわみなみ）氏・丹宗（たんそう）氏とかの屋敷があった。いつ頃というのは調べたことはなく多分その後だと思うのだけど、川の南の方に

丘があってその中間に潟の入口になります。ちょっと離れた所に小さな入江があり、そこに荷役をした人たち：沖仲仕たちの集落があった。最近では高松川の北の方、鉄道と3号線の間：阿久根駅のすぐ前の所が整理されて阿久根市街地になった。

平田 倉津の方には今でも漁船が集まっています。

寺園 漁港がありますね。阿久根の沖合にはご存知の阿久根大島があつてキャンプ場になっています。その北の方に桑島があつて、そこに密貿易の船がやって来ていた。そこに住民が行かないようにするために、夕方、薄暗くなる頃に縄に白い布を巻いて、蛇が泳いでいるところをやっていた。「波留」の所に書いてある雄島・雌島・母子島辺りが密貿易の場所だった。

#### 阿久根：鶴と海岸の景観

入来院貞 西方から阿久根の海岸は美しいですね。東洋の〇〇と宣伝しないのかと思います。

寺園 そうですね。

入来院貞 リゾート地として整備したら、すばらしい所だと思います。

寺園 温泉はあるし、景色も良いし、魚が新鮮だし。

阿久根の超大型スーパーが話題になったがワイワイガヤガヤで誰が何をしゃべっているのか録音では判断出来ない。（省略）

川野 先程、佐潟に昔鶴が飛来していたとの話がありました。鶴川内（つるかわち）も鶴がやって来ていたので、そういう名が付いた？

平田 そういうことです。僕が小学生の頃図鑑では出水でなく阿久根が渡来地として書いてあった。それで記憶がある。阿久根の潟は「隔岡（おかごし）の塩田」として知られていて、そこで塩を造ってもいた。塩より鶴が儲かると思わなかったのかな。

二見 阿久根の海岸が綺麗という話。あれは海仙（うみせん）と表現されていた。川仙は球磨川上流の人吉辺りの呼び名だった。

平田 海仙？

二見 海仙と云っていた。いつ頃云っていたのだろう。現在オレンジ鉄道と呼んでいるけど考えてみれば肥薩線が先に出来ていた。鹿児島本線は向うを回っていた。阿久根を通る鉄道は考えて敷設した鉄道だろうかと興味があるので。阿久根の海岸は昔からそのように云われていたのだろうか。

寺園 景色が良いというのは、此処にも書いてあった。

平田 賴山陽が称賛して詩を作っている。

寺園 そうそう、西方あたりからの景色を

平田 西方・牛之浜とか。

寺園 牛之浜に碑が建っている。

平田 あっ、そう。

寺園 その後、鉄道が通った。

二見 鉄道がない頃から景色がよいと云われていた？

上野 賴山陽は多分海岸沿いでなく、山の上を通っている。

平田 山の上を通っている？

上野 あの辺は山の上を通って大川に出ている。

寺園 山の上から峠を越えている？

上野 西方からですね。山を越えて大川に出ていている。そしてまた、山を越えている。大

川以外は山を通っている。

#### 湊と浦町

平田 鹿児島県のいわゆる湊：港町とか漁師町を歩くと、例えば笠沙。今では僻地並みに離れているけど、あそこは網元がかたまっています。伝馬を漕いで漁場（ぎょば）に着くと、集まっている名子（なご）たちの顔はまるで中国人の顔なんです。倭寇が向うから連れて来て、そのまま住み着いて名子となつた。先程、鹿児島県はいろんな人種が混っているのじゃないか（笑い）の話があったけど

入来院重 ハイブリッドで非常に優秀なんですよ。民族それ自体はね。鹿児島も優秀なんですよ。沢山の人が来て混っているから、ハイブリッドになっている。

二見 地名研究会はそういうのを組み合わせて地図を見ながら調べると面白いのでは。

寺園 今回は596ページと597ページ。この次は大体 598ページ。可能な限り 5万分1図ぐらいだとね。

平田 地図を用意しますか。

寺園 私がやります。

平田 コピー機を持っていますから、地図をコピーするのはたやすいことです。

上野 各人がそれぞれ地図を持参したら。

入来院貞 いろんな地図があるから、皆、同じものを見た方が判り易い。

寺園 地形を見る場合、やはり 5万分1図が便利。

川野 「ナゴ」というのは、どんな字を書くのですか？

平田 名子・名護。いろいろ書くけど、名子は網元に使われている漁師をいう。鹿児島県の場合武士階級の研究は割合進んでいる。野町の研究もちょっとだけ今からだろう。

浦町の研究はほとんどされていない。鹿児島市は城下町というけど、どっちかというと、浦町から発達したみたいだ。浦町からのしあがって来た人物は、浜崎太平次だけ。

入来院重 浦は大切ですよ。町というのは歴史から抹殺されてしまったけど、海人・山人の視点から見ると面白いのじやないでしょうか。民衆の力というのは大変なものんですよ。海人と山人の力。名も知れない者たちが、それぞれの町の骨格を造った。今も造っている。庶民が皆、しっかりしているから日本は保っているわけです。

平田 他にありませんか。私は第1回からずっとひとりで百数回録音テープを起こしてきました。現在ノートが49冊目です。50冊ぐらいでへたばるだろうなと思います。ぼつぼつ後継ぎを考えなければいけないと思っていります。

入来院重 今までの記録・会報を冊子にして頂けたらと思うのですが。

平田 それはそのうちに考えます。

寺園 本としてまとめて頂けたらね。

平田 合本という形で。

入来院重 今までのものは。

平田 県立図書館には会報は全部届けてあります。

入来院重 いい資料ですから。

#### 黒之瀬戸

米原 黒之瀬戸の「黒」というのは、潮の流れの色からですか？

平田 鮮やかな黒ですね。深い所を流れていますから。「クロ」というチヌの魚がよく捕れます。

浜田 クロという鯛が捕れるかも。

平田 黒之瀬戸大橋の上から見ると、渦を巻いていますからね。岸近くで渦が見られ、そこで魚釣りをしています。

あと3分ぐらいありますが、片づけの時間にしましょう。

## 信仰地名メモ（4）

### 老神神社（おいがみじんしゃ）

#### (1) 県内の老神神社

- |                     |                    |               |   |
|---------------------|--------------------|---------------|---|
| 1. 老神祠              | 出水市武本              | ①             |   |
| 2. 大居神大明神           | 大村郷の宗廟             | 例祭 9月3日       | ② |
| 祭神：天照大神・手力雄命・石幡豊秋津姫 |                    |               | ③ |
| 3. 老上神社             | 加世田市武田             | ④             |   |
| 4. 大位神大明神           | 吉田郷佐多之浦            | 例祭 2月・11月初申の日 | ⑤ |
| 祭神：王子權現の親神          |                    |               | ⑥ |
| 5. 老神神社             | 姶良町中津野             | ⑦             |   |
| 6. 老龜大明神<br>(大井上神社) | 加治木郷小山村<br>加治木町小山田 | 例祭 2月11日      | ⑧ |
| 7. 大神神社             | 栗野町北方              | ⑨             |   |

8. 老神神社 垂水市牛根境  
 9. 老龜大明神 加治木郷木田  
 10. 老神大明神 曽於郡入水 } メモにあるが、典拠不明確  
 11. 老神大明神 曽於郡松永

角

(2) 「老神」という地名

1. 老神 出水市武本  
 2. 老神原 栗野町北方 (オイカンバル)  
 3. 老神ノ上 末吉町南之郷  
 4. 老神 鹿屋市田崎 (古銭 1800 枚出土)  
 5. 老神川・追神川 垂水市田神 (エカンガワ)

出水市武本の老神祠の近くに、小字「市来」がある。出水市教委が「市来駅跡」と見て発掘調査を実施した。平良川上流地域の水田（氾濫原）で、須恵器・土師器破片の散布が多く見られたが、遺構は発見出来なかった。もし「古道」があった場合、

市来 → 栗毛野 → 丸塚 → 堀切峠 → 宮之城

市来 → 特手 → 鶴川内 → 山下（英称駅）：山裾を通る複雑な道になる。

(3) 県外の「老神」地名：アポック社『日本地名索引』による

1. 追神（おいかみ） 島根県  
 2. 老神（おいがみ） 群馬県  
 3. 追上（おいかみ） 香川県  
 4. 追上山（おいかみやま） 青森県

(群馬県利根郡老神村) 『角川日本地名大辞典・群馬県』の解説は次ぎのとおり。

①赤城神と二荒神との争いの際、赤城神が敗れて追わされて來たので追神と云われる

ようになったのが起り。

②永禄年間の頃、沼田城主夫人が追神の湯に入り、自分の老いるのに（老いが身に）

かけたことから老神になった。

③湯の神 → お湯の上 → 老神 となった。

# 地名研究会報

第 110 号

平成 22 年 2 月 7 日

鹿児島地名研究会

I. 第 110 回例会 平成 21 年 12 月 6 日（日）於鹿児島市福祉コミュニティセンター  
(出会者) 今村誠一・内山憲一・川野雄一・寺園貞夫・  
浜田良知・平田信芳・柳原孝一（計 7 名）

II. 大日本地名辞書読会 P. 598～P. 599 高城・国府址・新田八幡・千台・可愛山稜  
〔話題となった地名及び事項〕 高城郡・薩摩国府跡・薩摩国分寺跡・新田八幡・千台

## 奈良・平安時代の大隅国・薩摩国

（操作ミスで録音失敗。上記タイトルで編集することにした）。

### 高城郡

古代では「たかき」郡と称して、薩摩国府の所在地として重要な地名であったが戦国時代は在庁官人の勢力が衰え、東郷氏や薩州家島津氏の争いの場であった。江戸時代には島津氏の直轄地となり高城麓（たきふもと）に地頭館があった。古代では川内川下流域は右岸が高城郡、左岸が薩摩郡と呼ばれたが、近世以降は高城麓と城上（じょうかみ）だけが高城郷（高城町）の境域と理解されたにすぎない。なお高城郡衙（高城郡家）がどこにあったかは未解明。

### 薩摩国府跡

上川内駅背後の屋形ヶ原（やかたがはら）が江戸時代以来「国司屋形跡」として薩摩国府跡とみなされていた。屋形ヶ原は方 2 町程度の台地であり、諸国府の 6 町四方・8 町四方と比較するとあまりにも狭い。川内高校の敷地が南北 1 町・東西 3 町の広さであることにヒントを得て、川内高校を西南隅とする方 6 町の薩摩国府域を唱え、川内高校東端を北上する道を国府の中央路（朱雀路）とする説を考え出した。

昭和 38 年、当時各自治体で文化財保護が叫ばれるようになり、川内高校の歴史教師が文化財審議委員にと要請があった。日本史・世界史を含めて 5 人いたが、若い者が勉強して来いとのことで、下から 2 番目の私がその役目を引き受けことになった。そのような経緯もあり、生徒たちの同好者を集めて郷土研究クラブを創設、活動を始めた。その年の文化祭に取り上げてテーマが、川内高校周辺の小字復元図の作成だった。川内市文化財審議委員というポストが役に立って、御陵下町と国分寺町の字絵図を川内市役所で写真撮影することが出来た。

小字復元図を生徒と共に作りながら、国分寺跡周辺の国分・大都・下台という小字、日駒（ひのこま）・兵庫原（ひょうごばる）・栗野ヶ迫（くりやがさこ：厨ヶ迫）など、国分寺とは性格が異なる意味ありげな地名が多いことに気付いた。放課後それらの小字を歩き回って地表の遺物散布状況を調べた。国分寺跡同様の遺物散布だった。その年度末、川内市文化財審議委員会報告第 1 集の別冊として「薩摩国の国府および国分寺の位置および遺構について」というレポートを作成、そのレポートを九州大学教授の鏡山猛先生に送り

その指導を仰ぐことになった。

当時の私は考古学には全くの素人で、同僚の中水昭夫・岡山弘の二人が発掘調査の経験があったので鏡山教授と河口貞徳県文化財専門委員の指導下で発掘調査に入った。今一つ都合が好かったのは中学時代の恩師川邊惟定先生が川内高校校長であり、川内高校から物心両面で援助して貰った。

昭和39年の春休みに、川内高校郷土研究クラブの名で「入来原（いりきばる）建築遺構」の調査を始め、夏休みの調査には九州大学の鏡山猛教授が来られ、指導して頂いた。鏡山先生から入来原建築遺構の方位が北極星を見通した真北（しんぱく）であり、鹿児島県ではその方位は5度20分から30分ほど東に振れている。奈良平安時代の建物に間違いないと指摘された。同時に表面採集で青磁や白磁の破片にも目を配ることを教えて頂いた。このようにして方6町の薩摩国府跡と国府城の東に隣接する方2町の国分寺跡を明らかにすることが出来たのである。

#### 入来原建築遺構

入来原建築遺構は地表下30cmで捉えられた二間一間の礎石遺構と、地表下40cmに出現する三間三間の礎石遺構の複合遺構である。

二間一間の遺構は平安末から鎌倉時代のものと考えられる。礎石の大きさは約50cm、6個のうち5個が残っていた。東西の間口は4m45cmで天平尺（奈良時代のものさし）の15尺、柱間は8尺と7尺の建物になる。南北の奥行は2m35cmで天平尺の8尺になる。

三間三間の遺構は長径約100cm、短径約70cmの自然石を礎石として用い、16個のうち13個が残っており、3箇所は礎石を抜き取った跡が検出された。東西の間口は7m12cmで、

天平尺の24尺。南北の奥行は6m14cmで天平尺21尺と考えられる。間口の柱間は、天平尺8尺の等間隔、奥行は天平尺7尺の等間隔とみなされる。

岡山弘氏と二人で「お宅の畠から瓦の破片は出て来ませんか」と訪ね歩いた時、「瓦は出て来ないが、ゴボウが曲がってしまう」との話を聞き、校舎建築中であった川内高校の建築現場から鉄筋用の鉄棒を1本借りて現場に引き返し、ボーリング棒代用として縦横方向に等間隔に並ぶ礎石列を確認、発掘届を出したのが入来原建築遺構であった。われわれは入来原家屋遺構と呼んでいたが、鹿児島県教育委員会が刊行した発掘調査報告書で入来原建築遺構と名付けられた。それはとも角としても入来原建築遺構は鹿児島県で初めて発掘調査で確かめられた建築遺構であった。

#### 薩摩国分寺跡

川内高校のクラブ活動から薩摩国府跡・国分寺跡の発掘調査が始まった。これは諸国府跡・国分寺跡の調査では特異な例だと思う。鹿児島県の考古学者のほとんどが参加し、川内高校郷土研究クラブ・玉龍高校考古学部・出水高校考古学部の生徒たちが手箕を握って移植ゴテで土を削った。薩摩国府跡・国分寺跡での経験から大学でも考古学に首を突っ込むことになり、卒業後鹿児島県教育委員会文化課や県埋蔵文化財センターなどの職員として活躍するメンバーになる。指折り数えてみると出口浩・戸崎勝洋・池畠耕一・青崎和憲・牛ノ浜修・長野真一・弥栄久志・吉永正史など8人が川内での発掘調査に参加していることになる。これら8人のうち5人が現在も鹿児島県埋蔵文化財センターのリーダーとして活躍している。

昭和40年度から42年度にかけて薩摩国府跡・鶴峯瓦窯跡の発掘調査が当時九州大学助手であった小田富士雄氏が指導者となって実施された。

薩摩国分寺跡の発掘調査は昭和43年度から45年度の3回に亘って小田富士雄氏の指導の下で実施された。

調査結果については『薩摩国府跡・国分寺跡』鹿児島県教育委員会、昭和50年3月に掲られたい。薩摩国府跡の一般的な解説は、拙著『地名が語る鹿児島の歴史』かごしま文庫38の137～139ページを参照されたい。

大掛かりな調査になったが、気まずい事態も生起した。昭和40年夏の薩摩国府跡の調査費用について鹿児島県と川内市が折半するとの話し合いで進められていたのが、当時の川内市長の理解不足からそんなことは県の予算でやれとの一声で、県だけの予算で調査が実施された。

鹿児島県教育委員会が調査主体、河口貞徳県文化財審議委員が調査主任、予算は県の単独予算となれば、発掘した遺物は県が持ち帰ることになり、調査主任が勤務していた玉龍高校へと運ばれた。川内高校のクラブ活動で始まった調査が、トンビに油揚げをさらわれた形になつたので生徒たちの不満がおさまらなかつた。それをなだめたのは岡山弘氏だった。そのことは今でも感謝している。

当時調査主任の河口先生に遺物の水洗い・整理を川内高校にさせてくれませんかと申し出たが、県から依頼されたのは私だと叱られた。その腹いせもあり、調査終了の日、酔つた勢いもあって川内市長宅を訪ねたが、生憎不在で山芋を掘る機会がなかつた。市長夫人の慣れた酔っぱらい相手の処理に感心しながら

すぐさまと家路につき、自転車を押して帰るうちに酔いもさめてしまった。

薩摩国府跡・国分寺跡の出土遺物は、後日意外な所で接することになる。はっきりした年度・期日の記憶はないが、重富にあった文化課の収蔵庫に多数のパン＝ケースに詰めた薩摩国府跡・国分寺跡の遺物があった。ほとんどは布目瓦の破片で水洗いもされずに放置されたままだった。薩摩国府跡・国分寺跡の調査後に整理予算がつかなかったのだろう。十数年おくれで、私が水洗い・カードの書き直しを指示することになった。

#### 大隅国府跡・多拝国府跡

薩摩国府および国分寺の想定図は、上記の『地名が語る鹿児島の歴史』の他に別冊歴史読本81、『地名を歩く』新人物往来社、2004年の「国府所在地解明の鍵は地名——薩摩・大隅・種子島」にも掲載してある。

大隅国府および国分寺の想定図は昭和40年度だったろう、文部省の科学研究費を貰った時に作成した。その後、国分高校創立七十周年記念誌に『国分物語』と題した一文の中に掲載した。

多拝国府については上記の別冊歴史読本81『地名を歩く』の中で、南種子町中之下の里地区に比定出来ることを述べた。

#### 大隅国分寺跡・多拝島分寺跡

大隅国分寺跡は現存六重の石造層塔が早くから指定史蹟となっていたことから、平成18年度から3年計画で遺跡範囲確認の発掘調査が実施されたが国指定特別史蹟となった薩摩国分寺跡のような遺構は確認されなかつた。近世以降の遺跡状況の変化が大きかつたのでやむを得ない。

ただ現存六重の石造層塔の存在は見直して

よい。全国六十八の国分寺跡に石造層塔があるのは3ヶ所だけ。大隅国分寺跡の他に備前国分寺跡の七重塔と讃岐国分寺の五重塔がある。讃岐国分寺は現在も法灯を受け継いでおり、史蹟として眺める感覚とは異なる。讃岐国分寺・備前国分寺跡も実際見に行ったが、どちらも人間の背丈ほどでがっかりさせられた。大隅国分寺石造層塔は「康治元(1142)十一月六日」の銘文があるだけでなく、国分寺の石造層塔では最も大きいことを知る必要がある。鹿児島県民だけでなく地元国分の人たちも認識を改めなければならない。

鹿児島空港への着陸態勢に入った時、地表の状態を漫然と眺めていた。現在の地割とは異なる地肌の区画が目に入った。小賢しい現代の人間が地表の状態をいじくり廻しても、古い時代の地割りは上空から眺めた地肌の色に残されていることを知った。上空から見た地肌の色による地割を手掛かりに国分平野の条里を復元し、条里区画と大隅国府や国分寺の区域を押さえ、大隅国分寺跡の北域に残る畠のボーリング調査というふりだしに戻った調査をやれば、なんらかの手掛かりが得られそうな気がする。

多祢島分寺跡は南種子町中之下での遺物散布状況調査で小字「郡原(こうりばろ)」の台地で多い土師器片の散布の中で、はじめて須恵器片を見付けた。その後に里(さと)でも須恵器片を見付けた。郡原の周辺には寺田・寺川東・寺川西など「寺」の付く小字が多いので、郡原は島分寺跡の候補地として気を付けて欲しいと同行した南種子町の埋蔵文化財担当者に言い残して来た。

薩摩国分尼寺・大隅国分尼寺については、まだ手掛かりをつかんでいない。

### 郡衙(郡家)跡

薩摩国に13郡・大隅国に8郡あったが、郡衙を念頭に置いて調査した例はない。道路建設などの開発行為に先行した事前調査の出土遺物から官衙的遺跡ではないかと、調査担当者が非公式にもらしたものが二~三ある。薩摩国には一郡一郷の例も多いので、郡衙や郷の中心地を積極的に求める自治体があつてもよいのではないか。

### 駅路と伝路(古代官道)

駅路は国府と国府を結ぶ官道、伝路は郡衙(郡家)と郡衙を結ぶ官道と常識的に理解してよい。大隅国・薩摩国の駅路・伝路については、『延喜式卷二十八兵部省』に「大隅国駅馬、蒲生・大水各五疋」「薩摩国駅馬、市来・英祢・網津・田後・高来各五疋。伝馬、市来・英祢・網津・田後各五疋」と記されている。

これらの駅名比定に大きなヒントを与えることになったのが東九州自動車道建設に伴い平成11年~14年に発掘調査された財部町高篠遺跡である。

出土遺物に官衙的な遺物が多く見られ、鹿児島県埋蔵文化財センターで意見を求められた。20万分1図に人差指と中指を括げるいわゆるVサインで地図上を押さえながら、この長さは2万5千分1図では2km、5万分1図では4kmすなわち1里、20万分の1図では16kmすなわち古代の駅間距離三十里:16.02kmになる。薩摩国府—田後駅—櫟野駅—大隅国府—高篠遺跡—島津駅が一直線になると説明した。『鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書71、九養岡遺跡・蹄場遺跡・高篠遺跡、2004年3月』410ページに

「平田信芳氏から、薩摩国府から島津駅は地

図上で一直線上であり高篠遺跡もその直線上に想定されるのではないかとの助言を頂いた」と申し訳的に記している。十分に理解出来なかつたのであろう。

大隅国・薩摩国だけで駅家を解明しようとしても、情報不足で難問に苦しめられるのが落ちである。西海道諸国の郡郷駅数・国府所在郡の駅馬・伝馬を比較して眺めてみると、解明の手掛かりがあるのであつた。

筑前国 15郡105郷19駅

御笠郡:駅馬?・伝馬15疋

筑後国 10郡54郷3駅

御井郡:駅馬5疋・伝馬5疋

豊前国 8郡43郷9駅

京都郡(仲津郡):駅馬?・伝馬?

豊後国 8郡40郷9駅

大分郡:伝馬5疋

高坂駅:駅馬5疋

肥前国 14郡98郷15駅

(佐嘉郡)小城郡、佐嘉駅:駅馬5疋

肥後国 14郡98郷16駅

(託間郡)益城郡(飽田郡)

蚕養駅:駅馬5疋・伝馬5疋

日向国 5郡28郷16駅

児湯郡:児湯駅 駅馬5疋・伝馬5疋

大隅国 8郡37郷2駅

(曽於郡)桑原郡:駅馬?・伝馬?

薩摩国 13郡35郷6駅

(高城郡)高来駅:駅馬5疋

壱岐島 2郡13郷2駅

石田郡、優通駅:駅馬5疋

対馬島 2郡11郷

下縣郷:駅馬・伝馬の記録なし

上記の比較から判ることは次のとおり。

1) 壱岐よりも大きな対馬に駅馬・伝馬の

記録がない。

2) 大隅国・薩摩国は他の国の郡郷数と比較した場合、駅数が少ない。

上記の記述から延喜式の駅馬・伝馬の記述には脱漏があるとみなされる。

3) 国府の近辺に駅家がある国が多い。薩摩国は方6町の国府域から「高木」の墨書き器が出土し、またに駅馬に結びつくと見られる遺称地名:小字日駒(ひのこま)がある。高来駅は薩摩国府付属の駅家だったと考えてよい。大隅国府は曽於国府と桑原国府を考えなければならないが、国分市府中は曽於郡内にあった。倭名抄記載の桑原国府は歴史考古学的に別途探さねばならない。

4) 西海道諸国の駅家は郡名・郷名(古代・近世)・大字名と一致するものが多い。

5) 西海道97駅のなかで小字地名を遺称地とする説があるものは次のとおり。

①筑前国佐尉駅 糸島郡二丈町唐家字才ノ原

②肥前国杵島駅 北方町芦原医王寺

③肥後国仁王駅 水俣氏市渡瀬仁王

④大隅国蒲生駅 蒲生町早馬字禁中

⑤薩摩国市来駅 出水市武本字市来

⑥薩摩国櫟野駅 入来町浦之名市野々

⑦壱岐島優通駅 石田町石田西触字勇頭

4) 5) から考えて小字を遺称地名とするのは無理な説が多いのではないか。7例中3例が大隅国・薩摩国にあるのは一考を要す。

### 薩摩国「市来駅」の問題点

1) 市来駅の比定地

①日置郡市来が遺称地名とする。

鹿児島県史・角川日本地名大辞典46

②出水市武本市來說

出水市教委が発掘調査を実施

③出水郡家脱落説:日置郡市來說の可能性を

を指摘する。『鹿児島県の地名』は①②

③説を列挙。

市来駅は薩摩国最初にあげられているが、従来出水郡家との関わりを考えた論者はいない。市来駅を出水郡内に求めながら（例えば米ノ津辺りを想定）、高来駅の順序には頗るむりであった。

## 2) 西海道諸国の駅家の配列

大宰府に近い方から遠い方への順序で列記されていると考えられて来たが、筑前国・豊後国・薩摩国は順序不同と見てよい。

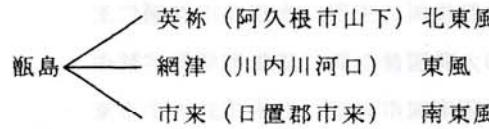
延喜式卷二十八兵部省に記載されている各國の駅家は、その国で重要な役割を持つ駅家（例えば駅馬数の多い駅家）が最初に書かれ、大宰府への順序も配慮して並んでいると見た方がよい。

## 3) 英祢・網津・市来3駅と甑島との連絡

出水郡家・武本市来の場合

山道にかかる位置で海から離れている。

難所黒之瀬戸を通過せねばならぬ。



歴史的甑島航路：日置郡市来湊=甑島里  
(海上13里の航路)

文化7年(1810)伊能忠敬の甑島測量

8月1日 市来湊朝六ツ半(a.m.7:00)

→八ツ半前(p.m.3:00)甑島里村着

8月19日 里村四ツ頃(a.m.10:00)頃発

→順風（北風）で九ツ半(p.m.2:00)

串木野浜着

平成22年2月6日、鹿児島大学法文学部主催史学会で「薩摩国市来駅の問題点」として、平田が研究発表をした。これに掲載したのはその要旨である。

## 新田八幡

本田親虎先生が生存中にこの地名研究会の例会で話されたことだが、新田八幡の宮司が祝詞を読む時には「にいだ」の神社（かむやしろ）と必ず奏上すること。

旧制高校の国語学で習った「新田」の読みは古語が「にいだ」で、東日本が「にった」西日本が「にゅうた」に訛った、と。

県内の八幡社の一覧と分布を調べたことがある。「人を以て城となす」は鹿児島藩が標榜した言葉で、天守閣の城をもたない言い訳でもあったが、百二外城（実際は百十三）の麓が鹿児島を守り、薩隅日三国を支配していた。麓は郷の政治的中心でもあったが、郷には鎮守神として諏訪神社（明治以降は南方神社と呼ぶ）と八幡神社を武の神として祀るのが一般的だった。

薩摩国府近くには新田八幡、大隅国府の近くには大隅正八幡（鹿児島神宮）、蒲生駅の近くには蒲生八幡、出水郡家の近くには箱崎八幡神社、日置郡市来（市来駅）には鶴岡八幡があった。その他数えあげれば続出する。官衙近辺に八幡社が勧請されたとみてよい。

## 川内（せんだい）という地名

奥州の仙台には陸奥国府があった。鹿児島県の川内には薩摩国府があった。この2ヶ所だけではない。確認した所を以下列挙する。

静岡市千代：駿河国府の所在地

愛知県稻沢市千代（尾張国中島郡千代）

尾張国府の所在地

鳥取県千代川：伯耆国府の近くを流れる

伯耆国久米郡久米郷の川

美作千代（JR駅名）：岡山県津山市

美作国府に近い

（大水駅については次号に譲る）。

# 地名研究会報

第 111 号

平成 22 年 4 月 4 日

鹿児島地名研究会

I. 第 111 回例会 平成 22 年 2 月 7 日 (日) 於鹿児島市福祉コミュニティセンター  
(出会者) 青柳俊一・今村誠一・入来院重朝・入来院貞子・上野堯史・内山憲一・  
柏田耕治・川野雄一・肥後吉郎・肱岡修一郎・平田信芳・二見剛史・  
柳原孝一・米原正晃 (計 14 名)

II. 大日本地名辞書読会 P.600～P.601 可愛山陵・薩摩国分寺址・泰平寺址・  
五代・川内川・託万郷

〔話題となった地名および事項〕 宅万という名字・年号表記・薩摩国府跡と国分寺跡・  
大隅国府跡と国分寺跡・多祢国府跡と島分寺跡・大隅国薩摩国の駅路・  
駅間距離・瓶島との海上連絡路・大水郷と大水駅・月の盈虚と暦・  
『薩摩乃古府』・上名下名・宇土・草道・泰平寺・せんだいという地名  
衣 (え) (そ) の読み・佳字 2 字表記の地名・川合陵

## 宅万という名字

米原 高城郡郷名の問題ですが、「中郷に  
宅満寺あり」と書いてあります。今もこれは  
ありますか。

川野 中郷に宅満寺跡があります。

米原 宅満寺は残っている。託万・宇土・  
合志という郷名の片鱗は残っていませんか。

川野 中郷に宅万さんという人がいます。

平田 川内には宅万という名字は多い。  
川内高校で宅万という生徒を何人も教えまし  
た。宇土はどこになるかな。合志は鶴田町の  
神子 (こうし) が比定されています。これは古  
くから云われています。宇土は宮之城あたり  
になるのかな。

## 年号表記

平田 今日はノートを持参するのを忘れま  
した。上野さんが年号を調べてメモしてくれ  
ましたので、それを読みあげます。

600 ページの上段。宝治元年 (1247) ・建長 8  
年 (1256) ・承安年中 (1171~75) ・承安 3 年

(1173) ・文永 5 年 (1268) ・安元 2 年 (1176) ・

永仁 7 年 (1299) ・嘉永 3 年 (1850)

（中段）天正 15 年 (1587) ・寛文 9 年 (1669) ・  
建保 2 年 (1214) ・建治 2 年 (1276) ・応和 3 年

(963) ・寛文中 (1661~1673)

（下段）宝治 2 年 (1248) ・興国 2 年 (1341)

紀年については帰宅してから年表で確かめ  
てください。

## 薩摩国府跡と国分寺跡

平田 前回の録音ではボタンを押すところ  
を間違って全然録音されていませんでした。  
会報 110 号は今回までの範囲を念頭に置いて  
「奈良平安時代の大隅国・薩摩国」の表題で  
作成しました。薩摩国府跡・国分寺跡を発掘  
調査へと導いたのは私です。江戸時代から上  
川内駅の裏にある屋形ヶ原が薩摩国の国司館  
跡という説が定説になっていました。国司館  
跡イクオール薩摩国府跡と考えられていたの  
です。屋形ヶ原は方 2 町ばかりの広さで、方  
6 町・方 8 町といわれる国府からすると狭い

ことに疑問を持ちました。

川内高校が大体南北1町・東西3町という敷地だったので、これを西南隅とした方6町の薩摩国府と、国府に隣接する方2町の薩摩国分寺を考えました。（板書の略図の説明）これが国府城の条坊です。この1区画が1町四方。1町=109m. 6町四方の地域が薩摩国府跡。その東側に隣接する2町四方が薩摩国分寺城になります。

それらの調査が契機となって考古学の道に入ったのです。薩摩国府跡に初めて取り組んだのが昭和38年です。1963年。半世紀ばかり以前の話です。

#### 大隅国府跡と国分寺跡

平田 薩摩国府跡発掘調査を始めたのが昭和39年。その翌年、文部省の科学研究費を貰い、並行して大隅国府跡も調べました。大隅国府跡・国分寺跡の想定図は文部省への報告に提出しました。一般向けの文章は、25年前、国分高校創立七十周年記念誌に「国分物語」と題して掲載しました。

#### 多拝国府跡と島分寺跡

平田 退職してから暇が出来ましたので、種子島に出掛けて南種子町の「里」という所に多拝国府があったことを確認しました。

「里」の北、約1.5km程のところに「郡原（こおりばら）」という台地があります。薩摩国分寺跡がある台地よりもちょっと高いのですが、周囲は水田地帯です。此処が郡家跡だと云われて来たのですが、現地を見た時に土師器の破片の他に須恵器の破片が落ちていたのに気付きました。周辺の地名を調べると寺田とか寺東・寺西という地名がたまっているのです。南種子町の埋蔵文化財担当者に郡家跡よりも多拝島分寺跡の可能性が強いと

伝えて来ました。

多拝国府跡と見た「里」という所。2町程の広さの所に半町（0.5町）単位の碁盤目状の地割が残っていました。しかも地割の方向は、奈良平安時代によく用いられた北極星を見通した方向すなわち真北（しんぱく）の方向になっていました。さらに地表には土師器や須恵器、青磁・白磁の破片が「郡原」同様に散布が見られました。

このように多拝国府跡も2町四方の規模で残っていることを確かめて来ました。

そういうことを会報110号に書きました。

#### 大隅国・薩摩国の駅路

平田 昨日、鹿児島大学の史学会で「薩摩国市来駅の問題点」を発表しました。レジュメを余分に作って置けばよかったのですが、数が足らず次回に配付します。

薩摩国駅家の順序は市来駅・英祇駅・網津駅・田後駅・櫟野駅・高来駅。大隅国の駅家は蒲生駅と大水駅。これらの8駅が延喜式に記されています。今一つ知られていることは延暦23年（804）、薩摩国薩摩郡田後駅と大隅国桑原郡蒲生駅の間が離れすぎているので、人々は皆困っている。途中に駅家を設けようということになって、櫟野駅が置かれます。

市来駅について、昭和14年刊行の『鹿児島県史』は説明抜きで日置郡市来だと決め付けています。市来は水陸交通の要地ですから、誰が考へてもすぐ思い付く大きな地名です。会報110号の後の方に、昨日発表した内容の要旨を、「市来駅の問題点」としてまとめてあります。

この地図は20万分1図です。出水市武本の小字「市来」はこの辺になります（地図上にマグネット=マークを置いて行く）。英祇駅

は阿久根市山下。背後の山は中世の莫称城跡です。その山下です。英祇駅の比定地としてよいと思います。網津（おうづ）駅は、川内川河口の集落に網津が現存します。薩摩国府は此處になります。

武本市來說を唱えた面々は九大グループで小字市来には土師器・須恵器の破片の散布地が発見されました。それが契機となって出水市教委が発掘調査を実施しました。私が出水中央高校に非常勤講師で行っていた頃ですから、十数年前のことです。平良（たいら）川の上流左岸の河岸一帯の水田なんですが、水田全体に遺物が散乱していました。報告書は未だ出ていないと思います。遺構は発見出来ず成果はあがらなかったのではないかと思います。

私が調べたのは西海道すなわち九州全体の駅家でした。97の駅家がありました。その中で薩摩国が6駅、大隅国が2駅です。他の国々と比べると、駅の数が少ないのです。他の国々の特徴を概観すると、そうですね。会報110号の5ページを開いてください。左側の方に筑前国駅から対馬までを掲げてあります。筑前国15郡105郷19駅を始めとして西海道各國の駅馬・伝馬の数を示しております。これらを見比べると薩摩国は13郡35郷6駅、大隅国は8郡37郷2駅。あまりにも少なすぎる。各国の状況を調べると、国府が脱落している国はないのです。大隅国は国府を抜かしているのです。薩摩国は説明がありませんが高来という駅がある。薩摩国府は高城郡にありました。

先程、略図を描きましたが川内高校は薩摩国府跡の西南隅にあるのです。すぐ北側に高木さんという家があります。その近くで「高

木」と書いた墨書き土器が出土しています。

また川内高校のすぐ側に「日駒（ひのこま）」という小字があります。毎日馬が出て行ったことを物語る地名です。そういうことから、高来駅は薩摩国府に付随した駅家だった、と判断出来ます。

西海道諸国を眺めた場合、ほとんどの国は国府のそばに駅家があります。国府が中央政府の命令を伝達するわけですから、国府の側に駅家があるのは当然すぎることです。大隅国は蒲生駅と大水駅しか書いてありません。国府の側の駅家を書き漏らしています。何という駅であったのか判りません。

これらの駅路の解釈を進める突破口が出て來たのです。此處に大隅国府がありました。

（地図上にマグネット=マークを置く）。国分の府中になります。此處が都城：島津駅。蒲生駅は上久徳（かみきゅうとく）辺り。櫟野駅は此處（市比野）です。まだ10年は経っていませんが、財部町と国分市の境に高篠遺跡というものが発見されました。どうも官衙跡のようだ。この辺に牧があったので牧をつかさどる役所を兼ねた駅家があったのではないかと注目され、埋蔵文化財センターから呼ばれました。その時にこのようにマグネット=マークを並べたのです。

薩摩国府—櫟野—蒲生—大隅国府（国分府中）—島津駅（都城）と並べたのです。薩摩郡田後駅は川内川を挟んで現在の川内駅付近にあったと見ればよい。そうすると、薩摩国府—大隅国府—島津駅を結ぶ駅路は大体一直線に並びます。そのような中で、大隈国府—島津駅のちょうど真ん中にある高篠遺跡は駅家の跡であると見てもよいのではないかとの話をしました。

薩摩国の駅家の問題では市来駅と田後駅と高来駅が決まれば、鹿児島県の駅路はすべて解けるとのことで、昨日これらのこととを発表したのです。

西海道には97の駅がありました。大体郡の名か郷の名前、少なくとも大字の名前で駅名が付けられています。小字の名前で駅名としたのは7駅しかなく、その中に鹿児島県の駅が3つ含まれています。一つは市比野ではなくて入来町市野々説です。入来町で唱えられた説で市比野では蒲生から遠いということ、市野々説が出て来たと思うのです。

#### 駅間距離

平田 駅間距離すなわち駅と駅との距離は三十里という飛鳥時代の尺度です。レジュメにはその計算方法も示してあります。30里 = 16.02 km。この説明にはVサインをよく用います。これは男性でも女性でも余り変わりはなく、大体8 cmです。2万5千分1図では2 km、5万分1図では4 kmです。4 kmは日本的な表現では1里になります。20万分1図では16 km。16 kmは駅と駅との距離になります。駅を考える時は指を広げて探した方が早いのです。

入来院貞 飛鳥時代の1里というのは？

平田 その1里は534 mになります。レジュメには判りやすく計算してあります。

高麗尺（こまじやく）は、飛鳥時代のものさしで、1尺が35.6 cm。奈良時代の尺は天平尺で、1尺は29.7 cmになります。

天平尺 × 6/5 = 高麗尺

高麗尺5尺 = 1歩

35.6 cm × 5 = 178 cm

300歩 = 1里

178 cm × 300 = 534 m

#### 駅間距離の30里は

$$534 \text{ m} \times 30 = 16.02 \text{ km}$$

こういう計算になります。駅間距離が長すぎるとか短かすぎると云いますが、馬で飛ばせば大した変わりはないのです。急ぎの時は8駅行ったと云います。100 kmはこなせたのです。鹿児島から出発して次々に馬を乗り変えて行けば出水あたりまでは行けたと思うのです。

16 kmをのること馬に揺られて行く。1駅行っては泊るという優雅な旅は考えられません。馬に揺られて行つても3駅か4駅を行くのが1日の旅だったと思うのです。16 kmは4里でしょう。妙円寺参りは20 kmを1日で往復したのです。これは歩いての行程です。

駅間距離に若干の伸びがあったにしても、人が多い便利な所に駅家が置かれたと見てよい。また直線的コースを辿ったのが古代の官道（駅路）だったと見てよいと思います。

高来駅は薩摩国府にあった駅。もう一つの問題は市来駅ですが、英祢駅から片づけましょう。少し山手に入りますが、阿久根市山下の山下小学校付近に英祢駅を求めたらよいと思います。その理由の一つ、山下集落の背後に山があります。その山にあったのが中世の莫祢城です。莫祢城（阿久根城）の下にその昔英祢駅があったと見るのが、歴史の流れから見て自然ですから、山下を英祢駅の比定地としてよいと思います。

網津は川内川河口の集落です。網津駅の遺称地名と見てよいでしょう。

#### 瓶島との海上連絡路

平田 出水市武本に市来駅があったとしたら、瓶島と連絡するには黒之瀬戸を通らねば

ならない。英祢駅（阿久根）から行く場合も同じで、北東風に乗ることになります。鹿児島の言い伝えでは「北東風は（きたごちや）雨」です。船出したら雨になり、海上は嵐になるのです。出水・阿久根は瓶島と連絡を取ることは出来なかったのです。

京泊・網津は、江戸時代には瓶島から塩を運んだことが記録にありますが、昔の船を考えると東風での航海も天候が崩れて雨になる物騒な航海だとみられます。

最も安定している航海は、夏の南東季節風を利用することだったと気付きます。この航路は市来～瓶島だった。この航路を実際に往復した人物として伊能忠敬がいます。その記録が残っています。そうすると、薩摩国市来駅は日置郡市来にしほられて来ます。

資料に筑前国から対馬までの各郡・郷・駅の名を列挙しましたが、駅名は大体郡名か郷名を探っています。小字名を探ったのは鹿児島県の3駅を含めて7駅しかない。小字名を比定地にする解釈は、無理があったのです。7駅は眉唾物と云わざるを得ません。出水市武本市來說は消えます。

#### 大水駅

平田 鹿児島県の駅家について問題提起したのは小園公雄氏。俊寛配流の道が平家物語にあるので、それをヒントにしたものでした。日豊本線に大隅大河原という駅がありますがそこに大水駅を求める論文を書き、それから盛んに駅が問題にされるようになりました。高築で遺跡が見付かった時、官衙的遺跡ということで、此處が大水駅ではないかと私が呼ばれて意見を求められたのです。

大隅国にとって重要なのは大宰府と薩摩国との連絡。日向国との連絡はその次の問題で

蒲生駅は薩摩国への道にあり、大水駅は大宰府へ向う道にあると見るのが、自然の解釈になります。

薩摩国～大隅国の中は大体一直線に並びます。高築はその延長線上にあるので、駅家と見てもよいだろう。但し、駅の名は延喜式では漏れていた。

大水駅は肥後の仁主駅・佐職駅とつながる駅で、駅路は直線的だったとすると、川内川の渡河地点に大水郷・大水駅があったと考えるのが自然の解釈です。此處は西太良（にしたら）辺りになります。しかし、西太良～国分間の距離は離れ過ぎており、中間の溝辺にもう一つ駅があったと考えなければならぬ。駅があったとするよりも溝辺に原初的な大隅国府があったのかも知れない。それが稻積城だと見てもよい。竹子（たかせ）稻荷神社の祭神に稻積神の名があります。溝辺～蒲生・溝辺～大水は大体同じ距離で、駅間距離としても適当です。国府を除いて蒲生駅・大水駅の記録が残ったのかも知れません。

候補地は溝辺の上床山です。その隣には、高屋山陵があります。高屋とは本来高い建物という意味ですから、官衙的なものに名付けられる呼び名です。日本全国の駅名の中で高屋という地名を拾ってみて、高屋がそういう官衙の跡であるとの証拠を見付けさえすればさらに有力な説になると思います。

大水駅があった場所と考える西太良に行き見回すと、対岸に羽月があります。川内川・羽月川の合流点の少し下流の川の真ん中に白鷺が沢山浮かんでいました。浮かんでいるのではなくて、白鷺は立っているのです。白鷺が立つ深さですから歩いて渡れるのです。その時思い出したのは豊臣秀吉の島津攻めでし

た。秀吉が率いて来たのは肥後路・日向路の両方で20万。薩摩に攻め込んだのはその中の8万ぐらいでしょうか。8万の軍勢が一気に渡った場所は此処しかない、と気付きました。西太良から対岸を見ると、遙か向こうの真正面に、鳥神山(とがみやま)が見えます。

この道を行けば肥後国に出るとの展望が持てます。古代でも近世でも、肥後国への道はそこにあったのです。大水駅は此処に求めるべきだと思います。

大水駅は次号で説明としてありますから、大水駅の説明をした次第です。また、溝辺がこのルートでは重要だというと、二見さんが張り切るでしょうけど(笑い)。少し休憩しましょう。

#### 〔質疑応答〕

#### 大水郷の命名

上野 大口の南から304号線を下って来ると、大住。

平田 大住(おおすみ)古墳群のある處。

上野 大住は「おおすみ」と読みますが。

平田 現地では大住(うすん)古墳。

上野 「おおみず」または「おおすみ」と読むのか。

平田 大水(おおみず)。鹿児島県で最も偉大な水を感じさせるのは曾木の滝だと思う。

上野 あゝ、すぐ下流ですね。

平田 曽木の滝を見ると、凄い水だと感じて「大水」の呼び名を付けるだろうと思うのです。曾木の滝を見て、そのように思いました。曾木の滝を含む処が大水郷だな、と。昔太良郷というのがありましたが、太良が大水に化けたのだという説もあります。

太良の地から見れば川内川と羽月川合流点の少し下流に、その昔、宮之城線の鉄橋が

架かっていた。そこは浅瀬で鉄橋が架け易い場所です。川の中でも容易に作業が出来た。そこを豊臣秀吉も8万の軍勢を率いて、一気に渡った。多人数を待たして置いて、少しずつ渡っていたら、どこから攻められるか判らない。渡場を調べていたと思うのです。そこに立つと秀吉の軍勢が一気に渡って行ったなということことが理解出来ます。

#### 月の盈虚と暦

平田 青柳さんがちょっと説明したいとのことです。

青柳 今年の旧暦の年の初めは2月14日。今年の干支は庚寅(かのえとら)ですから、去年は己丑(つちのとうし)でした。旧暦は月の運行を中心とした暦です。月齢は新月で始まりますから、現在は下弦の月という感じです。やがて全く消えてしまう日があるので、月の形が無くなるのです。その時を以て朔日が始まります。旧暦に関してはそういうことです。

後の方の説明。一つは日食との関係、今一つは月食との関係です。それから睦月・如月・弥生などの月の呼び名があります。それがどういう役割をはたすかということが書いてあります。

最後の部分は薩摩暦についてホームページで調べたものを載せました。慶応3年(1867)の薩摩暦。この暦の脇の方に二十四節気が書いてあります。節があつて、立春・雨水・啓蟄・春分…と続きます。立春は太陽暦の2月3日・4日頃、雨水は2月18日頃、啓蟄は雨水の日プラス15日。さらに15日プラスすると春分と続きます。去年閏年があった関係で、後れています。節分を省いて雨水から始まっている感じです。

今年の暦によれば、旧暦の5月15日に部分日食が見られます。時間的にもよい感じです。もう一つ書き落としましたが、6月朔日に金環食があります。南半球では見られますが、日本では見られません。

平田 毎月の月の盈虚を説明して頂いています。平安時代であれば陰陽博士という存在(笑い)。月の盈虚というのは、昔は専門職がいたようで、非常に難しい。

二見 これは貰ってよいですか。

青柳 はい。(以下、録音不良)

#### 〔質疑応答〕

#### 『薩摩乃古府』

入来院貞 藤井重寿が薩摩国府のことを書いていますよね。歴史研究第1号で賞を貰っています。

平田 あゝ、そうですか。賞のことは知りません。藤井さんが『薩摩乃古府』を書かれたのは知っています。

入来院貞 賞を貰っています。

平田 『薩摩乃古府』を書かれたのは昭和39年頃だと思います。私と同じ頃、薩摩国府を調べておられたのです。藤井さんのその本に基づいて、私が発掘したと誤解されていたのですが、私は全く別の立場で薩摩国府跡を調べました。薩摩国府跡を見付けて発表したのは私の方が先なんです。発掘調査をした後に何回がお逢いして、藤井さんからその本を貰っています。

入来院重 私の叔父です。

平田 そうですか。熱心な方でした。

(編集時後記)：薩摩国府跡調査

(1) 平田信芳「薩摩国府・国分寺の位置および規模について」川内市『文化財』第1集、別冊。S.39.3.

(2) 第1次薩摩国府跡調査。S.39.4(調査主体川内高校)

第2次薩摩国府跡調査。S.39.8(調査主体川内高校、九州大学鏡山猛教授指導)

(3) 藤井重寿『薩摩乃古府』1965年1月(S.40.1)

(4) 昭和40年8月、鹿児島県教委主体の発掘調査開始。昭和42年12まで。

#### 上名・下名

二見 今日読んだ所で上名・下名という地名が出て来ましたが溝辺にもあったのです。

平田 下名・上名は多いですよ。

二見 「市」の名前も多いけど。

平田 「市」も各地にあります。

二見 小字はいつ頃出来たのですか。

平田 古いよ。

二見 古いのは判るけど。どれくらい?

平田 戦国時代の土地台帳には出て来ますからね。鹿児島県の史料では「平松水田坪付帳」。1500年のものが、それには小字がずらりと書いてあります。土地を調べて報告する時に小字を書いて出したのでしょう。それがいつ頃まで遡るのか、詳細な史料は知りません。

二見 最近は畠地の統合がどんどん進んで行って、小字をつぶして新しい地名を付けている。だから、どんどん消えている。昔の小字でない所に、別の地名が入っている。

平田 それは役場が悪い。

二見 役場が悪いのですね。

平田 私の経験だけど、鹿児島空港への着陸態勢に入って、二・三百メートル上空から下を見ると、現在の地割と違う土の色が出て來るのです。昔の地割が土の色で残っているのです。若い人たちは飛行船に乗って空中から土

の色を見て、それに基づいて条里復元をやつたら良いと思う。小さかしい人間の知恵は土の色で完全に否定されることがある。空の上から見ると、びっくりするのです。

二見 小字も大体終焉に近付いている。小字の小道も。

平田 大字と大字の境界を通る道は古い道が多い。それが直線的であればなおさらです

二見 道を真っ直ぐに造るために小字は無視されているようです。

平田 そうね、古い絵図は残して置かなければならぬね。

二見 文化財を保存するのは余程のことだなと思う。小字をしっかり残さなければ。

平田 それは、どこかでしっかり保存しなければならない。土地台帳などは明治23年頃作成したのが、古いものです。それでも百年経つわけですから、ぼろぼろになる。

入来院貞 以前、小字を調べて説明しましたが、小字の読みなどが役場でもう判らないのです。

#### 宇土・草道・泰平寺

上野 601ページに「本郡に託万・宇土・合志」とあって、合志は鶴田の神子。西南の白男川の所に「宇土」とあります。

平田 宇土郷は宮之城だな。

上野 そこから先になると、東郷山田とか川内の方に続きます。

平田 鹿児島県には「宇都」という地名は多い。「迫」の奥の方が「宇都」になる。斧淵（おのぶち）というのは川内川の流れが斧の刃のように曲がった所があります。地形から付いた名前だらうと思います。

草道は草藪の中を道が通っていたのでしょ。草道を通る時、そのように思いました。

泰平寺の布目瓦は天辰（あまたつ）の山の中に寺跡とみられる所があつて天辰庵寺と名付けたのですが、その瓦と同じものが泰平寺の境内の中で今でも出土します。境内を歩くと目に付きます。

#### 「せんだい」という地名

平田 会報110号の最後に「せんだい」という地名を説明して置きました。奥州川内は陸奥国、薩摩川内、静岡市の千代（駿河国）愛知県稲沢市千代（尾張国）、鳥取県の千代川（伯耆国）、岡山県の美作千代、すべて国府と結び付いています。仙台は国府を意味する言葉だと思うのです。

？ 「せんだい」は国府とどういうふうに結び付くのですか。

平田 仙台は中国風の官庁名だと思うのです。「仙」というのは、地方に移る・出掛けの意味。「台」は台閣で役所のこと。川内にも昔「仙台閣」というのがあったとの言い伝えがあり、それから川内になったのだといふ説もあります。上皇や法皇の御所を仙洞御所という表現もあります。

#### 衣(え)(そ)の読み

青柳 衣評督・衣君が覇國使をおどしたとの話がありますが、衣は「え」と読むだけでなく、衣(そ)とも読めるのではないか。万葉集に衣(そ)と讀んでいる例もあります。

平田 衣通姫(そとおりひめ)の例もある。

青柳 最も理解し易いのは、大隅国曾郡・曾於郡になって行く襲(そ)の略字として、衣が用いられていたのではないかと考えるのです。衣は襲を省略した形で、衣君は奈良時代の曾君(そきみ)につながるのではないか。

平田 新しい説だね。

青柳 そう思うのは、曾君県などが朝廷と

結んで官名を貰うのは鹿児島県のどこであつたかを考えると、曾於郡の豪族しかないわけでしょう。薩摩半島の南の端の穎娃の豪族がいきなり朝廷から官名を貰うことがあり得るのかと思つたりしたのが一番の理由です。

平田 面白い解釈だ。もっと整理して発表して下さい。

青柳 可愛と穎娃。つながりがあるのか。関係があるのか、ないのか。それが判らないのがあったので、関係はないですね。

平田 それはまだ判らない。「可愛」には西郷隆盛が永井から可愛嶽を突破して城山に帰って来ます。その他、宮崎県延肥にも可愛山陵があった。幕末における可愛山陵の各説で、鹿児島藩領内のことだから、川内にあるものが本家となってしまった。

また、古事記での話。イザナギノミコトとイザナミノミコトが八尋殿を右回り・左回りをして出会う。出会った時に「あなにえし、えおとこよ」「えおとめよ」と呼びかける。「美しい男よ」「美しい女よ」と呼び合う。可愛というのは、そういう「愛すべき」状況から、その表現は出て来た。

穎娃は本来「江」から始まっている。江の一字だけでは落ち着きが悪いので、地名は佳字二字で表記せよとのことで「穎娃」という表現が生まれた。だから穎娃と可愛では同じ「え」でもちょっと性格が違う。

覇國使がおどされ、処罰される。それが薩摩國建国の契機となった。どうだろう、貴君がいいうように、穎娃一帯に朝廷の使者に圧力を加えるような有力者が存在し得るのか、否か。それは未だ判らない。

和名抄では開聞郷と穎娃郷の二郷で穎娃郡が構成された。薩摩國一宮は枚聞（開聞）神

社になるわけでしょう。開聞岳の麓に薩摩国の象徴とも云える薩摩國一宮枚聞神社があるわけだから、穎娃は力がなかったとするわけにはいかない。余程、周辺を調べて行かなければなければならない。

青柳 人々に注意を喚起することは必要でしょう。

平田 衣通姫の例があるからね。

青柳 今まで、誰も云わないことだから。

平田 小説めいたふうにして書けば良い。

青柳 先生みたいにえらい人が云えば、皆注目する（笑い）。

入来院貞 云い古されて来たものを簡単に否定するのは大変。

#### 佳字二字表記の地名

米原 先程の衣評（えのこおり）。1字では体裁が悪いから2字で表現せよというの？

平田 奈良時代の初めに、佳字2字を用いて地名を表現せよと、中央政府の命令があつたのです。奈良時代の初め、元明天皇の時に命令が出ています。

上野 中国の地域名は1字。漢とか吳とか越とか。

平田 中国は地域名・名字は1字が基本。

米原 「衣」が「穎娃」の2字になったのは、その頃ということですね。

平田 和名抄では「穎娃」と2字になっています。

青柳 奈良時代の早い時期に、2字表記になっています。

（編集時後記）大隅国設置は和銅6年（713）4月。地名の佳字表記と各国風土記の編纂命令は和銅6年5月のことだった。

なお『続日本紀』には地名は佳字を用いようと、2字とは限定していない。

## 川合陵

上野 600ページの下段うしろから6行目、「川内河に臨み一大古墳あり川合山と云ふ」とあります。

平田 神亀山（しんきざん）というのは、亀のような形をしています。新田神社が山頂近くにあって、その背後に可愛山陵があります。亀の頭の部分が端陵（はしのりょう）。可愛山陵と端陵の間に中陵（なかのりょう）があります。

山の形から云うと、可愛山陵と新田神社は背中合せで、一番高い部分になります。新田神社は階段を登って行くと中程に広場があります。そこに車を止めます。その広場に初めの新田神社があったと云います。江戸時代に現在の山頂部に移ります。

川合陵というのは川内川の支流になる高城（たき）川と麦之浦川の合流点近くにある山です。二つの川の合流点だから、川合山（川合陵）と呼ばれたのです。高城川と麦之浦川は合流すると、五代集落の南を流れて五代と小倉の境で川内川に合流します。

高城川・麦之浦川の合流点より少し下流が外川江（そとかわえ）という小字で、そこの河川改修工事で発見された、足の踏み場がない程の大量の土器破片の集積地がありました。それが外川江遺跡で、その発掘調査に苦労させられました。

上野 私が気にするのは川合も「かあい」と読む。可愛も「かあい」と読めるのです。

平田 どちらも「かあい」と読めるか（笑い）。しかし可愛山陵を「かあい」陵とは云わない。

上野 だけど、川合（かあい）と読めば、可愛も「かあい」と読める。

平田 川合陵の方は誰になるのかな。ニニギノミコトに関わる人物だろうけど、また、川合陵と云っているけど、古墳である確証はない。陵と云いながら、未だトレーンチも入れていない。

上野 私が云いたいのは、可愛山陵（えのさんりょう）と云っているけど昔は可愛（かあい）山陵と読んでいたのではないか。その方がカワイイ。

平田 可愛（えの）は愛らしい。川合は二つの川の合流点。

上野 漢字では、ですね。

平田 漢字ではね。だけど、川内では川合（かわい）とは云わない。「かわいい」と云っている。

上野 愛くるしいというのを「カワイイ」という（笑い）。

平田 それは昔の人に聞いてくれ、と云いたい。

入来院貞 川合陵と呼ばれるのは今もあるのですか。

平田 あります。川合陵というのは、山です。それを川合陵と呼んでいるだけのことです。神亀山の端の方、端陵を取り巻く道から眺めると、川合山（川合陵）は真正面に見えます。

（編集時後記）

平成4年の例会で江之口汎生氏の研究発表があったことを思い出した。そのレジュメのコピーを112回例会で配付する。その要旨は「江戸時代初期には川合陵が可愛山陵として崇拜されていた。新田神社と可愛山陵が結び付くのは、江戸時代後半になってからのことである」と。

# 薩摩国「市来駅」の問題点

平田信芳

## (1) 駅路と伝路

駅路：国府と国府を結ぶ官道。駅馬20疋～5疋。駅鈴（公用の官吏が用いる）。

駅馬 大路 20疋 中路 10疋 小路 5疋

道路幅 大路・中路 12尺 小路 9尺（大隅・薩摩はそれ以下だろう）

伝路：郡家と郡家を結ぶ官道。伝馬（郡家ごとに5疋が普通）。伝符（公用を示す）

## (2) 駅家（えきか）

駅路沿いに三十里ごとに設置。国司の監督下。駅の責任者は駅長。

駅馬を常置。経費充当の駅田・駅稻を支給（大路4町・中路3町・小路2町）。

伝馬の経費は郡家負担。

## (3) 駅間距離：駅家と駅家の距離 = 30里（飛鳥時代の里数）

高麗尺=飛鳥時代のものさし

1尺 = 35.6cm = 天平尺 × 6/5

1歩 = 35.6cm × 5 = 178cm

1里 = 178cm × 300歩 = 534m

30里 = 534m × 30 = 16,02m

天平尺=奈良時代のものさし

1尺 = 29.7cm

曲尺・鯨尺・呉服尺

曲尺 × 5/4 = 鯨尺 30.3cm × 5/4 = 37.875cm

曲尺 × 6/5 = 呉服尺 30.3cm × 6/5 = 36.36cm

## (4) 大隅国・薩摩国の駅路・伝路

大隅国駅馬 蒲生・大水各5疋

薩摩国駅馬 市来・英祢・網津・田後・高来各5疋

伝馬 市来・英祢・網津・田後各5疋

## (5) 西海道諸国の郡郷駅数・国府所在郡・駅馬・伝馬

筑前 15郡 105郷 19駅 御笠郡：駅馬？・伝馬15疋

筑後 10郡 54郷 3駅 御井郡：駅馬5疋・伝馬5疋

豊前 8郡 43郷 9駅 京都郡（仲津郡）：駅馬？・伝馬？

豊後 8郡 40郷 9駅 大分郡：伝馬5疋・高坂駅駅馬5疋

肥前 12郡 51郷 15駅 （佐嘉郡）小城郡：佐嘉駅：駅馬5疋

肥後 14郡 98郷 16駅 （託間郡）益城郡（飽多郡）

蚕養駅：駅馬5疋・伝馬5疋

日向 5郡 28郷 16駅 児湯郡：児湯駅 駅馬5疋・伝馬5疋

大隅 8郡 37郷 2駅 （嚙吟郡）桑原郡：駅馬？・伝馬？

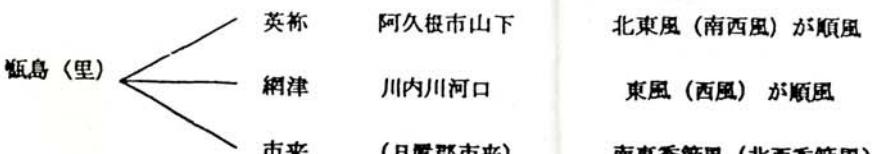
薩摩 13郡 35郷 6駅 （高城郡）高来駅：駅馬5疋

毛岐 2郡 13郷 2駅 石田郡：優通駅：駅馬5疋

対馬 2郡 11郷 下縣郡：駅馬・伝馬の記録なし。

## (6) 「市来駅」の問題点

1. ①日置郡市来が遺称地名（鹿児島県史・角川日本地名大辞典46）  
②日置郡市来、出水郡家が脱落（「鹿児島県の地名」①②③説を紹介）  
③出水市武本字市来说（出水市教委が発掘調査）
2. 西海道諸国の駅路については大半が順序通りに挙げられているが、筑前国・豊後国・薩摩国は順序不同。西海道諸国の駅家は郡名・郷名と一致するものが多い。
3. 市来駅は薩摩国の最初にあげられているが、從来出水郡家との関わりを考えた論者はいない。市来駅を出水郡の中に求めながら、高来駅の順序には煩かむりであった。
4. 出水市武本字市来が比定地とされるが、小字「市来」を遺称地と見てよいのか。
5. 市来・英祢・網津3駅の中で、瓶島との連絡に好都合なのはどこだったのか？



6. 文化7年(1810)、伊能忠敬の瓶島測量（海上13里の航海）

8月1日 市来浜朝六ツ半(a.m.7:00)→八ツ半前(p.m.3:00)瓶島里村着

8月19日 里村四ツ頃(a.m.10:00)→順風(北風)で九ツ半(p.m.2:00)串木野浜着



# 西海道諸国の郡・郷・駅

## 筑前国

15郡 105郷・19駅

郡	駅	郷
怡土	深江	飽田 安久多・託杜・大野 於保乃・長野 奈加乃・
佐尉		雲須 久毛波留・良人・石田 伊之木・海部 (8郷)
志麻	(比喜)	韓良・久米・登志 度之・明敷 安加之岐・鶴永・川邊・志麻・(加夜) (7郷)
早良	額田	毘伊 比・能解 乃計・額田 奴加多・早良 佐波良・
		平群 倍久利・田部 多倍・(曾我) (7郷)
那珂	石瀬	田来・曰佐・那珂・良人・海部・中島・三宅・
美野		山口 也萬久知・板曳 伊多比岐 (9郷)
席田	久爾	石田 伊之多・大國 於保久爾・新居 爾比井 (3郷)
糟屋	夷守	香椎 加須比・志珂・厨戸・大村 於保牟良・池田・阿曇・
		柞原 久波良・勢門 世止・敷梨 (9郷)
宗像	席打	秋 安岐・山田 也萬多・怡土 伊度・荒自 阿良之・ (14郷)
津日		野坂 乃佐加・荒木 安良木・海部 安萬・席打 牟之路宇知・
		深田 布加治多・蓑生 美乃布・辛家・小荒・大荒・津九
遠賀	島門	埴生・恒前・山鹿・宗像・内浦・木夜 (6郷)
夜久		
独見		
鞍手		金生 加奈布・二田 布多多・生見 伊無美・十市 止布知・
		新分 爾比岐多・粥田 加都多 (6郷)
嘉麻	綱別	草壁 久左加倍・三緒 美平・大村 於保無良・綱別 都奈和岐
		馬見 牟萬美・碓井 宇須井・(山田) (6郷)
穂浪	伏見	三坂 美左加・薦田 古毛多・土師 波之・堅磐 加多之萬・
		穂浪 布奈美 (5郷)
夜須	限崎	中屋・馬田・賀美・雲提・刈島・栗田 (6郷)
下座		馬田 無萬多・青木 安乎木・饗 久波倍・三城 美都木・
		城邊 木乃倍・立石 多天之 (7郷)
上座	把伎	把伎 波木・壬生 布・廣瀬 比呂勢・祚田・長淵 奈加布知・
		何束・三島 (7郷)
御笠	蘆城	御笠・長岡・次田・大野 (4郷)
	長丘	

## 筑後国

10郡 54郷 3駅

郡	駅	郷
御原		長柄・日方・坂井・川口 (4郷)
生葉		大石・山北・姫治・物部・椿子・小家・高西 (7郷)
竹野		柴刈・二田・竹野・長柄・船越・川會 (6郷)
山本		土師・蒲田・古見・三重・芝澤 (5郷)
御井	御井	御原・伴太・殖木・弓削・神氏・賀駄・大城
		山家
三潴		高家・田家・三潴・鳥養・夜開・青木・荒木
		管綜
上妻	葛野	太田・三宅・葛野・桑原 (4郷)
下妻		新居・鹿待・村部 (3郷)
山門	狩道	大神・山門・草壁・鷹尾・大江 (5郷)
三毛		米生・十市・砥上・日奉 (4郷)

## 豊前国

8郡 43郷 9駅

郡	駅	郷
田河	田河	香春・雉怡・位登・城田 (4郷)
多米		
企救	杜崎	長野・蒲生 (2郷)
	到津	
京都	刈田	諫山・本山・刈田・高來 (4郷)
仲津		皆見・葛見・城井・狭度・高屋・中臣・仲津・
		高家
築城	築城	綾幡・桑田・鳩木 (搗木)・大野 (4郷)
上毛		山田・炊江・多布・上身 (4郷)
下毛		山國・大家・麻生・野仲・諫山・穴石・小楠
宇佐	宇佐	野麻・酒井・葛原・封戸・向野・廣山・垣田 (10郷)
		高家・深見・辛島

豊後国 8郡40郷9駅

郡	駅	郷	
日 田	石井	日田・在田・夜開・曰理・父連・石井	(6郷)
玖 珠	荒田	今己・小田・永野	(3郷)
直 入	直入	三宅・直入・柏原・朽網	(4郷)
大 野	小野	田口・大野・緒方・三重	(4郷)
	三重		
海 部	丹生	丹生・佐井・穂門	(3郷)
大 分	高坂	阿南・植田・津守・桂隈・判太・跡部・(武藏)・笠祖・笠和・神前	(9郷)
速 見	由布	朝見・八坂・由布・大神・山香	(5郷)
	長湯		
国 埼		武藏・来縄・国前・田染・阿岐・(津守)・伊美	(6郷)

肥前国 12郡51郷15駅

郡	駅	郷	
基 肆	基肆	姫社・山田・基肆 木伊・川上・長谷	(5郷)
養 父		狭山・屋田・養父 也布・鳥栖 止須・(曰理)	(5郷)
三 根		千栗・物部・米多 女多・財部・葛木 加都良木	(5郷)
神 埼	切山	蒲田 加萬多・三根 美爾・神埼 加無佐岐・宮所 美也止古呂	(4郷)
佐 嘉	佐嘉	城埼 木佐岐・巨勢・深溝 布加無曾・小津 幸都・坊所・山田 也萬多	(6郷)
小 城	高來	川上 加波加美・甕調 美加都岐・高來 多久・伴部止毛	(4郷)
松 浦	賀周	大沼 於保奴・生佐 伊岐佐・久利	(3郷)
	磐氷		
	逢鹿		
	登望		
杵 島	杵島	多駄・杵島 木之萬・能伊・島見 志萬美	(4郷)
藤 津	塩田	塩田 之保多・能美・託羅	(3郷)

肥前国 (続き: 以下は長崎県)

郡	駅	郷	
彼 杵	大村	大村 於保無良・彼杵 曽乃木・浮穴・周賀	(4郷)
高 来	山田	山田 也萬多・新居 爾比井・神代 加無之呂・野鳥 之止利・高來	(5郷)
	新分		
	野鳥		
	船越		
松 浦		庇羅・值嘉 知加	(2郷)

肥後国 14郡98郷16駅

郡	駅	郷	
玉 名	大水	日置・為太・石津・下宅・宗部・	(8郷)
	江田	大竹(大町) 大水・江田	
山 鹿		来民・箸入・温泉・小野・夜開・朽納・都村(津村)・神西・緒緑・伊智	(10郷)
		城野・水島・辛家・夜開・子養・山門・上甘・曰理・柏原	
菊 池	坂本	波良・知保・衣尻・阿蘇	(4郷)
		合志・小川・山道・鳥島・口益・鳥取	
阿 蘇	二重	三重・高原・鳥田・山本・殖生・佐野・本井	(7郷)
	蚊藪	宮前・加幡・小垣・私部・栗北・天田・川内	
合 志		水門・殖木・下田・市田・蚕養	
山 本	高原	桑原・上島・津守・酒井・波良・漆島・下井・三宅	(8郷)
飽 田	蚕養	當麻・子按・加西・坂本・益城・麻部・富神・宅部	
		宇土 長崎・諫染・櫻井・林原・大宅	(4郷)
託 麻		肥伊・高田・豊福・木行・小川	
		天 草 片野 豊向	(5郷)
益 城	球磨	波太・天草・志記・恵家・高屋	
		球玖・久米・人吉・東村・西村・千脱	(5郷)
宇 土	長崎		
八 代	片野		
天 草	豊向		
球 麻	高屋		

郡	駅	郷
葦北	佐敷	葦北・桑原・伴・野行・巨野・川田・水俣 (7郷)
	水俣	
	朽網	
	仁王	

日向国 5郡28郷16駅

郡	駅	郷
臼杵	長井	氷上・智保・英多・刈田 (4郷)
	川辺	
	刈田	
児湯	美祢	三納・穂北・大垣・三宅・観嶽・韓家 (8郷)
	児湯	平群・都野
	去飛	
那珂	当磨	夜間・新名・田島・物部(於部) (4郷)
	廣田	
宮崎	救麻	飫肥・田邊・島江・江田 (4郷)
	救式	
諸縣	亞榔	財部・縣田・瓜生 宇利布乃國加用野字・山鹿 (8郷)
	野後	穆佐・八代・大田・春野
	夷守	
	真研	
	水俣	
	島津	

大隅国 8郡37郷2駅

郡	駅	郷
菱刈	大水	羽野・亡野・大水・菱刈 (4郷)
桑原	蒲生	大原・大分・豊國・答西・稻積・廣田・桑善・仲川 國用中津川三字 (8郷)
贈崎		葛例・志摩 國用島字・阿氣・方後・人野 (5郷)

郡	駅	郷
大隅		人野・大隅・謂列・始臘・覆・大阿・岐刀 (7郷)
始羅		野裏・串伎・鹿屋・岐刀 (4郷)
肝属		桑原・鷹屋・川上・鷹麻 (4郷)
馭謨		謨賢・信有 (2郷)
熊毛		熊毛・幸毛・阿枚 有三郷 (3郷)

薩摩国 13郡35郷6駅

郡	駅	郷
出水	市来?	山内・勢度・借家・大家・國形 (5郷)
	英祢	
高城	網津	合志・飽多・鬱木・宇土・新多・託萬 (6郷)
	高來	
薩摩	田後	避石・幡利・日置 (3郷)
	櫟野	
甑島		管管・甑島 (1郷)
日置		富多・納薩・合良 (3郷)
伊祚		利納 (1郷)
阿多		鷹屋・田永・葛例・阿多 (4郷)
河邊		川上・稻積 (2郷)
頴娃		開聞・頴娃 (2郷)
揖宿		揖宿 (1郷)
給黎		給黎 (1郷)
谿山		谷山・久佐 (2郷)
寃島		都萬・在次・安薩 (3郷)

奄岐島 2郡13郷2駅

奄岐郡	伊周駅	風早・可須・那賀・田河・鯨伏・潮安・伊宅・伊周
石田郡	優通駅	石田・物部・篠原・沼津・時通
對馬島		2郡11郷
上縣郡		伊奈・向日・久須・三根・佐護
下縣郡		与良・豆酸・賀志・鶏知・玉調・(佐須)

## 可愛山陵の「川内の五説」について 要旨

鹿児島地名研究会  
4/3/1 江之口汎生  
1/2500/5000

### 《はじめに》

I この資料は『可愛山陵の川内の五説について』(3-12-17) ⇒『改訂 可愛山陵の川内の五説について』(4-2-12)を更に添削したものである

### II 2年9月2日の例会配付の資料は

- 『可愛山陵の研究』  
⇒前半は中世新田宮の祭神関係記事  
⇒後半は江戸時代の可愛山陵の位置を知る目的で作成  
『文献から見た可愛山陵の変遷』⇒上記資料から判明した事項  
∴ポイント (1)江戸時代川合陵が可愛山陵であった  
      (2)上記説は明治7年の御裁下當時まで続いたと推察される  
      (3)慶長年間以降領主によって可愛(川合)山陵が修復されたなど

### III この資料作成の目的

- 『記・紀』『延喜式』の表記からして当初から所在不明と推察され  
• 材料不足の現状では所在の追求には無理としつつも  
• 13世紀以来の可愛山陵=千臺説などを始め諸説があり  
• うち千臺説には五説があり背景等の比較検討が必要

#### 【1. 可愛山陵=川合陵説について】(別紙『可愛山陵の研究』(2-4-10 作成) 参照)

- 慶長7年(1602) 川内の棟札No.1・神社調  
• 延宝3年(1675) 一宮巡詣録=橋三喜  
∴ポイント (1)以来明治7年御裁下まで川合陵が可愛山陵  
      (2)慶長年間に領主が可愛(川合)山陵を修復

#### 【2. 国柱の可愛山陵の見解】(端陵説・中陵説の背景)

- A 寛政7年(1795) 名勝考には社殿下説 ⇒<今新田宮在處即ち所蔵皇孫玉體之處也>  
∴ポイント (1)…然天書之所記蓋得洋観矣  
      (2)建長八年文献に…山頂は陵の地と申よしもなけれハなり…  
      (3)「中(端)陵者而山嶺安盤石數行…其下有石櫛」  
      (4)『日向古墳備考』があり、墳墓の地域差を無視  
▲で当初の社殿下説を捨て中(現・端)陵  
∴ <可愛陵ト云ハ即新田宮ノ社殿ノ下ナルヘクモ被思候得共…>『旧史官調』

a 文政10年(1827) 神代三陵志=後醍醐院真柱(平田篤胤の古史傳卷三十一所収)

: <…謂る新田宮の鎮座地か、又御社の背に堆地のある其處などにや猶熟探べき也>

∴ポイント (1)前年の『新田宮參拝記』では可愛山陵は川合陵(推察)

(2)明治二年の神代三陵志と内容的な相違は少ない

・中陵石櫛発見は「文化二三年の頃」「端陵」

・古文書引用が少ない

(3)ニヶ所のうち断定は避ける

\* 『古史傳卷三十一の成立過程』(『愛媛の先覚者③』より)

- ・平田篤胤生存中に卷28までと卷29・卷30の一部分を書き残す  
・明治13年矢野玄道請われて卷29上・卷29中・卷29下・卷30を脱稿  
・明治16年官命で南九州方面等の資料収集の旅(島津家・執印家)  
・明治19年卷31～卷37を脱稿

\* 龜山山頂説は西遊雜記=天明3／新田宮禮讚詩=天明6／忠教測量日記=文化9など

B 寛政4年(1792) 神代山陵考

寛政7年(1795) 名勝考は中(現・端)陵説

∴ポイント (1)神代山陵考の「三陵一体」は神社撰集が初見

(2)の趣し (2)名勝考は文化三年以降の加筆がある

(3)三陵の中央で天書の縁之中山之嶺陵

(4)当時三陵中「御陵」と判るのは端陵のみ

C 文化11年(1814) 神代三陵取調書(=旧史官調)は???

∴ポイント (1)前二書とは中・端の呼称が逆

(2)文化三年石櫛発見か端陵→中陵へ

⇒(1)と(2)は運動し、可愛山陵=中陵説への伏線力

(3)ここでも天書の縁之中山之嶺陵

△文化三年中陵に石櫛発見による変更か⇒呼称の不自然さが解消

: 端は川合陵に起因した呼称となり川合≠可愛の彼の立場に矛盾

D 文化12年(1815) 三州神陵図(=神代山陵圖状及其由来記)は現・中陵説

∴ポイント (1)「神陵圖伴信友天保三年」(日本國誌)

(2)「高三百間余」は伴信友の加筆か

\* 上記二点は国柱の中風の発病時期に關係

\* 『付図』の年代(別作の資料『可愛陵図と神代三陵の近代資料』参照)

①『堺藩名勝考』 ⇔文化三年～文化十一年七月十日の間カ

- ・文化3年に中陵の松古枯、同11年7月10日大風で更に一本倒壊
- ・松木古枯を本文は端陵とし、付図は中（三本松）とす
- ・付図説明文に「中陵ヲ首トシ端陵ヲ頸トシ…」は？？？

②薩隅日三州神陵図 ⇔文化十二年の頃カ

- ・中陵2本松、鳥居（文化11年11月直後建立カ）、灯籠（側畔2脚）なし
- ・旧史官調の付図カ（神代三陵圖状及其由来記カ=薩州群書一覧）
- ・旧史官調は直後の「三山陵修復」と連動カ

【3. 新田宮社殿下説について】（国柱・真柱説は省略）

- ・慶応元年(1865) 神代山陵=田原篤實

∴ポイント (1)嘉永三年云々は疑問

- ・他に地理纂考のみで寺社巡詣録・神代三陵志には出す  
→田原篤實と樺山資雄は地理纂考の編纂に参画
- 神代山陵と地理纂考は共に中・端の呼称が逆

・手水鉢銘 <新田宮御造営嘉永元年三月始而二年四月而成就>

(2)文化三年中陵石碑発見と混同カ

<……磐石もて圍めり 今云石碑の如し此中之陵より……>

(3)嘉永年間の修造は棟札無く未完成

【4. 新田宮背後（現在地）説について】()

- ・明治6年(1874) 可愛山陵実検勘註=山之内時習助

: <…御陵ノ御石構ハ御山ノ中心地平近キ所ニ二座マスベキ歟モ計リガタク…>

∴ポイント (1)同書は神代三陵志の「現地照合」

(2)自身による古文書等の検討が不十分

(3)祭神は八幡としながら瓊々杵尊

【5. 「川内五説」のまとめ】

〔川合陵説〕 ⇔歴史的にまた実績上からも江戸時代以降は可愛山陵

\*それ以前は不明

〔端・中説〕 ⇔堺藩名勝考・図会とも「天書の縁之中山之巔陵」

◇名勝考は「中陵石碑発見前」で端陵=可愛山陵

→天書の中山に合致させたので「三陵中の中陵」⇒のち変更

◇図会は「中陵石碑発見後」で「龜山の中陵」

〔山頂説〕 ⇔社殿下・背後説とも根拠が薄く疑問

▲古文書等の検討が不十分で我田引水様の引用が多い ⇒不都合な文書は無視

【6. 新田宮縁起の可愛山陵について】（可愛山陵の原点）

▲現端陵の露頭遺跡 ⇒ 当時既に露頭していたカ

- ・安元2年文書に「山頂=御陵」は伺えない
- ・江戸時代においても「三陵」であり山頂を含むと四陵になる
- ・三陵中文化三年中陵に石棺発見以前に明確に御陵と知れるのは端陵のみ

△江戸時代の可愛山陵=川合陵は「宮・陵は別の場所」の発想力

【7. 中世新田神社の祭神について】（新田神社の変貌）

《編年史料は省略=『改訂 可愛山陵の川内五説について』『宮内八幡山の御祭神』参照》

建保2年(1214) 『新田宮縁起』に瓊々杵尊登場（八幡を容認する記述あり）

・見塩土翁而構城壁堆塚起高城千臺宮之處也

・可愛陵八幡宮者即天尊圓寂塔也

・『日本國薩州高城千臺可愛陵新田八幡宮大菩薩縁起』

・今者既云八幡宮、何謂天尊瓊々杵尊乎…

・我八幡新田宮者是自天照太神第三代彼八幡宇佐宮自天照太神第二十一代…

△これ以前は八幡神又は宇佐・男山との関係を伺わせる文書あり

△この間 2-20/1-25/2-21/2-25の各文書はいずれも八幡神

△「可愛陵」の表記は明治期まで持続

△現存縁起の書写年は寛文五年ではなく明治20年以降

→「西有三陵中陵・端陵・川合陵云々」は矢野玄道が実検した

→寛文五年当時は川合=可愛陵で「今云河合者誤也」は有り得ない

宝治元年(1281) 三所明神并五神御体為新田宮

・八幡三所に新たに五神御体が加わるも未だ瓊々杵尊は出ない

建長8年(1256) 初めて新田神社文書に瓊瓊杵尊登場

△建保2年～建長8年の42年間は八幡→瓊々杵尊への脱皮期間

△宝治元年の文書はその緩衝地帯の役目

△瓊々杵尊の出発点は新田宮縁起である⇒学問的に内容検討の必要性

▲新田神社は本来弥勒寺領新田庄の鎮守で八幡神を祭祀したもの

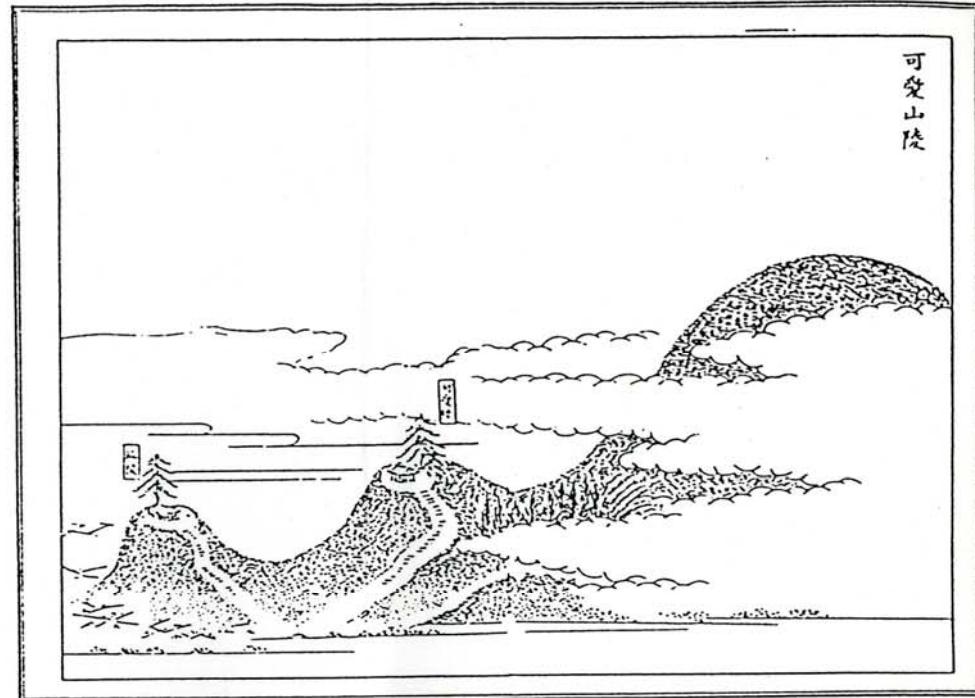
【8. 新田神社の神王面の記事について】

《編年史料は省略=『改訂 可愛山陵の川内五説について』参照》

▲神王面は正八幡にもあり(始2年1088瓊々杵尊とは別物)

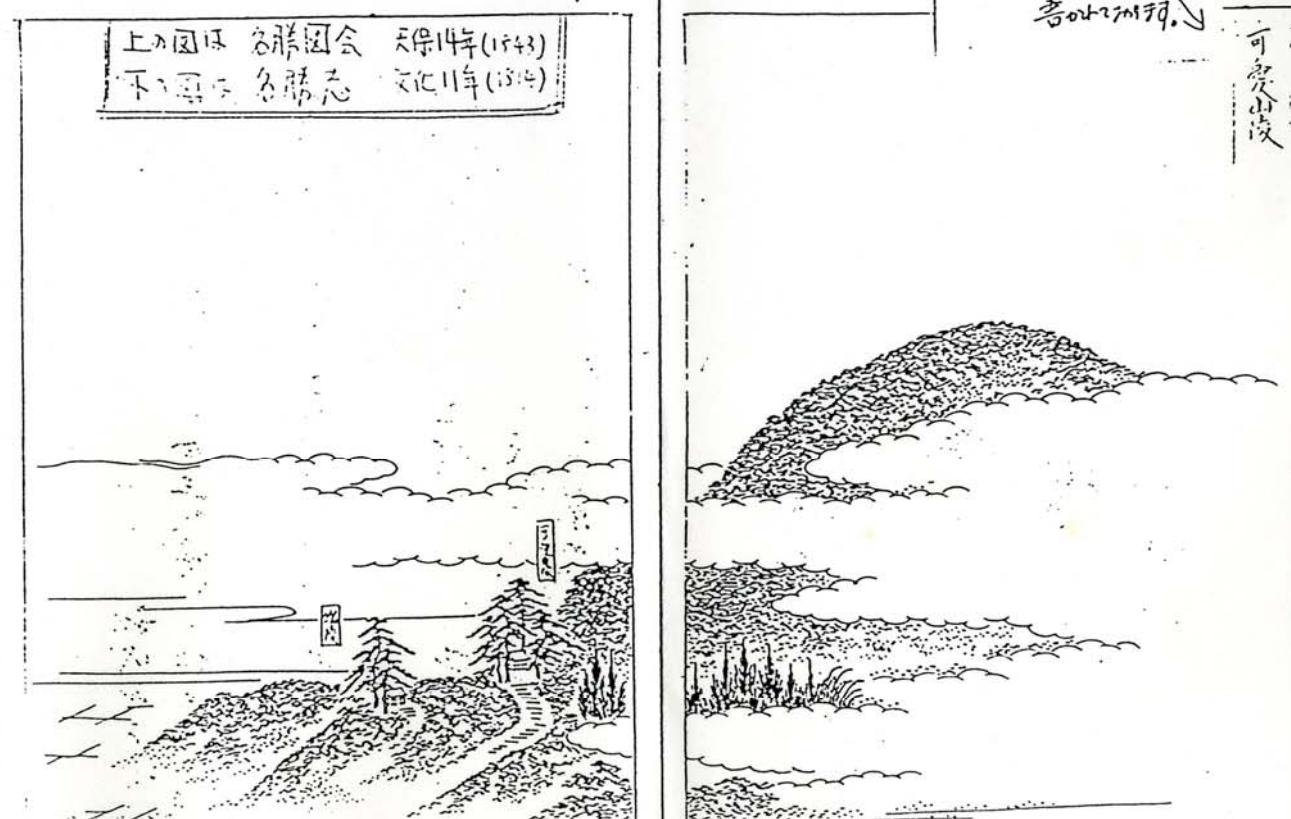
【付節II】【祭神関係の編年資料】《新田神社の変貌／右数字は文書番号》

長和2 102 入来院の寄進田（＝植元の五代田力）  
長元7 104-12 宇佐宮彌勒寺講師元命大隅八幡宮檢知疏文書・史籍  
保延元 113 五大院政所正信所 高城東郷同仲郷入來院薩摩郡井…院主石清水權主大法師 2-02  
嘉応3 117-12 八幡新田宮源明王右一補任校官之職…  
承安3 113 〔建久6年文書〕神殿十二月十八戌時為香油火焼失畢…陸社頭実檢言上如件 2-1  
安元2 116 早催国衙可令遂造營也…而云宇佐神殿云男山宝殿皆是所奉祝山頂也者 2-06  
建久5 114 八幡弥勒寺御領薩摩國新田□□ 2-10  
" 6 115 実檢 新田宮神殿全破事 御殿・若宮殿・武内社 2-11  
" 8 117 〔図田帳〕弥勒寺御領 五大院 八幡新田宮 日置莊 益山莊 2-12  
" 9 118 八幡新田宮御燈口免田…高城郡字谷口田… 2-13  
建仁2 122-13 八幡新田宮寄欲被殊任院庭御下文并国司御廢宣…  
建暦4 124 〔承安三年12月炎上〕御殿並神宮寺等損色事…高良社 善神王社 神宮寺 2-18  
建保2 124-13 高城千臺可愛陵新田八幡宮大菩薩縁起=可愛八幡新田宮者即天尊円寂塔也  
承久3 121-13 庁下 諸郡御院 可早任先例 令勤仕八幡新田宮御放生雜事 2-20  
" 1-10 八幡新田宮者大菩薩崇廟之靈社 1-25  
寛喜2 120 日本鎮守八幡三所大菩薩當國鎮守開門大明神（權執印・阿多院田庄司）2-21  
延応元 123-11 八幡新田宮御燈油免田壹町伍段… 2-25  
宝治元 127 当社者八幡三所明神之垂跡九州五所別宮專為第一 恭有五体神王面日向國天降之當初五部神前行給薩摩國遷御之後者龜山峰奉崇三所明神并五神御体為新田宮 2-30  
建長8 125 謹按旧貫天尊瓊瓈杵尊圓寂可愛陵高城千台宮今新田八幡宮是也 2-36  
永仁7 124 正殿四所社式内以下數字造營猶未作寺社在之然而仮殿朽損 不及遷宮 2-82



【付節III】【神王面関係の編年資料】《宇佐神宮史・古史傳・神代三陵志など所収》

寛治2 103-2 正八幡宮損失寶物神王面形一枚物依為往古靈物…  
嘉応2 111-22 新田宮注進御與唐鞍神王駕與丁等御裝束也…  
文治4 115-11 長御前所十二人 内陣道二人正・書生十人 宮院説・史籍  
建暦3 123-11-2 御杖人・陣道長御前一人奉持鉢參…  
嘉祐2 126-11 陳道面等修理料田一段 辨官可募之 宮院説・史籍  
宝治元 127-10-25 彼面者往古之靈物大菩薩之御軀也…承久之頃正八幡宮… 1-71  
" 10-25 阿多郡北方地頭鮫島刑部丞家高法師条々所行雖遁罪科之間… 2-29  
" 11 夺取一神王面并御鉢打破二神王面間事…國家鎮護王面也… 2-30  
" 12-30 又八幡宮寺申新田宮申神王面事先内々可尋准據例於官外記 宮院説  
宝治2 123-11-6 今夜新田宮神王面可奉歸本社事並修理事 遠泊其公記  
" 12-6 (閏) 新田宮神王面事可返本社間事於直廻有議定 宮院説  
建長元 128-8-5 (?) 神王面修復并清祓事、去月二十九日御返報承知子細之理… 2-31  
建長元 128-8-11 神王面破損下手人阿多郡北方前地頭鮫島刑部丞家高法師… 2-32  
文永12 125-2 然為蒙古降伏神王等悉赴彼鬪戰之由…是鎮護國家尊神之故 2-50  
" 1 神王面破損手下人間事…五神ノ社八当分左掖二十四社ノ中ニテ 既館説  
不詳 10-21 神王面修復官祓間事、院宣并府宣如此 王面事者 宰府自元領狀勿論也 1-27  
不詳 1-2 新田宮所司神官等申神王面破損手下人間事 八幡檢校法印状… 2-26



# 地名研究会報

第 112 号

平成 22 年 6 月 6 日

鹿児島地名研究会

I. 第 112 回例会 平成 22 年 4 月 4 日 (日) 於鹿児島市福祉コミュニティセンター

(出会者) 青柳俊二・今村誠一・上野堯史・内山憲一・川野雄一・築地成郎・

寺園貞夫・肥後吉郎・肱岡修一郎・平田信芳・柳原孝一・米原正晃

(計 12 名)

II. 大日本地名辞書読会 P. 602 ~ P. 603 祇答院・宮之城・紫尾山・蘭牟田

[話題となった地名および事項] 川路隊の進路・蘭牟田池の蘭草・花尾神社参りの道・

八重山 (ハエヤマ)・北薩の地名 (斧淵城址・藤川・祇答院・山崎・虎居・

宮之城・轟滝・紫尾山・蘭牟田・砂石など)・川合陵・市来駅の問題点

平成の市町村合併・作人五郎日記・藤川天神・花見の名所・桜島の由来

三度焼けた鹿児島・埋まった鳥居・高城郷・俊寛僧都と寒水・城上・

天辰・龍神・湯田と虎居・合志と神子・泊野と堀切峠・久富木とツブキ

## 川路隊の進路

上野 川路の率いた別働第 3 旅団は、出水から阿久根に向かう隊と宮之城に向かう隊に分かれます。宮之城で戦って、後はほとんどない状態で入来峠に来たら、鹿児島が燃えているもんだから、これはもう駄目だということで、次の朝は花尾から郡山を過ぎて、吉田の大原へと向かった。

平田 吉田の方を通っている?

上野 多分、そうだと思います。皆与志を通ったのだと思います。そのうちに鹿児島の政府軍と連絡がとれてしまします。5月24日の官軍の総攻撃が成功したのは川路隊がつながったから・・・。

平田 成る程。

上野 つながってはいたけれど、未だ線になつていなかつたのです。

平田 しかし、海には政府軍の軍艦が浮かんでいて、にらみを利かしていたから。

上野 そういうことです。薩軍が逃げると

したら、吉野・宮之浦への道を行くしかないのです。その時の進軍の速さから考えると、率いて行った先頭の人が藤崎という人ともう一人は上田 (かんだ) という人。上田という人がよく地理を知っていたということです。

平田 地元出身と考えられる。

上野 藤崎も上田も、多分、鹿児島の人だろう。私はそのように説明しています。でなきや通れない。

平田 よく地理を知ってなきやね。

上野 しかも、上にいたのは川路です。川路の配下に鹿児島出身者がいて、そういう道も知つていただろうと思います。

平田 その辺の分析が未だ足りないということでしょう。

## 蘭牟田池と蘭草

米原 蘭牟田には蘭草はなくなつていますかね。蘭牟田池付近は。

平田 蘭牟田池は水位が下がつてゐるからね。まだあるのじやないかな。

米原 残ってますかね。

上野 蘭牟田池にはよく行くけど、蘭草があるというのを聞いたことがない。

平田 蘭草はない？

上野 はい。昔のことは判りませんが、また蘭草を意識して見たこともないから、判らなかったかも知れません。

？ 池の周囲に民家がありますかね。

平田 多くはないけど民家はある。

寺園 蘭草が生えていたのでしょうかね。

上野 今は八代あたりで栽培されていますから、どうなんでしょうかね。

寺園 八代では質の高い畳表が作られています。

上野 私が見るのは、化学繊維の畳の方が多いけど。

米原 安いのは化学繊維。

平田 化学繊維が出回ると、高級品指向という昔へ返る現象が出て来るでしょう。

#### 花尾神社参りの道

寺園 吉田の大原から皆与志の方へ抜ける道があるということ。吉田から郡山への道。吉田は高い山とシラス台地の間にあります。吉田麓から蒲生への道、あれは佐山峠を越える道で西郷さんたちが帰って来た道になる。

上野 あそこの道は多分郡山の裏から東俣あたりを通って行く道。今云われた入来の方へ向う道もそうなんですが、3号線から入って川田に出ると、昔の花尾に行く道というのが残っています。今でも歩く人が多いみたいです。

平田 花尾神社参りにね。

上野 そうです。花尾神社参りです。その道は此處を通って行った可能性もあるのじゃないでしょうか。

寺園 旧入来町役場のちょっと手前から入來の町に入る道のことが、小説に書いてありました。実は、その男が帖佐・重富の方へ馬車で行って重富から汽車に乗って鹿児島に来る。銀を造る工場の前を通ったとのくだりがある。明治末年の話だけど、それ以前はどんな道だったのかな、と思います。

#### 八重山 (ハエヤマ)

上野 先程触れた川路隊が宮之城を出発して、ハイヤマを通って郡山に出た。ハイヤマという意味が判らない。

平田 ハエヤマは八重山 (やえやま) のこと。

上野 八重山と書いてハイヤマと読む？ ところが実際は八重山 (やえやま)。八重山を抜けたとなると、内之尾を通った。私は幼い時入来の清浦 (きょうら) という所で育ちました。当時、入来峠への道がなかったとすれば、鹿大の牧場がある所に出て八重山を越えて降つて来たと考えられます。入来峠の道が昔からあったのか、私も清浦で6年間育ったのですが、そんな情報は耳にしなかった。

平田 本田親虎さんが、八重山 (やえやま) と読むのは間違いだと云っておられた。八重山 (やえやま) だ、と。ハエヤマの意味は開墾した山。開墾を意味する「ハエ」に由来する地名だ、と。

寺園 出水に「ハエノダン」という地名があります。

平田 そういう地名がありますか。

上野 官軍側の『征西戦記稿』などにある地名は、彼らが聞いて書くもんだから、本当の漢字は知らんわけです。ハエヤマと書いたら書きようがないから「生エ山」なんて当て字を書くのじゃないですか。

平田 そんな例は、わりと多い。

上野 地元の表現と違う漢字が出て来る場合が多い。だから漢字にとらわれると、えらいことになる。

寺園 文字でなくて音で合わせるから混乱が生じる。

上野 われわれは、すぐ漢字の意味で判断するけど、ただ音で合わせるから全然違う意味で書いています。

#### 北薩の地名

平田 『大日本地名辞書』に出て来た地名を一つずつ整理しましょう。斧瀬城址：此処は行つたことがないので知りません。在庁国司の大前氏が拠つた所ですが、川内で勤務していましたながら行つたことはありませんでした。

藤川は藤川天神の梅の花でよく知られた所です。祁答院も行つたことはありません。山崎は昔、交通の要衝でした。虎居は寅の位置に城を構えたということでしょう。宮之城は北郷氏が都城から移つて來たので、都城に類似した地名を名付けた。轟滝は、意味どおり。滝の轟きをそのまま付けた擬音地名。紫尾山について「紫尾と渋と同音」と書いてありますが、仏教用語の須弥山は「世界の中央に聳える山」のことですから、須弥山と同類の用語で、北薩の「中央の山」という意味でしょう。蘭牟田は先程話題になった蘭草の存在が語源になったのでしょう。周囲は1里ぐらいですから容易に回れます。岸辺に水草が生えていたような気がします。佐佐礼石は「君が代」に出て来る文句を間違つたのでしょう。地元では砂石 (さざなし) と云っています。

寺園 砂石温泉と云いますよね。

平田 小さな温泉地です。

？ 佐志 (さし) はどういう意味ですか？

平田 黒木・佐志・宮之城は祁答院に含ま

れていました。佐司とも書きますが、その意味は判りません。

上野 今『列朝制度』を読んでいます。黒木は出でますが、宮之城は出で来ません。ルートが別なのか。蒲生から黒木・佐志にて大口に抜けるのですが、宮之城は出で来ません。

平田 道筋について整理したことがあるのですが、島津氏の家老が地方に文書を廻すルートは決まっていました。吉田筋とか桜島筋とか。それを見れば判る。ノートは作っていますが、記憶していません。

上野 黒木と宮之城は近くだし・・・

平田 佐志もすぐ近くです。

上野 宮之城が出て来なかつたことが記憶にあります。

寺園 その前後は？

上野 黒木の前に出て來るのは吉田。吉田から蘭牟田・黒木・曾木。それから大口とか山野。そして最後は馬越。

米原 どこ？

平田 馬越は菱刈。

上野 馬越で止まる。菱刈の馬越で終わっている。溝辺は横川・栗野へ行く道にあります、一般的には吉田から蒲生へと行つた。

平田 それらのルートは『鹿児島県史』に書いてあったと思うけど。

上野 黒木・佐志・宮之城などは、島津氏一族の私領だったので、ランクの差異で出で来ないのかと思つたりするのですが。

平田 それはない。郡山筋とか谷山筋とか呼ばれるルートが沢山あった。

上野 筋：街道の関係は？

寺園 現在のわれわれの感覚では云いたくない（笑い）。

平田 川内川を渡るのは、昔は大変だったから、右岸と左岸を分けて考えたでしょう。

上野 あゝ。

寺園 今、話題になっているのは、薩摩国と大隅国の境界線上にある所ですね。

#### 《編集時後記》

#### 公用書状送達の七筋：宿次の経路

出水筋 出水 — 阿久根 — 向田 —

市来湊 — 鹿児島

加久藤筋 加久藤 — 横川 — 加治木

— 鹿児島

志布志筋 志布志 — 末吉 — 岩川 —

福山 — 加治木 — 鹿児島

綾筋 綾 — 高原 — 荒河内 — 大窪

— 加治木 — 鹿児島

大口筋 大口 — 横川 — 加治木

— 鹿児島

寺柱筋 寺柱 — 都城 — 通山 —

加治木 — 鹿児島

高岡筋 高岡 — 高城 — 福山 —

加治木 — 鹿児島

Cf. 『鹿児島県史』第2巻、p.554

#### 諸令連廻文の経路

重富筋 重富 — 帖佐 — 加治木 —

日当山 — 曽於郡 — 踊 — 清水 —

国分 — 敷根 — 福山 — 市成 —

百引 — 恒吉 — 松山 (14所)

郡山筋 郡山 — 入来 — 横脇 — 山田

— 平佐 — 中郷 — 東郷 — 山崎 —

蘭牟田 — 大村 — 黒木 — 佐志 —

宮之城 — 大口 — 鶴田 — 曽木 —

本城 — 湯之尾 — 馬越 — 羽月 —

山野 — 小川内 (22所)

谷山筋 谷山 (附錫山) — 喜入 —

今和泉 — 指宿 — 山川 — 頬娃 —

知覧 — 川辺 — 山田 — 鹿籠 (附金山) — 坊泊 — 久志秋目 — 加世田 — 阿多 — 田布施 — 伊作 — 永吉 — 吉利 — 日置 (19所)

吉田筋 吉田 — 蒲生 — 山田 — 溝辺 — 永野金山 — 横川 — 栗野 — 吉松 — 馬闖田 — 加久藤 — 飯野 — 小林 — 須木 — 高原 — 高崎 — 野尻 — 綾 — 高岡 — 倉岡 — 穆佐 (20所)

桜島筋 桜島 — 牛根 — 垂水 — 新城 — 花岡 — 大始良 — 大根占 — 小根占 — 佐多 — 田代 — 内之浦 — 高山 — 始良 — 鹿屋 — 高隈 — 串良 — 大崎 — 志布志 (18所)

伊集院筋 伊集院 — 市来 — 串木野 — 百次 — 隈之城 — 高江 — 高城 — 阿久根 — 長島 — 野田 — 高尾野 — 出水 — 濱島 (13所)

Cf. 『旧記雑録追録』卷64

『鹿児島県史』第2巻、P.554

明治になると、上記の他に

谷山街道・加世田街道・知覧街道・伊作街道・谷山往還・蒲生往還・伊作往還・郡山往還・永吉往還・市来往還・樋脇往還・郡山往還・伊集院往還・高江往還・串木野往還などの支線が登場する。(『鹿児島県地誌』上・下を参照されたい)。

#### 川合陵

平田 今日配ったプリントについて、補足説明をします。会報111号の10ページの最後にある〔編集時後記〕平成4年の例会で江之口汎生「可愛山陵の川内五説について」の説明がありました。彼はいろいろな論文を読んでいまして、江戸時代初期には川合陵(川内で

はカワエと呼んでいる)が可愛山陵として崇拝されていた。可愛山陵は新田神社のうしろでなくて、現在川合陵と呼ばれる所にあったのだ、と。これが新田神社と結び付くのは、江戸時代の後半になってから、いわゆる国学が盛んになってから、ということです。この説は県立短大の小林という先生が論文に書いておられるのが最初だということです。

#### 市来駅の問題点

平田 これは先般、鹿大史学会で私が発表した時のレジュメです。(5)西海道諸国の郡・郷・駅の数を比較して眺めると、大隅国・薩摩国はどう考えても駅数が少ない。とくに大隅国は少ない。他の国を眺めると、国府所在の郡に必ず駅家があります。大隅国府があつた国分近辺に駅家の記載がないのは漏れていますと判断出来るのです。

そこで「市来駅」が浮かび上がります。濱島という離島との連絡を考えると、出水でも阿久根でも網津でもない、南東風に乗って行く日置郡の市来が最も便利だと気付きます。市来駅は濱島との連絡を兼ね持っていた重要な駅だということで、薩摩国駅家の最初に書かれていたのです。日置郡の市来が市来駅の比定地になります。

その時に考えて作った資料が「西海道諸国の郡・郷・駅」になります。最初は郡衙の所在地をゴシック体で書いていたのですが、親切すぎてはいけないと考え、それぞれ各自で調べてくださいという意味で省きました。西海道諸国：九州全部で駅が97あることや、郷名を掲げておきました。郡衙がどこにあつたかを調べる資料にしてください。

2万5千分1図は県内全部を持っていますが、5万分1図は1/3はぐらいしか持っていない

ません。どちらも枚数が多くなるので『大日本地名辞書』を読む時の参考資料として20万分1図を利用することにします。

ここでちょっと休憩しましょう。

#### 平成の市町村合併

平田 平成の市町村合併で自治体数は半分に減ったけれど、歴史のつながりを今後どのように解釈するのか。どのように処理するのか。例えば、鹿児島の歴史にとって一番大きなのは西南之役。あれは加治木郷とか帖佐郷・重富郷とか蒲生郷という単位で出陣したのです。所属小隊も違うし、戦った場所も違います。それを大きな範囲でまとめる、先祖がどんなに苦労したかの解釈に困って来ると思うのです。兎に角、行政の都合のよいようにまとめて行くやり方は、そのうちに困って来ると思います。

上野 始良市は重富・帖佐の昔からの住民の中には、根深い意識があるようです。私なんかは新しい住民だから地域意識は感じないけど、気位の高い面は残っているようです。

平田 どこかで、そんなのが吹き出すかも知れないね。それを、どうさばくか。

#### 作人五郎日記

寺園 明治時代に鹿児島新聞の記者をしていた入來の重水義栄(ペンネームは紫雲山人)が鹿児島弁で書いた小説があります。最初は新聞に連載していたのだけど、それを本にまとめています。本の名前が、確かね、『作人五郎日記』。ゴロは片仮名でも五郎でも意味は通じます。入來の役場と入來院家の中間ぐらいの所に古い屋敷があり、作人をちゃんと雇っています。家族とは別居で単身赴任でした。県立図書館にもその本はありますので、聞かれたらすぐ判ると思います。

平田 鹿児島では作人と云いますが、全国的な眼で見れば小作人です。麓の士族の家に行くと、土地を分けてやった人：小作人たちがやって来ると、今でも作人としての感覚で対応します。作人が士族の士族の家に来ると土間に立ったまま話をするのです。腰掛けることはしません。そんな習慣は、容易に消えるものではないのです。

上野 高山に行って昔の話を聞くと、昔と云っても戦前ですけど、曾於の衆はと見下した物云いをします。

平田 高校の教師とか小学校教師の田舎での下宿は、大抵士族の後家さんの家でした。そこで、知らず知らずのうちにそういう関係を見聞きするのです。なるほど残っているなと感じていました。

『編集時後記』『作人五郎日記』は大正元年8月、吉田書店発行。明治百年紀年行事の一環として、入来町が重水の小説4篇を1冊として複刻。書名は『紫雲山人四部作選集』

#### 藤川天神

肱岡 藤川天神というのが出てきましたがこれについて少し説明して下さい。

平田 藤川に天神社：菅原神社があつて、そこに菅原道真が来たという伝説があるので。大宰府に流された道真がこちらにまで足を伸ばしたという伝説です。果たして来たのか。それは判りません。鹿児島県には八幡社と天神社が多いです。天神社の領地に安楽寺領というのがありました。大宰府天満宮の別当寺が安楽寺で、この莊園が沢山あったのです。それが安楽寺領と呼ばれ、そこには必ず天神社があります。藤川にあつた安楽寺領にいわゆる菅原神社があつて、それを藤川天神と称して來たのです。

肱岡 道真が來たというのは、かなりの伝説ですね。

平田 そうです。鹿児島県には道真伝説が相当数あります。大宰府に流されて來た人が勝手に出て來れる筈はないのです。そういうことをやつたら、中央政府に対する反逆ですから。

肱岡 初めてこっちに來た時、藤川を尋ねながら行つたのです。相當に山深い所でした

平田 安樂寺の莊園があつたから菅原神社を建て梅を植えたのです。「東風吹かば匂い起こせよ」の歌で、菅原道真と梅の花が結び付いているだけのことです。そういうことで藤川の梅は有名になったのです。

肱岡 そのような説明が書いてあるものだから、そうかなと思って。

#### 花見の名所

平田 その説明を否定したら、にらまれるだけですから、誰も否定しないのです。私も子供が小さい時、藤川天神に花見に行つたことがあります。此處からすぐ近くの祇園之洲公園には花見客がよつちゅう来ていますけど、大体今花見に来る人たちというのは、幼稚園にも未だ行かない子供たちを連れた若いお母さんたちで、お母さんたち同志でべちゃくちゃしゃべっているのが多い。飲んべえの花見客がわいわいやっているのは、土曜日に見かけるぐらい。現在は女性の方が強いので今の花見客は若いお母さんと小さな子供たちが主という様相を呈しています。今年は寒いので、未だ満開じゃない。祇園之洲の桜は未だ七分咲き。七分でもないか。吉野公園や多賀山も、今日ぐらいは花見客が多いかも知れないけど。昭和20年代の花見の場所は長田町の水源地でした。その桜は衰えてしまつて

今は人は寄りつかなくなっている。

内山 甲突川沿いがある。

米原 この頃は花見というとバーベキューが主になって、煙があちこちで立ちこめている。

平田 バーベキューの道具が必要なんでしょうね。

肱岡 桜ならば新田神社の参道。あの道が綺麗です

平田 あゝ、川内は。私が川内にいた頃、植えられたばかりだった。昭和30年代に植えられたのです。

上野 大口の忠元公園がよく知られています

米原 花見は、紫原の道路も綺麗です。両側に桜がずーっと並んでいます。もう盛りを過ぎてますけど。

平田 私は一本桜を知っています。団地はまだなく、畠と一本桜だけの岡だった。

米原 それは、もうない。

寺園 ありますよ。

米原 ありますか。

寺園 二代目的一本桜が育っている。

平田 私は初代の一本桜に昇りました。

#### 桜島の由来

上野 桜島には桜がないのに桜島と云われるのだけど、桜島ということばの由来は江戸時代ですかね。

平田 そうです。

上野 何故、桜島なのか。他の名称はないのか。

平田 向島（むこうじま）と云っていた。

上野 何故、桜島なのか。何か意味があるのか。

平田 それは島ミカンを今は桜島小ミカンと呼んでいるけど、島ミカンを將軍綱吉に献

上することになった。どこの産かと聞かれた時に「向島産」と答えるのは、將軍家に手向かうようで恐れ多い。よい名前を考えろということになり、そこで正式に桜島という名前が名付けられたのです。

寺園 それは、何年？

平田 元禄11年。1698年のこと。藩主綱貴の命令で桜島が公的名称となります。

上野 江戸の向島と間違えられていかん、と。

平田 そう、間違えられてもいかんということもあるし、刃向かうと解釈されることも避けたのです。鹿児島では、そうですね、向えん衆（むかえんし）と、呼ばれてもいた。明治になってからも見下げた言い方として、島の衆（しまし）という蔑視した表現があったのです。大正3年（1914年）の桜島噴火の後、溶岩で埋まった所の人たちが、大挙、鹿児島に移つて来て士族たちの屋敷を手に入れます。没落した上町（かんまち）一帯の士族たちが島ん衆という言い方をしたのです。士族たちは悔しかったのでしょう。

#### 『編集時後記』

平田 拾遺和歌集や宇治拾遺物語にある物語。大隅守桜島忠信が郡司たちを集めて訓示しようとした時、年をとった郡司がいることに気付き、老人がいつまでも職にしがみついていると考へ面前に呼び出します。何か出来るかと問うと、歌を詠むとのこと。詠んでみよとのことで、その老郡司が詠んだ歌。

老はてゝ雪の山をばいただけど

しもと見るにぞ身はひえにける  
この歌で許された故事があり、戦国時代の文人墨客たちが「桜島」と名付けて歌や詩に詠んでいたことが命名の契機となった。

### 三度焼けた鹿児島

平田 鹿児島という所は1863年の薩英戦争の時、イギリス艦隊の砲撃で焼けたのが1回目。十年の戦さ：西南戦争で焼けたのが2度目。3度目は1945年の空襲で焼けている。鹿児島は、80年の間に3回焼けているのです。ほとんどが家屋敷を手放さなければならなくなつたので、鹿児島には元々の住民：地ゴロはほとんどいないので。

上野 今、十年の戦さと云われましたが、蒲生に行った時、86才の方と話をしました。西南戦争と云われないので。十年の戦さと云われました。

### 埋まつた鳥居

米原 先程の話に関連して。黒神に鳥居があります。桜島の噴火で埋まつた鳥居が。先日、牛根の居世神（こせがみ）に行きましたら、居世神集落の裏の所に鳥居が埋まっているのです。黒神のは上の方が出ていますが、完全に埋まっているのです。その辺を整備して、皆に見て貰うようにしようかとの話が出ていました。見事に埋まつていました。大正3年に埋まつたものがまだ残っているのだな、と思いました。

平田 あの辺に、そんなのがいくつかあつていいわけだよね。

寺園 この地図：20万分1図に出ている？

平田 居世神は出ている。

米原 居世神は牛根麓になる。

平田 牛根麓のすぐ近くだよね。

米原 そうです。

平田 昔の瀬戸海峡の入口になる。

寺園 桜島が噴火した時に大隅半島とつながつたことで、周囲がよく見通せない。

米原 そうです。土地所有者個人の名前を

出すのは控えますが。

寺園 個人の屋敷なんですね。

米原 屋敷というより地主さんが氏神様を祀っている。

寺園 そこは国道220号線の海寄り、それとも山寄りですか？

米原 山寄り。

寺園 「道の駅たるみず」から800メートル程垂水の方に行くと、居世神神社があります。

米原 居世神神社の山手と思ってよい。

### 高城郷

平田 渋谷一族は、鎌倉時代の中頃、武藏国多摩郡渋谷村から、川内川流域に移って来ます。高城・東郷・入来院など豪族は、皆、渋谷一族になります。

肱岡 「今日の暦」に極めてコンパクトに書いてありました。

平田 あゝ、渋谷とのつながりを。

肱岡 川内の城上に、天辰神社というのがある。

上野 それは、川内の天辰でしょう。

肱岡 いや、城上ですけど。

上野 私の家の辺りは「辰の下」と云います。天辰というのが川内にもあった。

平田 天辰は川内にあるよ。天辰は化けたのかな。

上野 あゝ。なるほど。

肱岡 天辰が化けた？

上野 じゃないかなと思う。

肱岡 私はまだ自信がないのだけど。

平田 高城は古い所です。薩摩国の国府所在地、高城郡高城郷だった。だから古い要素が沢山残っている。

寺園 文化が最初に開けて所というのではなくて山の中とか川のほとり

に水田がある、そう云つた所にある。

平田 広い所は早く開けた所と錯覚を起すのですが、山田という所が最も早く開けている。というのは、水を引き易いから。高城は古い地域で、いわゆる高城郷の中心地だった筈です。近世では麦之浦から西方に出る道が街道になり、高城麓・城上の方にはあまり人が行かなくなる。川内高校に7年いましたが、城上には行ったことがなかった。

肱岡 先程の藤川天神。あれは、湯田の方から上って山を越えて入ったという。

平田 湯田の方から入った。なるほど。

肱岡 湯田は結構、町ですよね。

### 俊寛僧都と寒水（そうす）

平田 北薩には菅原道真が来たという伝説と、もう一つはこちらに流されて来た有名な人物は・・・ちょっと名前を忘れた。硫黄島に流されたのは、誰だ。

米原 安徳天皇と。

平田 えっ？

米原 俊寛。

平田 あゝ、俊寛がやって来たという俊寛に因む地名は多い。阿久根あたりに。

米原 そうですね。阿久根の脇本あたりに僧都ヶ岡。

平田 僧都ヶ岡。ところが、僧都・寒水という地名は、こういう形で水が溜まると、跳ね上がる・・・。

肱岡 「しおどし」ですか。

平田 「しおどし」を「そうす：寒水」と云います。「そうす」にからんで俊寛僧都伝説が根付いたのです。

米原 先日研究発表を聞いていたら、曾我兄弟の墓というのが出てきました。

平田 それは溝辺あたりにもある。曾我兄

弟の兄の方に恋した虎御前の墓と結び付けている。その虎御前は、ゴゼ：瞽女どんの虎女だったかも知れない。それらと結びついて曾我兄弟の話に発展して行くのです。

### 城上・天辰・龍神

川野 城上（じょうかみ）は、何故、城上といふのですか？

平田 高城郷の上の方にあったから城上と云つたのだろう。

肱岡 麓の方が下（しも）、上の方にある集落が城上。

平田 高城郷を上と下に分けた地名。

川野 天辰は、何故アマツと呼ばれたのですか？

平田 尼さんが立っていたからという。国分寺は男性の僧寺のこと。国分尼寺がどこかにあった筈です。尼さんが立っていたということから、尼立になったとの故事つけ。

米原 水神信仰みたいなものがあるかなと思つたりもしたけど。川内川に関わる水神信仰みたいなものがあったのか、と。

肱岡 川内ではガラッパ：河童のことは聞くけど、神様の話は聞かない。

平田 ガラッパの伝説は有名だけど。

寺園 水難を防ぐ水神は必要だけど。

米原 ガラッパが水神さんになるのですよ

寺園 あゝ、なるほどね。そういうこと。

川野 上池と下池。

平田 あゝ、上池（かみいけ）。中郷の？

川野 神社に龍の形をした手水鉢がある。

平田 大抵の所に、龍は彫ってあるのではないか。

川野 どこにいるのか？その龍は？拝殿の扉にも龍の彫刻があります。

平田 いわゆる手水鉢に龍の口から水が出

て来る形。

川野 龍は太刀を持ったり、口にくわえて  
いる。

平田 龍が太刀をくわえている？

川野 先日、龍が太刀を持っているという  
説明がテレビでありました。

湯田と虎居

肱岡 湯田温泉近くの神社で龍を見ました

川野 先日、鶴田から合戦の跡を廻って、  
藤川を通って湯田から紫尾温泉を経て宮之城  
に出ました。

平田 川内川流域には温泉が多い。湯田温  
泉もその一つだけだ。

米原 この湯田は？

平田 宮之城の湯田で、川内の湯田とは違  
う。川内の湯田は高城の湯田。

上野 川内川の湯田は栗野と大口の境にも

平田 栗野と大口の境にも湯田がある？

上野 湯田でなく、菱刈の湯之尾です。

平田 湯之尾は、菱刈から川内川を小舟で  
渡って行く所でしょう。

川野 虎居城はどこから見て寅の方向なん  
ですか？

平田 寅の方角に城を建てたということ。

川野 どこから見て？

平田 子・丑・寅だから、西の方から見る  
と寅の方角ということ。見た所：起点はそん  
なに離れていないと思う。

《編集時後記》 寅は東の方に近い東北東の  
方向。子が北卯が東だから、寅はN60° Eに  
なる。逆にいうと虎居から申の方向S60° W  
に起点を探すとよい。恐らく西南西の方向に  
ある山だろう。虎居は虎が伏した格好との説  
もあるが、日本には虎は棲息していない。虎  
が伏した姿もどの方角から見た話なのか。

### 合志と神子

米原 鶴田の神子（こうし）。どの時代から  
神子と書くようになったか判りませんか。

平田 合志（かわし・こうし）に近い音の地名と  
して神子が比定されたのです。角川日本地名  
大辞典には、それぞれの地名の初見はいつと  
大抵書いてあるけど、書いてなければ判らな  
い。

《編集時後記》 江戸時代の鹿児島藩の記録  
は「神子」になっていた。また、江戸時代は  
幕府の統制がきびしく、地名は表記も容易に  
変えられなかつた。

寺園 神子以前の合志、あれは熊本の合志  
と・・・。

平田 つながりがあると見られています。

寺園 勝手に推定すれば、肥後の合志の  
人たちがこっちに移住したとか・・・。

平田 そういう説です。薩摩国については  
肥後国から移ったとの記録はありません。大  
隅国には豊前国の民二百戸を移したとの記録  
があります。薩摩国の合志とか宇土とか飽  
多などに類似している地名は、肥後国からの  
移民と解釈されているのです。最も類似して  
いるのが神子です。

寺園 勝手に出まかせに云っているのでは  
が、合志が神子になったと、同音であるので  
そうあって欲しい。江戸時代はわりとそういう  
のが多いのじやないですか。地名は勝手に  
作った。音が同じであれば勝手に文字を當て  
はめた。

平田 どこでも歴史を古く見せようと思つ  
て、そういう操作をしたのでしょうか。

《編集時後記》 幕府に国内の地名や石高を  
報告してからは、勝手に地名を操作すること  
は許されなかつた。

### 泊野と堀切峠

川野 山崎から入って行く泊野（とまいの）。  
紫尾山野籠の泊野。

平田 そうだね。こういう（大日本地名辞  
書）のを読んでも、鹿児島県の隅から隅まで  
の踏査は不可能に近いわけだから。

上野 出水と宮之城を結ぶ道。今は大抵、  
328号線を通ります。泊野から堀切峠を越え  
る道は、古いのでは？

平田 堀切峠を越える道？

寺園 多分そういう道があったでしょう。

平田 古くは堀切峠や横座峠を越える道、  
いろいろな道があったでしょう。

川野 堀切り峠から降れば、すぐ藤川天神  
に向かう道に出る。

上野 泊野から宮之城へは、そんなに時間  
はかかるない。

川野 泊野の手前から折れると、藤川天神  
の上にある本俣（ほんまた）に出る。

平田 車社会ではいろんな所にすぐ行ける  
けど、歩いてそんな所：堀切峠・横座峠・本  
俣などに、足を踏み入れる人は沢山はない  
かも。

### 久富木とツブキ

寺園 久富木（くぶき）は？

平田 「かごしま川由来考」を連載した時  
に久富木川のことにも触れたのは記憶してい  
るけれども、その意味は何だったか、今は思  
い出せない。多分瑞祥地名と説明したはず。

《編集時後記》 「かごしま川由来考」では  
室町時代に見える地名で久富貴とも書く。富  
貴が久しく続くことを願う瑞祥地名と説明し  
た。

上野 久富木を調べているのですが、ツブ  
キというのも出て来ます。

寺園 ツブキ？

上野 何か、場所を説明している。

寺園 地名として出て來るのですか。それ  
とも、普通の一般名？

上野 私は一般名だろうと思います。

寺園 屋敷の中には母屋の他に、隠居部屋  
があり馬小屋があり廁があつたり、所によっ  
ては肥料小屋があつたり氏神様（うっがんさあ）  
があつたりするのだけど、その屋敷の一角に

初めは島津光久の時に農業生産を挙げよう  
ということで、そういう指導書を出している。

こげんせえ、あげんせえと云う農作業の手順  
や肥料のつくり方についての指導書を出して  
いる。馬小屋はこげんして藁くずや粗穀を敷  
けとか、さらに馬糞とか庭の落葉や雑草など

を集めて、屋敷の一角に穴を掘って溜めろ、  
と。泥水はそっちに流れるようにしろと、そ  
ういう指導をしている。その穴がツブキ。

《編集時後記》 橋口満『鹿児島方言大辞典』  
に、ツブキは淵・用水池・溜池。ツブキゴエ  
：掃き溜の木の葉の腐ったもの、茄子の肥料  
等にする、とある。

上野 そうすると、大体、本当の意味が判  
って来た。

寺園 これはね、子供時代に体験して知っ  
たことです。

米原 水が出て来る所をツブキと云つたり  
穴のそう云つた低い所を鹿児島語ではツボッ  
という。

上野 実態はいろいろあるかも。

寺園 北薩と南薩は違うかも知れない。

米原 ツブキのツブはツボのことかも知れ  
ない。

平田 ツボの漢字があるの？

寺園 ありましたかね。私も知りません。

上野 呼ぶ時は、そういう。

寺園 それを、去年の『鹿児島史談』第6号に書いておきました。

平田 『鹿児島方言辞典』をみれば、あるかもね。

《編集時後記》 冬に芋類えお貯蔵する穴を「芋ツボ」とか「カイモツボ」と云つたりする。しかし『鹿児島方言辞典』には収録され